
どんと恋

霧野ミコト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どんと恋

【Zマーク】

Z9976C

【作者名】

霧野ミコト

【あらすじ】

「美形なんて死にさらせ……どいつもこいつも見た目だけか……」そんな怒号と破壊音から始まつた。安穏染みた不協和音だけの生活から動き始めた。狂想曲のような狂った速度で動き始めた。行きついた先の僕はどうなるのだろうか。何を求めるのだろうか。それさえ、分からず動き出す。狂狂くるくると「いや、そんなたいそれた展開じゃないしじうが」「そりやそうだ」「ただの頭の痛いコメディーね」

プロローグ

少女はいわゆる美形、というもののが嫌いだった。

もちろん、綺麗なお人形と、毛並みの綺麗な動物なんかは大好きだ。ただ、人間に關して言うと、美形と言つものを見るたびに、恐ろしいほどまでの嫌悪感があった。

その原因は、全て、家族。

というか、ぶつちやけ姉だった。

少女の家系は、古くから伝わる武家の一族で、それはそうとう裕福な家庭であった。

そして、お金持ちはありがちに、それはたいそう美形な両親がいて、自分を含め、家族全てが全員美形だと言つ一般庶民が聞いたら、とりあえず、嫉妬で殺してしまつんじやないかと危惧するぐらい恵まれていた。

そして、美形にありがちに、傲慢だった。

というか、単にわがままだつた。

とりあえず、彼女の姉は、自分の美貌をいい事に、群がる男子を下僕のように使いまわした。

その姿を見て育つた少女は、それだけで十分ダメージはあつた。けれど、それだけだつたら、まだ嫌悪感を抱くまではいかなかつただろう。

お金持ちの美人とはそういうものなのだ。

そう思い込んで、自分もそれに倣つていただろう。

しかし、そうならなかつたのは、彼女に群がる美形たちのせいだつた。

とりあえず、幼少の時から如何なくその美貌を振りまいて、男性陣を籠絡していた彼女である、当然もてる。

もちろん、美形たちも、我先にと飛びつく。

しかし、その口説き文句がいけなかつた。

いや、彼女がおかしかつただけなのかも知れないが、どちらにしろその口説き文句が原因だった。

『ふつ、俺のような男には、君のような人じゃないとダメなんだ』
『僕と同じレベルの美しさを持つ君は、僕といるべきだ』

『君の美しさは、私の美しさを更に磨かせてくれるだらう、一緒にいてくれないか』

などと、とりあえず、頭がとち狂つているとしか思えない口説き文句を堂々と吐き続けたのだ。

確かに、言わんとしていることは分からぬでもないが、あまりにもお粗末。

ナルシストにも程がある。

しかも、それが延々と続くのだ。

彼女が嫌いになつても仕方がない。

中学にあがる頃には、美形を見るのでさえ嫌になつた。

当然、美人である自分の事も大嫌い。

いつそのこと整形して、ぐちゃぐちゃにしてやろうかとも思つたが、うまいいいわけが浮かばないのでやめておいた。

両親共々、整形には反対派だからだ。

とはいへ、唯一の救いは美形万歳、じゃないところだけだらう。

まあ、もちろん、本音は美形に越したことはない、ということだろうが。

なんにせよ、整形も出来ない彼女は、当然美形のまま。

最後のあがきとお手入れも適當、化粧もしないし、身だしなみも整えない。

そうしようとしたが、あつさり邪魔が入つて、美形のまま。

武家の御嬢様としての嗜みを冒涜する、とのことで、これまた、両親に却下されてしまつたのだ。

ある意味不遇と言えば不遇なのかも知れない。

もちろん、一般庶民にしてみれば、おそらく贅沢な悩みなのだが、知らぬは本人ばかりなり。

そんな悩みを持つ少女がいた、そんなある日のとある場所。

細かくは、高校二年生の文化祭ちょうど一月前の放課後の学校の第二教棟の校舎裏であるが。

そこで、とある少女は、一人の少年に出会い。

それは、そのとある少女にとって運命的な出会いとなる……

といいな、と思つたりする、そんな少女の以外と少女趣味な思いから出来上がった物語である。

第一話 変革への序曲

「「めんなさい。貴方と付き合つ事なんて考えられません」
声が聞こえた。

鈴の音のような凜とした澄んだ声。

もちろん、声の主は分かる。

まあ、この学校では割かし有名人だ。

美人で成績優秀な御嬢様。

これで、有名にならないほうがおかしい。

もちろん、僕も憧れてたりするけど。

いや、やっぱり、美人は世界の宝だ。

美人は三日経てば飽きると言つけど、あれは嘘だな。

もう一年以上見てきた人間としては、飽きたことはない。

何度も見ても、美人はいい。

それが、いつも一緒にいると言つんだ。

素敵な事じゃないか。

とはいって、だからと言つて、告白するつもりは毛頭ない。

残念ながら、僕には特攻魂なんてない。

神風特攻隊の事を素直に尊敬はしているが、真似は出来ないのだ。
悲しいかな、現代っ子。

そんな強い心なんて持つていません。

まあ、それ以前に、彼女には、もう一つ有名な噂があるんだけれど
も。

とはいって、別にたいした噂じゃない。

これも、ある意味、ありきたりと言つちゃあ、なんだが、彼女は今まで一度として、告白を受けて、オーケーを出した事がない。
とりあえず、一度もない。

それが、どんなイケメンだろうと。

まあ、彼女自身よく言つている事らしいのだが、

『美形なんて死ねばいいのに』

とまあ、自分の姿を棚に上げて、恐ろしい事を言つていたらしいのだ。

とはいへ、自分の容姿も気に食わないらしいので、ある意味筋は通つてゐるんだろうけど、開けっぴろげすぎて、それを嫌つてゐる人もいる。

まあ、有名税つて奴だ。

なので、基本、イケメンは却下される。

だからと言つて、量産型凡庸男子が特攻をしかけても、あつさり負ける。

というわけで、ただいま連勝記録を大幅に更新中。

なんにせよ、すごい事だ。

ちなみに、なんで、僕がそんな事を知つてゐるのか、と言つと……

実は、僕と彼女は幼馴染なのだ！！

そして、昔、結婚の約束をしたのだ！！

……というくだらないルートはなくて、単なる偶然。

いや、偶然と言うか必然なんだろうけど。

とりあえず、今いるのは、あれだ。

第一教棟の校舎裏。

で、校舎裏と言えば、人通りが少ない。

というわけで、導き出される結果として、とりあえず人には見られたくない痴情を行う場所である。

まあ、基本は告白だが、たまに、いたいけな少年には、少々刺激の激しい情事が行われているときもある。

キスだが。

もし、あらぬ事を考えていた人がいたなら、教えてあげよう。

いくら、人通りが少なくて、それなりに人目はある。

隠れてこそこそキスぐらいならできるだろうが、それ以上の事なんて、できるわけがない。

もし、そんな事が出来ると考えていたなら、それはゲームのやりす

ぎだ。

もう少し、現実と妄想の区別をつけてもらいたい。
と、話がそれてきたが、そんな痴情が行われている場所に、なぜ僕
がいるのかと言うと、簡単な話しだ。

とりあえず、静かな場所が好きなので、ここに退避しに来ているの
だ。

さつむと家に帰ればいいと言われるかもしれないが、これが残念な
話し、実は僕は電車通学なのだ。
しかも、運の悪い事に、たいして栄えていない街である、電車なん
てものは、一時間に一本しか通っていない。
そして、そこで、導きだされる答えは、一つ。
電車が来るまで待っている、というわけだ。
ちなみに、駅は、学校のすぐ傍だ。

利便性を考えてくれてありがとう、学校。
などと、しみじみと思ったことも何度もある。
ただ、近すぎるが故に、暇つぶしが出来ない。
まあ、教室やらにいればいいんだろうけど、わびしいかな、僕には
友人がいない。

いや、いないわけじゃないんだけど、バカして盛り上がりがれる友人が
いないのだ。
それ以前に、バカ騒ぎを毎日するのが好きじゃない、というのもあ
るんだが。

やはり、バカ騒ぎは、たまに、に限る。
そんなわけで、こうして、退避しているんだが、いつもいつもいる
せいで、こうした痴情を見てしまうわけだ。
もちろん、堂々といたらばれるから、隠れている。
とはいって、それも、運良く見つけた、隠れ家なわけだけど。
それは、僕が入学してすぐの時だつた。
とりあえず、安息を求めた僕は、静かに慣れる場所を探した。
すると、そこには、なんと……

秘密の入り口があったのだ。

まあ、実際は備品置き場かなんかだらうけど、それなりに広いスペースがあつたので、そこを秘密基地としている。

小さいながらも窓があるから、換気も出来るし、蛍光灯もある。退避するぐらいにはちょうどいい。

実際、お昼もたまにここで取っている。

もちろん、ドアが付いてるから外からは、何がいるのかなんて分かんないし、元々付いていなかつた鍵も僕が付けたので、あけられる心配もない。

まあ、そちらへんで適当に買つた安い錠前みたいな奴をつけているだけだから、力づくでやられたら壊れてしまうだろうが。

でも、そんな事をする奴はいないから、大丈夫。

卒業まで安穩とした生活を……

どがしゃああああ！！

不意に破壊音が聞こえた。

すぐ傍で。

「 美形なんて死にさらせ……どいつもこいつも見た目だけか……」

ついでに、そんな絶叫が聞こえる。

しかも、いつも以上に大音量で。

「 ああ、もしかして、僕の安穩な生活も、これでおしまい？」

現実逃避をしてみるという選択肢もあつたけど、やめておいた。状況が余計に悪化するだけのようだし。

さて、どうしたものか。

とはいって、やることは一つしかないわけだが。

部屋の隅で家から持つてきたタオルケットで自分の身体を包んで震えることだ。

とりあえず、へたれと思った人間がいたら教えてあげよう。

女と言う生き物は……

化け物なんだよ。

それ以上でも、それ以下でもないんだよ。

いや、化け物以上はあるかもしれないが。

まあ、なんにしても、恐ろしい生き物なんだよ、女は。だから、見つからないように隠れておくしかないわけだ。

「あんた、そんなところで何やつてるのよ」
て、速攻で見つかってしまった。

まあ、覚悟はしてたけど。

ここ、狭いし。

「ふーん、そう、分かつたわ。ここで、あんた見てたわけだ。変態ね」

しかも、聰明な彼女。

あつさり、状況を把握してしまったようだ。

しかし、凹む。

変態だなんて。

好きで覗いてたわけじゃないのに。

ただ、呑気に休んでいる僕の前で、勝手に痴情を行つていただけだ。まあ、怖いから言わないけど。

「うわ、鍵までつけてる。つか、これ、あんたの私物でしょ？」
までやるとは、犯罪よ？」

ついに犯罪者扱い。
もしかして、刑務所行き？

うーん、それは勘弁だな。
「……とりあえず、状況説明をさせてくれない？」
「どうわけで、とりあえず、歩み寄つてみた。
「変態が話しつけないでくれる？」

『だが、彼女は聞く耳を持たなかつた』
どこかで、懐かしいモノローグが聞こえたような気がする。
でも、彼女の言葉も当然と言えば当然か。
どこから、どう見ても変態にしか見えないし。

「いや、実は変態じやないんだ」
とこうわけで、もう一度挑戦してみた。

「その姿と、この部屋の状態から見ると、変態以外なんでもないじゃない」

『説得に効果はないようだ』

また、懐かしいモノローグ。

ちくしょ、僕の明日はどうちだ！！

「……分かった。変態でいいよ」

そんなの知るか、というわけで、明日を見るのをやめて、諦める。なんだか、面倒になってきたし。

まあ、もし、問題になつたら、適当に言い訳しよう。

そろそろ、帰らないといけない時間だし。

とりあえず、鍵を見てみるが、完璧にぶつ壊れているので、使えそうもない。

ただ、ドア自体は壊れていない。

だから、使おうと思えば使える。

まあ、ばれてしまつた以上、使えそうにもないが。

そこはそれ、諦めるしかない。

とりあえず、僕はそろそろと彼女の脇を通り、帰途についた。

まあ、見えなくなるまで、鋭い視線で見られていたけれども。

第一話 見当違いの嫉妬

翌日の昼休み。

無事に朝一番のホームルームは耐え切った。

何がどうなるか戦々恐々としていたが、お咎めはなかつた。

まあ、まだ安心は出来ないが。

いつ、喋られるか分かつたものじゃないのだ、『氣を緩めるべき』ではない。

「ねえ、ちょっと、いいかしら？」

でも、その前に弁当の準備、と思つたといひで、聞きなれた声。

思わず、びくつと反応する。

冷や汗がだらだらと出てくる。

おまけに、周りから熱視線。

生きた心地がしない。

これが、有名な美人さんと付き合つてゐるのを妬まれて、なら、まだ報われるけど、実際は変態疑惑をかけられての尋問のために呼び出されているだけなので、報われない。

「あら、ちょうどお弁当なのね？一緒に食べながらお話、なんてどうかしら？昨日の場所で」

「うん」

だからと言つて、まさか逃げるわけにもこゝまい。

逃げたら後が怖いし。

彼女の後について歩く。

まあ、行き場所は確定してゐるんだから、わざわざ後を追わなくともいいんだけど、なんとなく雰囲気でそうさせられてしまつ。

おまけに、視線が痛い。

とりあえず、誰だ、こいつ、みたいな目で見られてるし。

しかも、かなり妬ましそうな目だし。

思いつきり叫びたい。

妬ましいと思われるような関係じゃない、と。

まあ、状況を分かつていかないから仕方ないんだるうけだ。

第一教棟を抜け、それぞれ靴をはきかえると、第一教棟の校舎裏へと向かう。

まさか、昨日の今日で来るとは思わなかつた。
にしても、それより、どうして彼女が僕をここに呼んだのか、それが気になる。

とりあえず、こちらの言ごとに分を聞いてくれるのだろうか。

それとも……

私刑だろうか？

前者だといいんだけどなあ、と思いつつ、歩を進める。

そして、いつもの秘密基地の中へと入る。

鍵は昨日の内に壊れたせいで、かけられない。

しかたないだろう。

というか、こんなとこひを誰かに見られでもしたら、たまらない。
絶対に良くない噂が飛び交ううぞ。

彼女はそれが分かっていて、やつてているんだろうか。

男と一人きりで密室へと向かう。

誤解されても仕方のない状況だ。

まあ、僕にはそんな勇気がないから、間違いなんて物さえ起きない
だろうが。

「とりあえず、話しさは食べながらでいいわね？」

「うん」

それは、構わない。

かなり気を張つていたせいで、お腹はもうペーぺー。

というか、基本的に育ち盛りの男の子は、常にぱらぱらなのだ。
持つてきた包みをあけると

「いただきます」

そう言つて手を合わせるとスタート。

これは、もうちっちゃな頃からの癖だから、どうしようもない。

それに、言わないとなんとなく居心地が悪くなる。

「いただきます」

彼女もそうなのかは知らないが、しっかりと手を合わせて、そういうと食べ始める。

小さにながらも色とりどりのおかずが並び、見ただけでバランスのよさそうなお弁当だと思つ。

育ちが違うと、いつも違うものかな。

そう思いつつ、自分の弁当を食べる。

バランスもさほど良くないし、味も普通。

まあ、それが嫌いだというわけじゃないけれど。

食べられるだけ幸せ、なんて事を言つつもりではないけれど、僕にはこういつお弁当の方が好きだ。

落ち着くし。

「で、質問。あんたは、こんなところで何をしてたわけ？まさか、本当に覗いてただけ、なんてわけないでしょ？」

不意の質問。

でも、僕にとつては願つたり叶つたり。

「電車通学でね、学校が終わってもしばらく電車がないから、ここで暇つぶし。うるさいところが嫌いだから、静かなこの場所で退避してるの。別に誰かの何かを覗きたくているわけじゃない。そこに窓があるし、声も聞こえたりするけど、基本的にここでは、宿題とかしてるから、そつちは気にしないようにしてこい」

いい訳をさせてくれるのなら、渡りに舟だ。

とりあえず、いいわけさせてもらおう。

まあ、うまく行くとは思えないが。

「ふーん、そう。分かった」

案の定、手ごたえはあんまり良くない。

「聞いた通りの人間ね」

彼女はにやりと笑う。

背筋がぞつと冷える。

なんとなく捕食者がえさを見る眼と同じだ。

「クラスで孤立しているわけじゃないけど、特別誰かとつむわけでもない。それなりに勉強でもスポーツでも活躍するけど、目立つわけでもない。扱いやすそうに見えて、扱いやすくはない。ただ、教師からは高い評価をもらっている」

どうやら、クラスと云つか、いろんな人から、僕の話を聞いたのだろ。

まさしく僕、といった感じだ。

「そりやつて弱い小動物のよう見せかけているのは、もちろん演技よね？」

くす、と笑うと、そう続ける。

いやはや、怖いものだ。

「いや、演技なんかじゃないよ。正真正銘、怯えているんだから」
ただ、訂正させてもうえるのなら、多少演技はしていても、本当に僕は怯えている。

本当に怯えているからこそ、弱い小動物の真似ができるわけだし。

「ふーん、まあ、いいわ。とりあえず、あんたの言っていることは信用してあげる」

それは、どっちの意味だろうか。

一瞬、分からなかつたが、おそらく両方だろ。

もし、どちらかなら、限定の言葉なり何なりをつけるだろ。

それをしないんだから、どちらとも、と考えるのが自然だ。

「にしても、ここはいいわねえ」

その証拠に、話題が変わつている。

いや、もしかすると、何かの前置きなだけなのかもしけないが。

「あんたの言つ通り静かだし、それに割と広い。いつから使つてゐるの？」

「入学してちよつとからかな。誰かに入られなつて、一応鍵を

内側から閉めてる」

いきなり、誰かとじつて対面、では困るから。

実際、何度か、生徒がここを開けようとしたけど、鍵がかかっているため開かなくて、諦めていった。

鍵をかけてなかつたらと思つたらだつとしない。

「ふーん、学校側から許可は取つてゐるの?」

「ううん、無許可。ただ、ここは長い間使われてないつて話を、担任にそれとなく聞きだしてゐるから、見つかることはまずないかな」許可なんて取るわけないし、リスクはちゃんと回避する。

当然だ。

下手して、困るのは僕なわけだし。

「じゃあ、私がここを使つても、構わないわけね?」

つまり、僕に明け渡せ、ということなのだろう。

すいぶんとわがままな。

「別にいいけど、荷物を全部持つて帰るのに多少時間がいるから、すぐ、つてわけにはいかないよ?」

とはいへ、別に異論はない。

秘密基地がなくなるのは辛いけれど、それでごねられて、後々面倒な事になるよりかはましだろう。

ただ、ここにおいてある荷物は多くはないとは言え、決して少ないわけでもない。

一回一回では持つて帰るのは無理だろう。

明け渡すことに関しては、異議はないが、多少の猶予は欲しい。

「それなら、構わないわ。置いておいても」

とはいへ、彼女はあつさり否定。

ということは、全部強奪?

ガキ大将もびつくりのジャイアニズム?

それとはちょっと違うかもしだれないが、あまりにも横暴。

「はい、それがあんた用の合鍵。今までどおり、私に気にせず、好きなときに使つて頂戴。私も勝手にさせてもらつわ」

と思つたのだが、どうやら風向きがおかしい。

どうにも、僕にも利用権があるようなそぶりだ。

いや、あるんだらう。

じひして、合鍵を渡すのは。

けれど、それはまたじひして?

聞いてみたい。

だけど、聞けない。

なんだか、今日は想定外の事が多すぎで、そんな余力がない。

ところわけで、諦めてせつやとお弁当を食べてしまおう。

第二話 奇妙な逢瀬

それから、奇妙な彼女との逢瀬が始まった。

いや、別に、そこになんらかの恋愛感情がついてまわるわけじゃないから、逢瀬、とは言わないだろうが。

それでも、彼女とはちょくちょく会つた。

まあ、基本的に、放課後はいつもいるし、お弁当の時も、ほほっこ。彼女は、ほとんどいつもここに来ているから、会うのは当然だろう。けれど、逢瀬が続いたからと黙つて、仲が良くなつたわけでもない。多少、会つたびになんらかの会話はするが、それでも、そんなたいしたことは話さない。

普通の会話なんて、一言一言だ。

仲が進展するような状況ではない。

ここに呼び出されたときの事も、誤解は綺麗に解けている。

帰つてすぐ、質問攻めにあつたけれど

『彼女の落とし物を拾つてあげたら、そのお礼を言われただけだよ。いい人だね。わざわざお礼の物まで用意してくれたんだから。まあ、すつごく大切だったものだつたらしいけど』

そう言つておしまい。

お礼の物をもらつた事を多少妬まれたし、何をもらつたか見せると言われたが、食べ物をもらつて食べてしまつたと言つたらもうおしまい。

拍子抜けするほどあつさつと引き下がつた。

多少の嫉妬だけ。

自分の口がうまかったのか、それとも、単に僕と彼女がどうこうなるとはやはり到底思えなかつたのか、どちらじる助かつたのは助かつた。

おかげで、僕は比較的平和に過ごしている。

比較的、といつ言い方になるのは、たまに彼女が荒れるからだ。

もちろん、理由は一つ。

鬱陶しい告白。

告白があつた日はたいてい荒れる。

と、うか、会つた日は全て荒れていた。

おかげで、その日は口撃の嵐。

こっちの精神力を根こそぎ奪つてくれる。

もしかすると、そのために、ここに僕が来るのを許可しているのか
もしれない。

彼女の噂のどれ一つにも、口が悪いとか態度が悪いとかそういうた
話は聞いた事がない。

と言つことは、外面は思いつきり猫。

だから、本当の姿を知つてるのは、僕しかいなくて、そんな僕だ
から、建前を気にせず言いたい放題に言える。

要するに愚痴要員と言つたところか。

それなら、どうあがいたつて、進展があるはずがない。

まあ、僕個人としては、鑑賞さえ出来ればそれでいいから、別に構
わないのだが。

凡人には凡人らしい夢を。

有名なアイドルと一緒にいる。

それだけで十分だ。

それ以上を望んで散るのもばかばかしい。

まあ、それだけの覚悟を持つた感情じゃないから、というのもある
のだが。

なんにせよ、今の状況で十分なのだ。

「これからが、問題ね……」

不意にぽつりともらした。

いつもの「」とく、今日も今日とて一人して、隠れ家に来ているのは、
僕と彼女。

だから、当然彼女となる。

ちなみに、もうそろそろで文化祭。

それだけで十分分かる。

学外からのナンパやら生徒からのお誘いの話しだらう。
まあ、人気者の彼女なら仕方ないだらう。

ちなみに、僕の予定は決まっていない。

とりあえず、クラスの出し物に参加はするが、そんなに長時間縛られたりはしないし、誰かと一緒に回るわけでもない。
おかげで暇。

彼女とは対称的だ。

まあ、適当にぶらついた後、ここで昼寝でもしてればいいだらう。
ああ、侘しき学園生活。

もう少し誰かとつむことを考えたほうが良かつたのかもしない。
なんて思いもしないでもないが、仕方ない。

こういう時、騒ぎたかつたら、いつも騒いでおかないと。

いつもクールか、いつも大騒ぎか、どちらにつくしか出来ないのだ。
ケースバイケースなんてことは無理なのだらう。

残念。

「とりあえず、この男を仮の恋人にしたてあげてみようかしらねえ
びくつ！」

思わず身体が震え上がる。

なんとも恐ろしい事を考えるのだらう。

他の誰かなら諸手を上げて喜ぶだろうが、僕には到底そんな風に思えない。

特攻精神はないのはもちろん、そんな明日がどうなるもや知れない
日々に足を踏み出すような醉狂な性格ではない。

確実に殺される。

「でも、この男じや、誰も認めないだらうし、私自身も演技とは言
え、恋人にするんだつたら、もつと好みのタイプの方がいいしねえ
……」

ぐさつ！

今度はぐさつとぐる一言をビリウム。

でも、忌避すべき自体にはならなくて済んだだけまさか。

いや、もしかすると、もつと状況が危うくなる可能性もある。

時計を見る。

まだ、多少は早い。

ただ、駅構内で暇を潰せないわけでもない。

良し。

「じゃあ、そろそろ帰るね」

逃げよう。

僕は、そそくそと帰る準備を整えると脱出。

嫌な予感がするときは逃げるに限る。

まあ、その可能性はずっとずっと低いのだが、それでもゼロじゃない。

なら、出来るだけの事をして忌避すべきなのだ。

第四話 保健室の女神様

そんな翌日。

学校に着くと、やけに視線を浴びているように感じられる。気のせいかと思いつつ、自教室に入つたら、余計にひどくなつた。もちろん、思いつるのは一つだけ。

彼女との逢瀬の事。

けれど、その割には、視線はそんなに強くない。

多少嫉妬の視線も混じつてはいるが、それもそんなに強くはない。むしろ、困惑、奇異、そんな感じの視線。

果たしていつたいどんな事が、そう思いつつも、動けない。あくまでも、こうじうときは、向こうからアクション起こしてもらわないと、こちらからは動きようがない。

まさか、いきなり

『僕が何かしましたか？』

なんて聞くわけにはいかない。

でも、この様子じゃ誰にも聞けそうもない。そんな微妙な空気の中、時間が過ぎていく。授業は次々と消化されて行き、いや、昼食。そのタイミングだった。

「あのせ、お前、今から誰かとお弁当食べるのか？」不意にクラスメイトからたずねられた。

それは、どうやらクラス全員の総意らしく、じつと僕の方を見ている。

「えつと、まあ、そうだけど、それがどうかした？」

それに、多少びびりながら、とりあえず答えてはみる。

答えてはみるが、反応はない。

いや、何か信じられないことが、今日の前で起きている、みたいな表情はしているが、言葉を返してくれないのだから、仕方がない。

「なあ、お前、放課後は誰かと一緒にいるのか？」
とりあえず、待つしかないのか、なんと思っていたら、別の人気が言葉を続けた。

けれど、こっちの方が驚きだ。

やはりこの状況で考えられるのは、彼女に関する事。

ということは、もしかして、僕と彼女が一緒にいるところを見つかつてしまつたんだろうか。

となると、隠れ家がばれている可能性も大きい。

うお、かなりやばいんじゃないのだろうか。

「えつと、まあ、一応」

でも、だからと言つて否定は出来ない。

とりあえず、未だに状況を完璧に把握したわけじゃないのだ。

出来るだけ、踏み込んで、情報を手に入れたい。

「昨日、その人に何か相談されただろう？文化祭の事とか？」

思わず、背筋が凍つた。

まさか、ここまで、ばれているとは思わなかつた。

これは、かなりやばい。

もしかしたら、僕が誰かの痴情を見ていたように、僕と彼女の事を見ていたのかもしれない。

「……うん」

もう、ここまで来ているのだったら、下手に嘘はつけないだろ。相談、といつところまででは、なかつたが、聞かされていたのは事実だ。

とりあえず、僕があそこにいなければ、確実に彼女はそんな事を言わなかつたはずだし。

彼女としては、とりあえず、一人で悩んでいる、よつた状況にしたくなくて、どうこう形であれ、僕に聞いてもらいたかった、ようでもあつたわけだし。

だからこそ、逃げたのだ。

「やはり……」

クラスメイト達がそれぞれ頷き合ひ。

だが、それはやはり奇異の視線。

もしかしたら、何かしら想定していることと多少違うのかもしれない。

こうなると、状況が分からないと心は困る。

「あの、どうかし……」

「てめえ、何で、彼女からの告白を断つたんだよ……」

とりあえず、状況把握のために聞いてみたのだが、あっさりかぶされた。

怒鳴り声で。

「というか、余計に謎。わけがわからん。

不意に現れたまた別の誰か。

「普通に話すだけでも羨ましいのに、告白だぞ、告白……あんなに綺麗でお金持ちな彼女に告白されて、それを断るなんて、てめえ、何様だ……！」

激昂。

でも、状況が分かんない僕には、はてなマーク。

果たして、何故に、僕が彼女に告白されている事になつてているのか。そして、どうして、それを断つてていると言う事になつてているのか。全くわけが分かんない。

そもそも、どうしてそこまでキレイているのかも分からぬ。実際、本当に告白されていたら、僕は間違いなくオッケーをだしていたはずだし。

美人は基本的に大好きだし。

いや、そもそも、その彼女が、彼女なのかどうかも分からぬ。言つてる本人は、告白されたのが誰か知つてゐるから、言つてるんだろうけど。

となると、それとなく有名人じゃないといけないから、まあ、おそらくは彼女になるんだろうけど。

それでも、良く分からぬ。

「ああ、うん、ごめん、とりあえず、『』飯を食べてくるから
まあ、なんにせよ、とりあえず、逃げるのが一番だろ。」
とこうわけで、逃げ出す。

そのついでに、歩きながら、状況整理。

とりあえず、彼女が彼女であるのは間違いないだろ。

彼女が一回続くから、軽く混乱するけど、彼女は彼女なんだから仕
方がない。

で、今日一日の様子からすると、かなり広範囲に知られているみたい
である。

そして、クラスメイトの「ぶりか！」すると、僕が彼女に告白をされて、
断つている、という状況。

ついでに、なんとなく、僕に対する質問が、微妙にリアル。
となると、考えられることは一つ。

いや、他に可能性はあるが、とりあえず、僕の中で浮かぶのは一つ
だ。

彼女が、お誘いが鬱陶しくなる前に、先手を打つた、とこうべきだ
ら。

とりあえず、リアルに物言いをするには、僕達のやつてている事を覗
く、という方法があるが、それでは、告白とかの話は出て来ない。
となると、出所はやはり彼女しかないだろ。

ただ、どうして、そんな事をしたのか。

それが、分からぬのだ。

そんな事を言つ必要性がどこにあるのだろ。

一番簡単なのは、彼女に聞いてみる。

だけど、下手すると、巻き込まれる可能性が大
となると……

逃げるしかないだろ。

とりあえず、目的が文化祭なのだ、それが終わるぐらにまでは、逃
げておけばいい。

まあ、逃げ場所は確保している。

というか、前々から確保してある。

いつだって、あの隠れ家に行けるわけじゃない。

僕よりも前に、人が来ていて、中に入れないとさもあるし、雨が降つていてる日なんかじゃない。

中は雨が振り込まないけれど、途中は校舎裏なんだから、当然雨ざらしで、中に入れるような状況ではない。

そんなときに行く場所はちゃんと確保している。

そこへ逃げ込めばいい。

というか、既に、足を運んでおり、今日のお弁当もナリで食べるようにしている。

「失礼します」

到着すると同時に、あっさり中に入る。

まあ、一応、先客、というか、そこには番人(が)いるから、挨拶はしておく。

「あら、珍しいわね。晴れの日のお昼にここに来るなんて」

「いや、ちょっといろいろあります。今日もお客さんゼロですかね?」

「ええ、幸い、うちの生徒は健康体の人ばかりだからね」

そういうて彼女はくすくすと笑うが、実際は、多少の病気なら、無視するから、誰も来なくなつたのだ。

とりあえず、彼女は保健医。

うら若く、そして綺麗な女性。

というわけで、当然男子からの人気は高い。

そのおかげで、最初の頃は、かなり保健室は繁盛していたが、当然、やつてくるのは仮病の生徒ばかり。

そして、恐ろしい事に、仮病の生徒にお仕置きをしたのだ。

とりあえず、僕は経験した事がないから分からぬし、聞いてもただ震えるばかりで教えてくれないから分からないが、かなり恐ろしいことだつたには違ひないらしい。

ちなみに、僕も、仮病と言つが、人がいない時に、遊びに来たのだが、いろいろやりあつた結果、ここに遊びに来る許可がおりたのだ。今でもどうして許可が下りたのか不思議だが。

「まあ、私としては来てくれて嬉しいわ。こうも一人だと暇で暇で「仕事はどうしたんですか、仕事は？」

「私は優秀だから、ほとんど片付いてるのよ」

しかも、この人、美人な上に仕事も出来る。その日の仕事をあつさりと片付けてしまう。

天が「一物を与えていい例だ。

「まあ、いいですよ。とりあえず、さつやど」飯食べてもいいですか？お腹空いているんですよ」

「ああ、だつたら、デザート」

そう言って、彼女が出したのは、いかにも手作りと言わんばかりのクッキー。

とはいへ、この人がそんなものを作る玉じやないのは分かつていて、「ファンの女子の子からもらつた奴ですか？」

とりあえず、それだろう。

年上の美人でしかもカッコいいタイプは、この年頃の女子は意外と憧れられる。

で、そういう特殊な趣味な人間、というか、まあ、そつち系の人間から告白されまくり、という事態になる、らしい。まあ、詳しくは聞いてないから知らないが。

「失礼ね。これは、れつきとした私の手作りだけど」

「……好きな人でも出来たんですか？」

思いついたのが、毒見。

失礼だと思うが、そうとしか思えない。

それに、この人だつて独身で恋人のいない妙齢の女性。

そういう事になつてもおかしくないだろ。

「いや、単に作りたくなつただけよ。それとも、貴方に食べて欲しくて作ったの、と言つたほうがいいかしら？」

それが、どうやら氣に食わなかつたのだらう。

絡み付くような視線で見つめながら、艶やかな声でそうこいつ。

こんな風に言われて、惚れない人はいだらう。

よつほど趣味がおかしくない限り。

「ホント、貴方つてば可愛いわね。そんなに真つ赤な顔をして」
もちろん、僕も違わず、あつさりと赤面。

年頃の男の子には少々刺激が強い。

「これじゃ、私がデザートよ、なんて言つた田にはどうなるのかしら、ねえ？」

ホントに悪魔だ、この人。

どういう反応するのか分かつていて、そういう事を聞いてくるんだ。
そして、その通りの反応をしているのを見て楽しんでいる。
どうだ。

「まあ、こつまでもからかうのは可哀想だから、ほらやひと食べなさい」

言われなくてもそのつもりだ。

「いただきます」

手を合わせて、さつやと皿食開始。

いつものごとく、普通のお弁当。

だけど、やつぱりそれが落ち着く。

「相変わらず普通のお弁当ね。なんなら、私が作つてあげようか？」

「まだ死にたくありません」

この人にお弁当を作つてもうつてこいる事がばれたりでもしたら、確
実にやられる。

たまに、この人の食べている自作お弁当を見た事があるが、どれも
これも、非常に美味しそうだつた。

だけど、そんな危険を冒してまで食べたいもの、とは思えない。

「貴方も素直ねえ。まあ、そこが可愛いんだけど」

彼女は、そういうと肩をすくめると、お茶をついで差し出す。

悪魔のような性格の人だけど、いつもやつて細かなところでもてなし

てくれる。

そんなところがあるから、憎めないし、素敵な人だと思つてしまつ。
美人だけど、それだけじゃない。

そう思わせる物がある。

そういう人つて本当に憧れる。

「ありがとうございます」

だから、褒め言葉なのか貶し言葉なのか分からぬけれど、とりあえずお礼を言つておく。

どっちだろうと、僕は嬉しかつたわけだし。

「ほんと……おもしろい子ね、貴方は」

彼女はそういうと、おもしろそうに笑つた。

第五話 甘く満りな罪深い罰

あれから、僕は、昼と放課後は、保健室で過ごしている。まあ、彼女には相変わらずからかわれてばかりだけど、それはそれでおもしろい。

さすがは大人と言つべきなのか、それとも保健医といつべきなのか、それとも彼女自身の性格と言うべきなのかは、判然としないが、彼女は踏み込みすぎない。

これ以上言われると嫌だと思つ手前でやめる。

そういう加減が上手なのだ。

だから、普通なら思わず嫌になりそうなやり取りも、僕にとってはとてもおもしろいものだった。

「じゃじゃーん、私特製愛情たっぷり手作り弁当」

「やつぱり、普通が一番だよなあ」

そして、今日も今日とていつもの如く保健室に来ているのだが、とりあえず、彼女のボケは無視。

ボケ殺しとして名高い僕としては、やらないわけにはいかない。

「ほら、私特製の愛情たっぷり、手・づ・く・り・弁・当・だ・よ

！－！」

「痛い痛い痛い！！」

まあ、その後思いつきり頭を驚づかみにされたけど。

これもいつも通りと言えばいつも通り。

意外とバイオレンスな関係なんです、僕達は。

「ほら、おいしそうでしょ」

そう言つて、オープントして差し出してくれた弁当の中身は確かに美味しそうだった。

「わー、おいしそー、食べるのもつたひないぐらいだー、てか、もつたひなくて食べられないやー」

「なんで棒読みなのよ！－！」

「とりあえず、食べません」

まあ、だからと言つて食べる気はゼロだが。
何をたくさんでいるのか分からぬし。

この人からのプレゼントは確実に裏がある。

「全く、他の子なら、泣いて喜ぶのに、貴方つて人はねえ」

「そりや、先生みたいな綺麗な人にお弁当を作つてもらうのは嬉しいし、幸せものだなあつて思いますよ?」

確かに、普通に考えれば、そうなる。

美人が大好きな僕ならなおさら。

「だけど、先生が相手だと裏がありそうで怖いですし、特に今みた
いに脈絡もなしじや、絶対にいやですよ」

「だけど、やつぱり先生だと言うのが一番怖い。」

絶対に裏があるつていうか、何か恐ろしい結末が待つてそうだ。

「それに、やつぱり、そういう手作り弁当イベントは、恋人関係じ
やないと、おかしな感じがしますし」

ついでに言えば、とりあえず、それは、僕の中での確定条件なのだ。
恋人、または、お互いが友達以上恋人未満の関係で、後はきつかけ
を待つのみ状態でないと、やつてはいけないイベントなのだ。

いや、まあ、単純に僕が、勘違いしそうだから、というのもあるけ
ど。

素敵な女人に優しくされると、男つて言う生き物は勘違いしてしま
いがちなんです。

「分かったわ。じゃあ、とりあえず、今日一日だけ、私の旦那ね」
彼女はそういうと僕にしな垂れかかつてくる

て、おい、ちょっとタイム。

「いきなり旦那? ! 飛躍しそぎじやない? !」

順序としては、まずは恋人じやないかな?

「いいじやない。なんなら、ちょうどベッドもある事だし、夫婦の
夜の営み体験してみる?」

「……ぐあ」

思わず想像して、絶句。

悪魔じやない、この人は。

魔王だ。

いたいけな少年の心を今弄んでいる。

まつさりで純情な少年の心を弄んでいるのだ。
これを魔王と呼ばすになんと呼ぶ。

「はい、いつでもいいわよ~」

けれど、そんな僕の内情を知りながら彼女は、ぺたんとベッドの上に腰を下ろすと、わざと短いミニから伸びてゐるすらりとした細く長い足を組み直し、シャツの第一ボタンをあける。

そこから覗く肌は抜けるように白く艶かしく、その奥にあるだらう二つの膨らみが微妙に見えそうな状態。
理性が崩れ始める。

というか、自分でも驚きだが、良くなこの状況で、完璧に理性が崩れないものだ。

ただのへたれ、なのかもしけないが、それでも、この状況でなおも耐えているのは、なかなか評価されるべきものではないだろうか。
まあ、そういう間抜けな顔をしているではあろうが。

「あら、まだ粘るのねえ。うんうん、やつぱり君はそういうじゃないとねえ。だから、サービスしてあげちゃう」

すつと立ち上がると、机に置いておいた彼女手製の弁当を持つと。

「はい、ご褒美」

そう言つと、彼女はいつの間にか半開きになつていていた口に玉子焼きを一つ入れる。

ふわりとした上品な甘みが口に広がる。

素直においしいと思つた。

けれど、それ以上の破壊力があるものが一つ、自分の眼前にある。
第二ボタンの開いたシャツの奥に見えるエルドラド。

男達の桃源郷、アルカディア、シャングリラ。

ああ、今、僕は幸せです。

「あらあら、まあ、男の子だものね、仕方ないわ。でも、もうサービスはおしまい」

そう言って、つんと僕のおでこをつんと押すと、桃源郷への門を閉じた。

なんだろ？、これは。

いつの間に、こんなところに来てしまったんだろう、僕は。それとも、なんだろ？か、いつの間にか、僕は彼女が惚れてしまつうことをしてしまったのだろうか。

……まあ、ないな。

勘違いは情けないから、やめておこう。

そこまで、考えが行つた辺りで、どうにか冷静さを取り戻し始める。「これから先は、ちゃんと私の恋人になつてから、ね？」

「ぐあつ！－！」

「ごめんなさい。

ノックダウンです。

どうやら、僕というキャラは魔王にレベル1で丸腰の状態で突っ込んでいつた勇者、という感じらしい。

まあ、それ以前に、単なる序盤で殺される村人Aなのかもしけないが。

なんにせよ、完璧負け。

これ以上行くと、自分でもどうなるか分からぬ。

「とりあえず、白旗をあげてお弁当を食べますから、許してください

」

もうこは謝るしかないだろ？

深々と頭を下げる。

「あら、残念。もう少し粘つてくれたら、それはそれでおもしろそうだったのに。私は、別に君に襲われても良かつたのにねえ？」けれど、目の前にいる魔王は、けらけらと笑っている。

いつたいどこまで本気なのか分からぬ。

まあ、あつたりと全部冗談、とか逆に、全部本気、と言われそうで

怖いのだが。

どちらにじろ遠慮したいものだ。

「まあ、でも、貴方はそういうかないわよね? はい、どうぞ」

それぐらい彼女もお見通しなのだろ? くすくすと笑いながら、そう言いつつ、お弁当を手渡す。

それを机に置くと

「いただきます」

そう言つて、食べ始める。

とはいって、とりあえず、まだ、自分が持つてきた弁当があるから、机の上には一つどんと弁当が置いてある。

とりあえず、残っている自分の弁当を綺麗に食べてしまつ。

そんな僕を彼女はじと目で見るが無視。

まあ、おいしいものは最後に残す主義なのだ。

とこ? が、最初においしいものを先に食べたら、普通なお弁当を食べる気がなくなつてしまつ。

まあ、作ってくれた母に対して失礼だが、しかたがない。現実はいつも人には冷たいものなのだ。

それはさておき箸を進めていく。

先ほどの玉子焼きと同じく食べるおかず全てが本当にうまい。バランスもしっかりと考へて、温野菜も入っているが、ただ入れているんじゃなくて、しっかりとアレンジもされていて、非常に食べやすい。

これなら、野菜嫌いな子も、割かし食べやすいと思う。

「どう? おいしいでしょ? 」

『美味しい?』 じゃなくて、そつ聞く辺り、自分の腕に自信があるんだろ? 。

まあ、その自信も頷ける程美味しい。

時々不思議に思うのだが、同じよつてシシピ? おつに作つても、味に差異が出る事が良くある。

いつたい、その差異はどうやって出来るのだろうか。

不思議でたまらない。

「そうですね。これなら、いつでもお嫁に行けますね」
ただ、これだけの物が掴めるんだ、いくらでも男を虜に出来るだろ
う。

男なんて胃袋を押さえつければ、簡単なものだ。

まあ、もちろんそれだけじゃないが、かなりの破壊力を持った武器
になるのは確かだ。

受け売りだから、なんとも言えないけど、僕としてはそれに賛成票
を一票。

料理が「うまい」か下手かと言つたら、うまいほうがいいだろう。

「そうね。じゃあ、貴方がもらつてくれるかしら?」

くすりと笑うと、またしな垂れかかつてくる。

本当にこの人は心臓に悪い。

何が狙いなのか分からぬいが、どうしてそつまでして僕を誘惑する
のか分からぬい。

もしかして、本気なのだろうか?

いや、それはないだろ?。

どんなものだろ?と、恋愛にはきつかけがある。

切り替えるスイッチがある。

それこそ些細な出来事がきつかけになることだつてある。

だけど、それがなかつた。

それすらなく、ただ呑気に適当に居ただけなのだ、どうなりよつも
ない。

「そんな訝しげな顔をしなくてもいいじゃない?いつもいつも否定
してばつかりじゃなくて、肯定してみてもいいんじゃない?」

そんな僕の心内なんて丸分かりなのだろう。

くすくすと笑つて、耳元でそう囁き掛けた。

状況判断不能。

そんな単語が頭に浮かぶ。

自分の頭の処理能力の許容量オーバー。

「私は、貴方にもうつて欲しいと呟つてこる。じゃあ、戴きます、でいいじゃない？」

不意に思い出した言葉。

『好きなら好きでいいじゃない。難しく考える必要はないと思つけど…』

懐かしい言葉。

僕が好きだった言葉。

だけど、信じられなくなつた言葉。

「ほら、戴いちゃいなさい」

そう言つて摘み上げたから揚げを僕に口移しする。

なんて事のない、流れるような動作。

それを僕は避けられなかつた。

しな垂れかかるように彼女は僕の身体の自由を奪われていたから。そして、それ以前に彼女の言葉で頭がとけてしまつていたから。

「貴方が悪いんだから。いつもいつも来るから。私の我慢を不意にするような事をしたんだから。だから、これは罰。私から貴方に下す淫らで罪深い罰なのよ」

だから、僕はそのまま彼女に飲み込まれていく。

甘く淫らな罪深い罰を。

第六話 女神様の誘惑

「暇ね。とりあえず、一発ビデオ。」

いつもと変わらず母手作りの弁当を食べていると、彼女から急なお誘い。

「真昼間からやる」とじやないと思いますが?」

僕としてはたいへん魅力的なお誘いだが、真昼間からしたい事とは思えない。

「いいじゃない。男と女が密室で一人きりになつたらやることなんて一つなんだから」

「学校が初体験は、ちょっと嫌ですね。男はロマンチストなんですよ?」

とりあえず、僕達の関係は何かが変わったわけじゃない。

「冗談は普通に言い合うし、セクハラを受けたりする。

だけど、それだけ。

そりや、言われる事のセクハラ度数は以前に比べるとひどくなつたが、特別な肉体的接触があつたわけじゃない。

さつき言った通り、肉体関係を結んだわけでもない。

キスだって、口移しをされてから、一度もしていない。

まあ、僕がさせていない、というのが正しいんだけど。

結局、僕と彼女はどこまで行つても、生徒と教師という関係だ。

いくら校医だと言つたって、勘定に入れるのは教師なのだ。

認められるような関係じゃないし、ばれたらやばい事になるのは間違いない。

だから、こんなところで無防備に何かしたいとは思わない。

それに、先ほど言つた通り、僕達の関係は何かが変わったわけじゃない。

恋人になつたわけでもない。

そりや雰囲気によつてはキスなんてものをするだろうし、それ以上

だつて行くだろ？

僕の理性はそんなに強いわけじゃない。

流されでもしたら確実にアウトだ。

「そうね。じゃあ、今日の夜、どうかしら？」

「残念、裏を取つてくれるだけの友人はいないから、泊りがけのお金かけは出来ないんだ」

まさか、バカ正直にこの人の家に泊まりに行くなんてことを言つ事はできない。

残念ながら、うちの母親はそこまで甘くはない。

「仕方ないわね、次の休みはどうかしら？」

「それも、残念ながら無理だよ。先生の家は知らないから、自分が行けないし、かと言つてどつかで待ち合わせなんて言つのも論外だし。先生みたいな綺麗な人はどんな事をしたつて目立つからね」

まあ、仕方がない。

生徒と教師がそんな関係にならうと言つんだ。
簡単に行くわけがない。

「じゃあ、仕方ないわね」

彼女はそう言つて嘆息する。

まあ、仕方ないのだ。

大人同士だったら、問題なかつただろ？けれど、実際はそうじやないのだ。

ことはそううまく運ばない。

「いただきます」

「え？」

いきなり、そういった彼女は、僕の膝の上に座る。

「結局ここじゃないと出来ないんだつたら、ここでやればいいのよ。雰囲気なんて関係なしにね。じゃないと、私が欲求不満になっちゃうわ」

「ちょ、タンマタンマ」

腰を浮かして、抜け出そうとする。

けれど、がつちりとホールドされているせいか、逃げ出せない。以前もそうだが、どうしてこうもこの人は逃げ出せないよう絡め取るのがうまいのだろうか。

「これじゃ、強姦だよ！！」

「あら、女が男相手にやつても、強姦にはならないのよ？」確かにそつらしい話は聞いた事がある。

あるけど、なんとも不公平だ。

いや、まあ、確かに基本的に女が男に力では勝てないんだから、そうなるのも自然なんだろうが、そうなつている現実が今日の前にあるのだ。

もう少し柔軟にして欲しい。

「いいじゃない。私も美味しく戴くから、貴方も美味しく戴く。おかしなことは何一つもないわよ？」

「その美味しく戴かれるのが嫌なんです！！」

「きやつ！」

いすのバランスを崩して、床に背中から倒れこむ。あまりの痛みと衝撃に一瞬呼吸が出来なかつたが、このままの状態でいるよりかはましだ。

いきなり落ちた事で、緩んだ拘束から抜け出す。

「残念、簡単には逃がさないわよ？」

が、あつさり捕まり、そのままベッドに押し倒される。

なんともたくましい人だ。

「すみません。こうこうとは彼女としかしないって決めてるんですけど」

とりあえず、最後の反抗と言わんばかりにそう言つてはみるが
「あら、失礼ね。私の事を恋人と思つてくれてなかつたの？寂しいわ」

あつさり返される。

「いえ、こんな風に相手の気持ちを無視した行動をする人を恋人と思つのはむぐつ！！」

それでも反抗を試みたのだが、あつさりキスで口をふさがれる。やつてることがどれもこれも男のすることだ。

「ダメな口ね。そう言つ事ばっかり言つてると、ホントに無理矢理しちゃうわよ？それとも、ホントはそうして欲しいとか？」
「そんなわけないでしょ！」

失礼な。

僕はMなんかじゃない。

「で、どうする？ここで今するか、それとも、私の家に今日泊まりに来るか、それとも休みの日に来るか、どれがいい？もし、どれも嫌と言つたら、襲つから」

とはいえ、どうな彼女と居る限り、僕はビリしても受けになつてしまふんだろう。

選択肢が無茶苦茶だとさえ言わせてくれないんだから困つたものだ。距離が近づいたせいか、彼女は止まってくれそうもない。

前言撤回だ。

確かに、僕達の関係は変わつている。

彼女の方が変わつている。

それには、意図があるのかは、やはり分からぬが。

放課後の廊下。

僕はとぼとぼと歩く。

とりあえず、保健室にはいけない。

行けば、確実に食われる。

一応、約束はするだけしておいた。

空手形にする気はまんまんだが、それをやると後が怖い。だから、たぶん行く事になるだろう。

どうにか、予定が出来ないだろうか。

それこそ、僕が絶対に出なくてはいけない予定が。

そうじやないと、今週の日曜日。

その日に、確実に僕は純潔を散らす事になるし。

ああ、悲しいかな、生贊の供物。

自業自得とは言え、こつもあつたり今まで守りに守った貞操を、捧げてしまつとは。

まあ、僕も年頃の男の子だし?

そういう事に興味がないわけじゃないよ?

しかも、相手は、男子学生と一部の女子学生の憧れの的なのだ。嬉しくないわけもない。

ただ、どうにも、こう流された結果、というのが、糽然としないんだよね。

困つたものだ。

「で、どうすればいいと思う?」

で、結局は人頼み。

封印していた、というか、避けていたあの場所へと向かい、ぼけつとしていた彼女に、そう投げかけた。

「……あんた、つくづく変な奴ね」

が、あつさりだめだしを食らつた。

だが、僕に言わせてもらえば、確実に彼女の方が変なのは間違いない。

「ていうか、私がやつた事に関してはスルーなの?」

「気になるのは気になりますが、今は貞操を守るほうが大事なんですか」

確かにそれは重要と言えば重要だけれど、そんなことは大事の前の小事。

今、気にする事ではない。

「全くあの人には、何も分かっていない。確かに、生徒と教師である前に一人の男と女。そういう気持ちになつてもおかしくなんてない。ていうか、素直に嬉しい。可愛い女の子や綺麗な女人人は嫌いじゃないからね」

確かに、嬉しいのは嬉しい。

たいへん喜ばしいことだ。

あんな高性能な新型機が、こんな量産型汎用機を好きだと言つてくれるのだ。

嬉しくないわけがない。

ただ、だからといって、いきなりワンステップもツーステップも飛ばして行くのはどうかと思う。

「でも、やっぱり、男と女であると同時に生徒と教師。そう簡単に許されるべきカップリングではない。ていうか、ばれたら、かなりやばい。なのに、あの人と言うと、自分の欲望ばかりを押し付ける。ああ、困ったものだ。嘆かわしいことだ」

もう少し、こちら側をいたわって欲しい。

こんな純情で純真であるいたいけな少年が相手なんだ。そんな手籠めにするような形で持つていって欲しくない。

「どうか、あっさり食べようとして欲しくない。

「どうわけで、恋人のふりしてくれない？」

「嫌に決まってるでしょう」

「どうわけでの提案なんだけど、あっさり却下。

まあ、全く毛の先ほど期待していなかつたし、以前自分が考えていた事態になりかねないというか、絶対になるのが分かつていて、大きすぎるリスクを払いたいとは思わない。

「ふむ、となると、とりあえず、予定をでっちあげるしかないな。しかも、どうしても出ないといけないぐらいの……」

「どうわけで、まあ、こちらへんに落ち着くしか無いだろう。

「祖父母を殺すか？いや、いつのこと両親を危篤もいいな。でも、あの人のことだから、いろいろと調べまわるだろうしな。となると、ガセでは捕まってしまうか……」

だからと言つて、答えが出るわけでもない。
あの人のことだから、どんな手を使ってでも、僕を部屋に呼び込むだろう。

既に僕が

『じゃあ、休みの日に遊びに行きます。なので、地図を描いてくだ

さい』

そつ言つてゐる以上、逃がすつもりはないだろう。

確実にてぐすねを引いて待ちつつ、逃げ出そつものなら、あの手この手で絡め取る事間違いなしだ。

となると……

うわ、勝てる気がしない……

「いつのこと、操捧げたら？あんたみたいな有象無象な輩には分不相応な恋人だと思うわよ？いつ逃げられるか分かつた物じゃないし、今の内に捕まえておいたら？それこそ、捨て身で」

つまり、身体を餌にしようと。

そりや、僕だつて彼女の言つてゐる事ぐらい分かつてゐる。あんな素敵な人と付き合おうといふんだ、それ相応の覚悟をしないといけないだろ？

でも、だからと言つて、やつぱり身体を差し出すのは……

「まらほら、行つた行つた。あれこれ悩んでたつて仕方ないわよ。もう真正面からぶつかつて、対抗するしかないのよ」

とはいえ、だからと言つて逃げ出す手段は無い。

それに、仮に運良く今回逃げられたとしても、次も逃げられるとは限らない。

絶対に毎週休みごとに誘つてくることは間違いない。

なら、彼女の言う通り、真正面からぶつかつていくしかないだろ？。そうすれば、もしかすると、それこそ、天変地異の前触れかのようになに運良く、守りきれるかもしけないし。うん、頑張つてみるか。

「んじや、帰るわ。相談ありがとね~」

「え？！私のネタ振りの奴は無視なわけ？！」

まあ、やっぱりそれはそれ。

大事の前の小事。

といつわけで、今はあの人との決戦の事に集中しちよつ。

第七話 欲望のサンクチュアリ

そして、こや、やつてきました、地獄の坩堝。

戦いのサンケチュアリ

「大丈夫。負けない。勝つんだ。勝つて貢操を守りぬくんだ!!!」

オノを鳴らす。

どうあえず、オートロジケ式みたいだ。

まあ女性の一人暮らしは怖いしすぐ整理しないわけにはいかない、これが一つの防犯意識はあって当たり前だ。

まあ、公立高校の校医が住むには、多少豪華すぎると思つが。

『はいはい! ミニマム』

開ける。

そいかが、ハベニタニに無つて、波女の部屋。

ふむ、なんと書つか

僕には縁の無い世界だ。

一応、一軒家に住んではいるが、ごく平凡の普通の家。

おそらく、こんなアパートを借りるよりもずっとずっと安上がりな

蒙古傳

そこには心暖かぬもののが半数の土蔵、つまり二三十軒ある。

そそな事を考へながらひだつたので、ずいぶんと筋つな関取つぱつで

しまい、彼女の部屋の前に付く頃には、既に彼女が迎え……

! !

彼女の姿を確認すると同時に、部屋に押し込む。

「いやん、もつ、やる気まんまん?お姉さん嬉しいわ」

「何世迷い事言つてるんですか！？」

「冗談も休み休みにして欲しい。」

「どうか、なんちゅう格好で外に出てるんだ。
おかげで、見た瞬間は一瞬あまりの事に、何事も無かつたかのよう
に振舞いそうになつたじゃないか。」

「もう、こんなところではじめちゃうの？うん、でもいいわよ、も
う私も我慢……」

「うがあああ！…さつさと服着る！…何で下着姿で待つてるんです
か！？」

「この人には常識がないのか、常識が！！」

「冗談にしても程があるぞ。」

「いくら自室の前だからと言つて、下着姿で出でくるのはどうつかと思
うぞ。」

「傍から見たらただの露出狂の変態だ。」

まあ、食えた野獸どもなら大喜びだらうが。」

「いや、だつて、ほら？私ももう我慢できないから？」

「我慢できなかつたら、下着姿で待つんですか！…どこの変態です
か！？」

「18未満視聴禁止のビデオに出てくる人と同じじゃないか！…」

「あんなのはあくまでもフイクションのはずだぞ！…」

「あら、いいじゃない。変態なら、どんな事でもオッケーなのよ？」

「私は、あなただけの変態さん。ほら、いくらでもマニアックな…」

「人格疑わるそうな事を言わないでください…！…ノーマルでいいん
です！…ていうか、ノーマルがいいんです！…」

「いいじゃない。世界が変わるわよ？」

「結構です！…」

「なんちゅう人だ、この人は。」

「純情な青少年をどうしようといつもりだ。」

「僕はそこまで汚れるつもりはないぞ。」

「もう、分かつたわ。仕方ない。ノーマルでいいわよ」

彼女は、ため息を付くと、そういう。
どうやら、なんとか分かつて……

「ノーマルでいいから、早速はじめましょうっ！」

「はうっ？！」

しまった。

そうだ、そもそも、大事なのは、そこじゃなかつた
なんだか、いつの間にか、奪われること前提みたいな感じになつて
たけど、元々は、それを回避しようと一生懸命考えていたはずだ。
なのに、いつの間にか、話が摩り替わつていた。
もしかして、この人……

「さあ、邪魔する者は誰もいない。君の言う通り、恋人の部屋での
初体験と言うシチュ。文句はないはずよね？」

「あ、ああ、あああ……」

完全に追い込まれた。

逃げ道は……

ない。

間違いなく僕は、今日、ここで……

彼女に食われる。

「で、でも、やつぱり、家に来てすぐつて言つのは何だし、うう、
最初はテレビとか雑誌とかを見たりして、お話してから、ゆっくり
とそういう雰囲気につつていきながら、自然と、と言つのがいいな
あ、とか思つたりするんだけど？」

「あら、そんな事しようとする、どうやっても不自然な流れにな
るのよ？どう考へても、雑談の延長上にエッチがあるわけないもの

「はうっ！！」

「ああ、ダメだ。

この人に口で勝てるわけがない。
どう考へても無理だ。

食われること確実だ。

でも……

「や、その、は、初めてだから、その、なんていうか、微妙な初々
しさと言つか、こうアクションを起こそうとするんだけど、起こし
きれないで、そういうなんというか、えと、羞恥心との葛藤とかも
してみたいんです。その、やっぱり、がっつりのは良くないですし
やつぱり、いきなりは、無理。

絶対死ぬ。

恥ずかしさで死ぬ。

「うーん……」

彼女が腕組みをして、考えるそぶりを見せる。

ただ、腕組みのせいで、元々豊かな二つのHベレストは更に強調され、なんだか、もう見たら、その場で『負け』という一文字をでかでかと見せ付けられているような感じがする。

この人のことだから、絶対わざとだろう。

「まあ、そういうシチュもあつと言えば、ありね。うん、萌えショ
ュエーションというのかしら?」

と、そんな事を考へているうちに、彼女の方に答えが出たらしい。
しかも、僕に有利なほうに。

「というわけで、服を着てくるから、リビングのソファーに座つて
待つてなさいね?リビングはまっすぐ行つたところだから」

彼女はそういうと、さつさと別の部屋に向かつて消えてしまつ。

一瞬、逃げ出そうかと思いつが浮かんだが、即座に振り払う。
そんな事をしたら、後でどうなるか、それを考へるだけでも恐ろし
い。

仕方なく、彼女の言つ通りに、そのまま奥に向かい、リビングに入
る。

そこは、なんだか、彼女のイメージ通りの部屋だった。
物がたくさんあるわけでもなく、だからと言つて全くないわけでも
ない。

全体的にシックにまとめてある。

大きな薄型テレビに、多種のAV機器に、一人掛けのソファとテー
ー

ブル。

本棚には、いろんな種類の本がある。

まあ、田の端に、『年下の男を逃がさない法則』なんていうタイトルの本を見つけてしまったが、すぐに視線をはずしたから、詳しくは分からぬが。

というか、なんちゅう本を買つているんだ、あの人は。

そもそも、ああいう本は全くあてにならないと言つのに。

とりあえず、ソファに腰を落とす。

途端に、ふわっと甘い香りがする。

部屋全体にも、かすかな甘い花の香りがしていたが、それともまた違う香り。

おそらく、その香りの正体は彼女の香水。

スキンシップで襲われるときいつも香つていたのを覚えている。

でも、なんだか、こうしていると、本当に女人の部屋に来ているんだな、とつくづく思つ。

さきほどまでは、彼女とのかけあいでそんな事を考える暇なんて無かつたけど、こうしていると、嫌でも意識してしまつ。

「はーい。お待たせ」

そんなふうに思つてゐるさなか、戻つてきた彼女はぎゅっと後ろから抱き付いてくる。

こんなときには、そんな事をするのはやめて欲しい。

思いつきり意識してしまうじゃないか。

つて、いや、それで正しいのか？

うーん、いまいち僕には判断が付かない。

「でも、ちょっと待つてね？今、飲み物とつて来るから」

そんな僕の内心を分かつてゐるんだろう。

ひょいと離れると、すたすたとキッチンの方へと向かつ。

なんというか、やはり、うまいと思つ。

くつついては離れ、離れてはくつつく。

しかも、その時間が長すぎず短すぎず、ちょうどいい塩梅で、事を

運ぶ。

本当に、男心をくすぐるのが上手だ。

きっと、男性経験も豊富なんだろう。

まあ、僕は、男性経験がない人の方が、実は好きなんだけど。

いや、だつて、比べられそうだし。

明からに、僕は、男子平均以下だから、比べられるとかなり凹むし。

「はい、どうぞ」

「うん、ありがつ、じゃねえ？！なんで、そんな格好してんの？！」飛び込んできたのはさつきとは全く違つ、異様な姿。

油断してた分、破壊力は倍増。

「あら、こには、やつぱり台所から出でてくるときは、裸エプロンでしょ？まあ、さすがに、刺激が強すぎるとかと思ったから、下着にしといたけど？」

「ぐああああああああ

思わず頭を抱える。

油断した僕がバカだつた。

そうだ、彼女はそういう人だつたんだ。

ああ、もつ……

ちくしょう。

「ああ、もつ、どうして、そななるの一言つたでしょ、ノーマルだつて！ノーマルなんだから、服着てよ、服を！！普通にいつも通りの会話するんだから、格好も普段着じゃないと意味無いじやん！」

！

「もつ、文句が多いわね。分かったわよ、ちやんと服を着てくるわ

よ

「お願いします。まじで、お願いします」

とりあえず、状況をこれ以上悪化させないために、それは絶対に避けられない。

そのためなら、なんだつてする。

まあ、操云々は除外されるけど。

「とりあえず、文化祭はどうするの？」

「やることもないし、かと言つて誰かと約束したわけでもないから、適当に避難しちゃりますよ」

「んじゃ、保健室に来なさい」

「食わないですよね？」

戻ってきた彼女は、僕のすぐ傍に腰掛けると、あっさりと僕を捕まえ、いつもと変わらぬ調子で話しかけた。

「まあ、さすがに、人手が多いから無理ね」

基本、この人は下半身の話以外は、割と話しているとおもしろい。まあ、下半身の話しても、襲う襲わないの話し限定でしつこいだけれども。

「それに、今から食べれるし？ てか、食べるし？」

「ちよつ、いきなり！？」

まあ、きつこと言つよりも、対応に困るところのが正しいところなんだけれども。

こうして、あっさり覆いかぶさつてくれるし。

「まずは、キスを戴き。ちゅっ」

そして、今度は唇を奪つ。

わざわざ分かりやすく音を立てて。

なんと言つか、まあ、ある程度分かっていたとは言え、こいつも予想通りとは……

「あの、もう少しこう、ゆっくりとしてくれませんか？」かとい、初めてで恥ずかしいんですが？」

「あら、私も初めてよ？ てか、恥ずかしいんだつたら、わざと落ませたほうがいいんじゃない？」

「なんですよ！？」

こんなときこそ、そんな衝撃発言をしないで欲しい。

「どうか、初めてつてどうこう」と？

それだけ美人なのに？

もう、大人なのに？

「そもそも我慢なんて出来ないし」

そんな疑問を込めての言葉は、全く別の答えで返ってきた。

どうやら、後者に対するものだと思つたらしい。

といふか、そうだとしても、初体験なのに、その積極性はどうかと思つ。

彼女らしいと言えば彼女らしいが、初めてなら初めてらしさ態度を見せてもらいたいと思うのは、男の勝手だとでも言つだらうか？

「まずは、上からね？ああ、大丈夫、ちゃんと私も脱ぐから」

そんな僕の思惑とは裏腹に彼女はどんどん推し進めて、あつせりと僕の上着を取り払う。

既に、僕に抵抗しようと言つ意思は無い。

なんだか、めんどうくさい。

とりあえず、もう、好きなようにしてください。

そんな感じだ。

「あら、抵抗しなの？うーん、それはそれで寂しいわね」

そんな僕を見て、彼女は、肩透かしを食らつたような顔をしている。とりあえず、抵抗している人相手に燃えると言つのは、人としてどうかと思つ。

どうして、彼女が女で僕が男なんだろう。

逆だったら、絶対に強姦罪で訴えられるのに。

まあ、それなりに証拠を集めないといけないし、丸裸にされた拳句、体中をあちこち調べまわされるらしいから、それはそれでかなりの屈辱だろうけど。

しかも、名前まで表に出るから、とりあえず、かなり精神的にはきつい。

だからこそ、泣き寝入りがあるんだろうけど。

無理矢理やられて唯でさえ、死にたくなるぐらいの傷をつけられたのに、更に塩を刷り込まれる。

本当に、どこまでも救われない。

おまけに、たまに、捨てられた腹いせに、襲われた、なんていって、昔の男を訴える奴もいるわけで、おかげで、肩身も狭くなる。たまたまんじやない。

とはいって、これは聞いた話。

どこまでが本当なのか知らないけれど。

とはいって、もし、それが本当なら、やっぱり救われない話だ。でも、まあ、それなら、やっぱり、僕は男で良かつたんだろう。いや、そういう事で、何かを決めるのは間違いなんだろうけど。「こひ、何考えているのよ？これだけ魅力的な女性が田の前に裸でいるって言つて言つてのよ？もう少し反応したらどうなのよ？」

と、不意の言葉で我に帰る。

「うひやああ」

それと同時に、びっくり。

田の前にいる彼女は、言葉どおり真っ裸。

もひ、恥ずかしいところが視界一杯に広がっている。僕自身も、いつの間にかに、真っ裸にむかれていた。

「いや、驚くんじやなくて、ほら、興奮するとかしなさいよ」

そう言つて彼女は、でん、と効果音が付きそうなほど胸を張る。恐ろしく豊かなそれは、もう見る物を圧倒する。

圧倒するけど。

「反応しなさいよ！」

怒られた。

思いつきり殴られた。

いや、まあ、恥をかかせたわけだし？

なんだらう。

ここまでくると、やすがに肝が座る。とこひが、冷静になつてくる。

いや、なんだか、青少年としてあるまじき行為だとは思ひされど。

「あり、残念。ほひ、せつぱり無理でしょひ？」

「うえ？！」

と思つたのもつかの間。

不意に振つてきた声に驚く。

てか、一人きりだと思つたら、そうじゃなかつたの？！

思わず、そう思つた言葉が、口に出そつになつたが、なんとか押しとどめる。

けれど、その声、どこかで聞いた事がある。

しつとりとして、どこか呑氣で、やる気がなくて、現実からつまはじきにされて、最近付き合つていた彼氏に、

『ごめん、やつぱり、俺には無理だよ。君みたいな人の相手は』

なんて言われて振られた……

「口に出して言つてるわよ、このバカ！！」

「ぐわばつ！！」

痛い。

てか、どうやら、言葉に出していたらしい。

「なんで、こんなところに、いるんですか、振られ女医」

「つるさい！！あんなクズ男こっちから願い下げよ！！」ていうか、

これ以上余計な事言うと、診断書に要入院つて書くわよ！！

「うわっ、職権乱用！！あそこに入ると、下手したら廃人扱いじやん！！」

「だつたら、余計な事を言うな！！」

「いいじゃん！！こんなわけの分かんないハメ方しておいて、文句の一つや二つや三つ！！」

「つー？」

「……分かつていたのね」

一人は押し黙り、もう一人はやはり、と言つた表情。

もちろん、押し黙つたほうは、万年欲求不満変態ドS校医。

もう一人は、良縁に恵まれない振られ女医。

「ばればれですよ。既に、僕には貴方のデータが入つてゐるんですよ？」

そう、既に彼女のデータは手に入れている。

まあ、盗んだわけじゃなくて、普通に話をしていただけだが。

「柳鈴穂。この街の私立病院心療内科の研修医。妹が一人居て、その妹は校医。そして、僕の担当医」

そう、彼女は僕の担当医。

だから、話している内に、いくつものデータを手に入れた。

「柳瑞穂。我が高の校医で、姉が一人居て、医者」

これは、彼女のデータ。

こつちは、日常会話で聞きだした話。

だから、想像するのは簡単。

同じ柳姓で、共通するところが多い。

それを気にしないわけが無い。

それこそ、こんなに猛烈アタックを受けていて

「柳先生? で、これはどういうことですか?」

にっこりと笑う。

けれど、先生はドン引き。

なんだか、怖いもの扱いで微妙に凹む。

でも、多少傷ついても、譲れないことは確かにそこにある。

「ちゃんと答えてくれますよね?」

というわけで、さくさく話してもらおう。

第七話 欲望のサンクチュアリ（後書き）

うあああ～

中途半端なところで切れたあ……
てか、初登場でこう言つのつてどうだう？

第八話 予測していた真実（前書き）

中途半端で切れた奴の続きです。
続きだけど……
めっちゃ少ないです……

第八話 予測していた真実

「要するに、僕の女性恐怖症をどうにかしなりと想つてやつた、と？」

あらかたの説明を聞いた結論がそれだった。

「まあ、要約すればね。ああ、もちろん、だからと言つて、別になんの感情もなしに、と言つわけじゃないから。瑞穂がお前の事を好きだからこそ、やつたわけだし、最初は私もやめとけと言つたんだが、どうにも、惚れた弱みと言つたか、盲田さというか、とりあえず、無茶というか、まあ、どうしても、あなたのその困つた病気を治してやりたいと言いだしてね。しかも、ショック療法。止めるに止められなくてねえ、困つたものよ」

いや、困つたのは僕の方だ。

完璧に踊らされていたと言うわけだし。もし、あそこで、鈴穂さんが止めてくれなかつたら、確実に食われていた。

例え、僕が反応しなかつたとしても。

いや、反応はする。

所詮、男だ。

本能が反応することは分かる。

「状況整理させてもらいました。とりあえず、病院に報告させてもらいます」

だからこそ、陰湿。

といふか、許せないこと。

あまりにもひどすぎる仕打ち。

いたいで纖細な少年の心を打ち砕く悪魔の所業。これを許して置けるだらうか。

否、許せない。

「とりあえず、院長には、生体実験をさせられましたと言つておき

ます「

「いやあああ！！やめて、お願ひ、あの爺、人の弱みに付け込んで、極悪非道な仕打ちやり放題の糞爺なんだから、何されるか分かつたものじゃないわ！！」

「で、瑞穂さんは教育委員会に、無理矢理自宅に押し込まれた挙句、薬を飲ませて、もう人には言えないような事をしようとしたと言つておきます」

「ちょっと！！それは、さすがに冗談じやすまないわよ！！」

「二人とも？しっかりと反省してください」

僕は、にこりと笑つてそういう。

こちらに、身の危険をあそこまで感じさせたのだ。

自分もそなねばいい。

もちろん、本当に言つ氣はないが。

元々の原因は僕にあるわけだし。

僕が、女性恐怖症になんてならなければ良かつたわけだし。

「分かつた。交渉しよう。何が望みなの？！お金？それとも、私の身体かしら！！」

「身体！？分かつたわ。私の身体好きにしてもいいわ。だから、この事だけは言わないで！！」

でも、なんだろう、これは。

女性恐怖症と言うか、女性不信に陥つても仕方ないような感じがする。

「どうか、ホントに僕が女性恐怖症と分かつて言つているんだろうか。

もしそうなら、かなり問題ありだ。

とりあえず、女性恐怖症なんだから、身体目的になるわけがないだろう。

ホント困つたものだ。

「もつ、冗談よ。悪かったと思ってるわ。医者としてやっちゃんげないことだつて分かつてるわ。でも、担当医としては、貴方のその

病気を治してあげたかったの「

医者なら医者の領分がある。

患者の事を一生懸命に考える医者が理想だろ?。

だけど、考えすぎれば考えすぎるほど、時間はかかる。

そして、その分だけできる仕事も減る。

それは、救える人の数を減らすことにつながる。

だから、その一つを天秤にかけてバランスを取らなくちゃいけない。

患者の事を考えつつ、考えすぎない。

自分が能力の範囲内で患者とむき合ひ。

それが出来る医者が本当にいい医者。

まあ、最低限の腕もいるにはいるが。

それでも、それが出来ない医者が名医とは言えないだろ?。

そういう意味では、彼女の事を僕は認めていた。

まだまだ医者としては歳若だけれど、それでも自分の分と言つもの

を分かつていてるようを感じられた。

今の自分に出来る範囲の事を　もちろん、時には必要な自分の限界以上の力の発揮も含まれる　しっかりとやる。

そんな彼女の事を僕は素直に尊敬していた。

例え、何年以上経つても尚、僕の病気が治せない事を含めた上で。

「気にしないでください。これは、僕自身が向き合わないといけないことですから」

これは、まあ、自分自身が向き合わないといけないこと。

彼女のせいにはならない。

「でも、一人で何でも解決できるほど人なんて物は強くないのよ?貴方だって分かつているはずよ?」

「それでも、誰かに手を差し伸べられたとしても、それでも、僕が向き合わなくともいいって言うわけにはなりませんよ」

僕だって、全部何もかも一人で解決できるとは思っていない。

絶対に誰かの手助けが必要になるときはある。

だけど、だからと言って、弱さをいいわけにして、見えないふりは

できない。

どんなに辛くても、苦しくても。

それが、僕自身に出来る僕の罪滅ぼしでもあるんだから。

「こり、難しい顔をしちゃダメよ」

「え？」

いきなりぎゅっと鼻をつままれた。

「何かと向き合つんだつたら、もう少し余裕を持たないとね？じやないと身が持たないわよ？」

そして、そう言つてにこりと笑つ彼女。

瑞穂さん。

やはり、そういうところは叶わないと思つ。

一瞬で何を考えているのかを当ててしまつ。

こと細かくまでは無理だらうが、それでもおおよその見当はつけられてしまつ。

「別に無理はしませんから大丈夫ですよ」

嘘。

絶対に僕は無理をする。

何が何でも手に入れたい物、守りたい物があつたら、僕は頬着はない。

自分の身体が悲鳴をあげようが何しようが無理矢理にでもつかみ取ろうとする。

だけど、そんな事を言いたくはない。

例え、すぐにはれる嘘であるうと、自分から進んでそんなことはいたくなかった。

「はいはい、分かってるわよ。君がそういう子だつて言つのはね」

彼女はぎゅっと僕を抱き締めると、頭をぽんぽんと叩く。

鈴穂さんも優しい表情で僕を見ている。守られている。

思わずそう思つてしまつ。

でも、それはきっと事実で、僕がどんなに逃れようとしても逃れら

れない現実だらう。

僕は弱い。

この一人に守つてもらわないと生きていけない。

そこまでは、言わないけれど、僕が僕でいられているのは、この一

人による影響が大きいだろう。

それだけ、本当に良くしてくれている。

僕にはそんな価値などないと言つのに。

全ては自分が招いた業の結果。

それだけなのに。

第九話 搖き無い答え

「結果だけ聞くわ、どうなったのかしら？」

月曜日。

僕は、多少迷つたが、結局秘密基地を選んだ。

絶対聞かれると分かつてはいたが、だからと言つて、ややこしくなる可能性大な保健室へと行く気はどうしても起きなかつた。

「まあ、取つて食われるような事だけはなかつたよ」

「へえ、意外ね。なんとか守りきつた、つて事かしら？」

「まあね」

とりあえず、ここは適当にお茶を濁すしかないだろ？。

まさか、本当の事なんて言えない。

まあ、そもそも、女子相手に言つのようなネタではないんだけれど。それでも、言つてしまつた事だから、どうしようもない。

後悔後立たず、とやらだ。

本当に自分でも思つがデリカシーのかけらもない人間だな、僕と言う人間は。

「にしても、何が気に入らないわけ？分不相応な美人じゃない。それとも、性格が悪いとか言うわけ？」

そして、ついでに言うと美人の申し出を断る変人。

「いや、そんなことはないよ。うん、瑞穂さんはとってもいい人だからね。ホントにまつすぐな人」

「じゃ、家事が全然だめ、とか？」

「ううん、部屋はすつごく綺麗に片付けてたし、料理も上手。毎日ぴっしりとしたシャツを着ているところから、洗濯とかアイロンがけもばっちりのはず」

「じゃあ、何が気に食わないのよ」

「そなのだ。

彼女は完璧と言えば完璧なのだ。

仕事をやらせれば、校医の仕事はしっかりとこなすし、家事も万能で、性格も多少S気が強いけど、悪い人じゃない。

そして、極めつけはスタイルのいい美人。

文句のつけようがないのは、確か。

だから、彼女の言つことはいちいち分かる。

何故、彼女を拒否するのか。

何故、そんなに嫌がるのか。

理解できるわけがない。

僕自身、何がいけないのか分からぬくらいだから、他人してみれば苛立ちを隠せないのは良く分かる。

だけど、それでも、やはりどうしても、僕は彼女の手を進んで取ろうとは思えないのだ。

「分からぬよ」

偽らざる本心。

納得させる手段がないのなら、それを言つしかないだらう。嘘を付くのが元来へたくそな僕だ、適当な嘘を付いてうまく誤魔化せるとは思えない。

「何がいけないのかは分からぬ。でも、分からぬから、何かするわけにはいかないんだよ。瑞穂さんは、外見じゃなくて心を見て、一緒に居た時間、空間を見て、気持ちをぶつけてくれている。だから、見た目とかそんなんじゃなくて、一緒に居た時間や空間、ぶつけてくれている心を見て、それで決めたいんだよ」

でも、言える事だつてある。

真剣な気持ちをぶつけてくれている。

適当な気持ちなんかじゃない。

僕の病気とも言えない物のくせに、未だに治らない物を知りながら、それでも、それに臆することなく、気持ちをぶつけてくれた。それを、適当な気持ちで返したくない。

後悔しないためにも。

真剣な気持ちには真剣な気持ちを、それが僕の信念。

まあ、だから、逆に適當なら、こっちも適當、そんな感じの反応をすることも十分にあるのだけれど。

「ふーん、中々考へてるのね。でも、『冗談抜きでその言葉臭いわね』『悪かつたね。自分で言つてて、恐ろしく恥ずかしかったよ』でも、そつやつて茶化されると、本当に恥ずかしい。

素直な気持ちだけに余計。」

「まあ、聞いて気持ち悪かつたけど、でも、いい事だと思つわよ？それこそ、私の顔や身体田当ての胸糞悪い奴らに比べたらね」それでも、言うだけの価値はあつたらしい。

まあ、僕としてはそんなものと比べられるのはたまたまものじゃない。

でも、と思わずにはいられない。

僕が多少変わつてゐるから、そうなつてゐるだけで、そうじやなればきつと僕も彼女の言つ『顔や身体田当ての胸糞悪い奴ら』になつていたかもしれない。

僕が、女性恐怖症じやなければ、きっと何も考えなかつただろう。何も考えず、ただ可愛いから、綺麗だから、スタイルがいいから、それだけで選んだりしていいたかもしれない。

だから、それを否定することは出来ない。

たまたまそつならなかつただけで、そつなる可能性は確かにあつたのだから。

それにやつぱり美人さんは大好きだし。

否定する資格なんて持ち合わせていない。

「ありがとう」

だから、今の僕に言えるのはせいぜいその程度の事。

否定も肯定も出来ないそんな中途半端な言葉。

まさしく今の自分を表している。

立ち上がりながらも前へと進めていない、進もうとしていないそんな現状。

自分の過去への決別が出来てない、やりきれてないそんな中途半端

な現実。

もしかしたら、そんな自分だからこそ、伸ばされた手を握り返せないのかもれない。

いつまでも、後ろ向きな自分がまっすぐ前を向いている彼女の傍にいられるわけがない、と、そんな自信なんてない、と、そして、去られたときの悲しみと出来た心の傷と向き合いたくない、と。

もしそうなら、本当に情けないだろう、僕と言う人間は。

自分の事しか考えてない卑怯で最低の人間。

生きている価値なんてない。

死んでしまったほうがいいだろう。

だけど、そんなことを考えたくはない。

例え、僕の本当の姿がそつだつたとしても、それでも、僕は自分を信じてみたい。

僕の事を好きになってくれた彼女のためにも。

そして、自分のためにも。

踏み出せるかもしれない一歩のためにも。

そのためには、自分の事ぐらいは信じてやろう。

そう思つた。

第九話 摺き無い答え（後書き）

これにて、第一章終わりですww

第十章 罪と罰と贖罪（前書き）

二章開始です。

で、しおりながら、暗いですが、次は戻りまふ　ｗｗ

文化祭の準備は着々と進んで行く。

僕も当然クラスの準備に追われていた。

だから、自然と秘密基地にも、そして、保健室へと足が向くことはほとんどなかつた。

とはいへ、とりあえず、瑞穂さんとの微妙な関係はどうにかなつた。

一応、名目は恋人になつてしまつた。

とりあえず、僕も彼女も好きでもない相手にキスを出来るような人間じやない。

そうなると、自然と恋人、と言つものに落ち着いてしまつた。

もちろん、だからと言つて、どうこうするつもりは、やはりない。

恋人の権利、なんて言うものを振りかざす氣も毛頭ない。

同じだけの思いを、なんて言つつもりは毛頭ないけれど、それでも、自分の思いをしっかりと彼女と向けて居ない以上、そんなものを行う権利は僕にはない。

だから、時々あるお誘いも当然拒否している。

ある意味平和な学校生活。

秘密基地でのおかしな逢瀬が始まる前と同じ生活。

それが退屈になるんじゃないかと、最初は思つていた。

正直言つて心労がひどかったのは事実だ。

辛くないわけがなかつた。

だけど、それでも、たのしくなかつたわけじゃないし、確かに充実した生活ではあつた。

それがいきなりごろつと変わのだ、多少不安はあつた。

けれど、そんな不安も杞憂で、あっさりと僕は元の生活に戻れた。

そう、この瞬間までは。

こうしているこの瞬間以外だけは、どうしてもそれとは切り離されてしまう。

たぶん、それは一生変わらないと思つ。

どんなに僕が前へと進んでも、全く違うものの考え方をするようになつたとしても、それでも変わらないと思つ。

それだけ、僕にとっては重要で、そして、忘れられないもの。

僕の根底に根付いている過去の出来事。

たつた一つの儚い生。

「ちょうど一年振りだね。元気してたかい？」

無駄なことだと分かつていても、そうすることが無意味だと分かつていても、それでもそうしてしまつ。

それはきっともう本能的な物で、理性でどう抑制しようとしても、やつてしまつ事だろう。

「新しい世界での君は幸せかい？ そうだといいんだけどな。僕？ 僕は、まあ、変わらずやつてるよ」

もうここにはいない、遠い世界の住人。

遙か彼方、今の僕ではどう足搔いても辿りつけない場所にいる。もちろん、そんな世界があるのならば、という前提条件月だが。そう、死後の世界なんてものが。

「そうそう、君のもう一人のお姉さんに会つたよ？ うん、君の言つ通り綺麗だったよ。本当に綺麗な人。外見だけじゃなくて、魂まで綺麗な人。君が嫌つっていたのが、分からぬぐらいい素敵な人だつたよ？」

死んだ人間に言葉は届かない。

どんなに願つても祈つても、そこにあるのは悲しい現実。

もう一度と交わる事のない言葉。

だけど、それでも、僕は問い合わせてしまつ。

弱いから。

未だに、過去に縋り付いてしまつているから。

「ホント、世界中の男達はどんだけ目が節穴なんだろうね？ 君の二人のお姉さんは、もうびっくりするぐらい素敵なのに。そういえば、最近、鈴穂さんすずほさんがまた振られたんだけど、ふざけんじゃねえ、

つて感じじゃない？あんな素敵な人を振るつて、どんだけ自分偉いと思つてんだよ、つて感じだし。鈴穂さんが振るなら良く分かるんだよ？あれだけ素敵な人だもん、よっぽどの人じやないと釣り合わないだろうしさ。なのに、振るんじやなくて、振られるだなんて、もうふざけんな、つて感じ。とりあえず、今度夜討ちに行つちゃおうか？」

くだらない[冗談。

女性恐怖症。

そんなものがある中で、くだらない[冗談を気取らずに言えたのは、遠い世界に旅立つた十人一人だけ。

自然体でいられた。
いさせてくれた。

「で、瑞穂さんは瑞穂さんで、僕に告白してくるし。ホント女性としてはもう最高と言つてもいいのに、見る目がなさすぎるよねえ？僕なんかよりも、もつともつといい男なんているのにさ？いや、まあ、僕を選んでくれた君を否定するわけじゃないよ？そう、うん、なんだ、あれだ、歳相応の男と付き合えつて事。ああ、だからと言つて、年増扱いしているわけじゃないよ？要するに、こんな子供なんか相手にせず、大人でもつと素敵な紳士さんと付き合いなさいってこと」

それは、今でも変わらない。

今も昔も変わらない。

バカみたいに話せる。

そう、昔の恋人と。

死んでしまった恋人。

死なせてしまった恋人。

そして、僕が殺してしまった恋人を。

「あんた、何してるの」

「つー？」

不意の声。

思わず、びくりと身体を振るわし、言葉にならない、それこそ声になつたかどうかも差だけ出ない音だけがのどから漏れた。

それぐらい、驚いた。

そして、それ以上に迂闊だつた。

「て、聞くまでもないか。そつか、そうよね、あんたの名前は庵原夕貴あいづきだつたわよね。つまり、あの子が言つてたヨーキてのが、あんたつて事だつたわけだ？」

他人には誰にも知られたくない過去。

傍から見たらただ痛い人にしか見えないそんな姿をしたのだ、もう少し周りに気を配るべきだつた。

そして、何より、彼女の知り合いに見られた事がまずい。

とはいえ、まさか、知り合いだとは思わなかつた。

彼女が、良く彼女が言つていた少女の名前。

「じゃあ、君がルリだつたんだね。そうか、柚子原瑠璃ゆずはらるり。どうして、気づかなかつたんだろうね、良く良く考えてみれば、あれだけヒントがあつたというのに」

何故分からなかつたんだろう。

良く、彼女は言つていた。

自分の友達であるルリは、自分と同じく美形が大嫌いな美少女だと言つていた事を。

そして、彼女と同じくして非常に裕福な家庭で生まれ育つた、と。まあ、とはいえ、その友達であるルリは、彼女の美形嫌いが伝染して美形嫌いになつたらしいのだが。

彼女の延々と続く美形に対する呪詛の言葉を聞き続ければ、嫌いになつてもしかたないだろうが。

ちなみに、僕は美形は嫌いじやない。むしろ、大好物。

もちろん、女子限定だけど。

けれど、その友達であるルリは、彼女の言葉を聞いていふうちに嫌いになつたらしい。

一人っ子で、彼女と同じく友人の少なかつたルリが、彼女の言葉をあまりにも素直に聞き入れすぎてしまったのが、一番の原因だろうが。

ちなみに、同じく一人っ子で、友達の少ない子である僕が、そういうなかつたのは、自分が美形じゃないので、それに対する憧れがあるのと、彼女が延々と言い続けた呪詛の言葉に出てくる美形が言った言葉を一度も耳にした事がない、ピンとこなかつたからであるが。身近か身近じゃないのか、それで結構変わるものなのだ、感じ方は。そして、身近に感じすぎたルリは、美形嫌いになり、自分自身の容姿も嫌いになつた。

それを考えれば、目の前にいる彼女は、確かにそれに当てはまる。まさしく、彼女こそルリだ、と思うことはしなくとも、多少、そうではないのかと疑問を持つべきだつたし、多少の探りも入れるべきだつた。

彼女の知り合いには、できるだけ会つつもりはないし、関わるつもりはなかつた。

担当医である鈴穂さんや校医である瑞穂さんは仕方ないとは言え、彼女との接点はいくらでも切らうと思えば切れたのだ。

それをしなかつた自分の甘さ。

なんと、情けないのだろう。

「そうよ、私がルリ。あんたが殺したあの子の、奏穂かなほの親友だつた

ルリよ」

そこに居る少女は、ルリは、深い憎しみと殺意を込めた瞳をしていた。

だが、僕には、それを嗜めることはできない。

そう、確かに僕は、彼女を、奏穂を殺した。

この手で、必死になんとか生きようとしていた彼女を殺した。

だから、否定することは出来ない。

その瞳を、僕はまっすぐと受け止めなくちゃいけない。

「ずっと聞いたかった。なんで、あの子が殺されたのか。殺されな

いとificeなかつたのか。恋人であるあんたに「
その気持ちは良く分かる。

僕だつて、そうだ。

何故、彼女が死ななくちゃ いけなかつたのか。

彼女が死ぬ必要なんてなかつた。

彼女は生きていないと いけない人だつた。

僕だつて、心の奥底から、生きていて欲しいと、そう願つていた人
だつた。

だけど、僕はそんな人をこの手で殺した。

彼女がそう望んだから。

彼女が死にたいと言つたから。

延命措置なんてされたくないと、自分自身で生きよつとしているん
じやなくて、生かされている、無様に生かされているなんて嫌だか
ら、そんな姿でいたくないから。

そんな姿で居るより、自然に死んでいきたから。

だから、僕は彼女を殺したんだ。

彼女をこの世に繋ぎとめていた医療器具のスイッチを根こそぎ切つ
ていつた。

それは、他のなんでもない、純然たる殺人。

もちろん、彼女は尊厳死を求める書類を作成していた。

その書類とて、ちゃんとした手順を取つて、弁護士を通じて作成し
た。

だから、その書類はしつかりとした効力はある。

それを、担当医及び病院側が容認したら、といつ条件が付くが。
けれど、担当医と病院側は渋り続けた。

最近では、尊厳死を許容するような考え方もちちらほら出てきつつあ
るが、完全に容認されていいる思想でもない。
多少リスクのある問題。

表に出たら、かなり騒がれることは間違いない。

それぐらい、纖細な問題。

だから、どうしても、簡単にゴーサインを出せなかつた。

それに、尊厳死をさせなかつたとしても、延命措置をしたところで、そんなに彼女は長くは持たない事が分かつてた。

だつたら、そこまで長くないんだつたら、リスクを冒してまで、尊厳死なんてものを実行しようとは思わなかつた。

そして、彼女の家族もそつだつた。

彼女が尊厳死を望んでいるのは良く分かる。

目の前に居る自分の子供が、妹が、もう普通に生きている状態だと思えなかつた。

そんな状態で居続けるのが、彼女の幸せだなんて思えなかつた。だけど、だからと書いて、彼女の思いを汲み取るだけの踏ん切りはなかつた。

出来ればしてやりたいけれど、するだけの勇気が出なかつた。結局、彼女のためとは言え、やつていることは、人の命を消すこと。人殺しと何も変わらない。

自分の大事な家族を殺すことと変わらない。

そんな事が出来るわけがなかつた。

だから、代わりに僕がした。

彼女が望んでいたことだから。

自分の大好きだつた人が、自分の望まない姿でいるのを見ていたくなかつたから。

彼女が無様な姿をさらし続けているのを見たくなかつたから。

だから、彼女を殺した。

そう、殺したのだ。

だから、僕は裁かれるべき人間だつた。

殺人は人が一番犯してはいけない罪。

しかも、自分が一番愛していた恋人を殺したのだ、重く裁かれるべきもの。

なのに、僕は裁かれなかつた。

そこにつつた人殺し、という罪はなくなり、ただ、延命措置の甲斐

なく事切れたという嘘の報告。

そう、もみ消されたのだ。

病院側にとつても、そして、彼女の家族にとつても表に出すわけにはいかないことであると同時に、ほつとしている事でもあったのだから。

彼女が望みながら、それを実践できなかつた。

しつかりとした手順を取つて、効力のある書類を作成しながら、実行できなかつた病院側と奏穂の願いをかなえてやりたいと思ひながら、尻すぼみして、結局実行出来なかつた家族側、どちらとも後ろめたさがあつた。

だから、隠した。

元々、そんな事が起ころる余地もなかつたとした。

だから、問題になりようがなかつたのだ。

どんなに、僕が人殺しであろうと、延命措置中の彼女にとつて最後の命綱の医療器具を止めようと、最初から、当の延命措置がかつたら、延命措置が意味を成さず、そのときに死んでいたのなら、僕が止めたというアクションはまず起こりえないのだから。

けれど、それでも、隠しきれる問題でもない。

そう、例えば、ルリのように近しい人間ならば。

彼女は知つていたのだ、そして、駆けつけようとしていたのだ、奏穂の元へ。

せめて、最後の別れをするために、延命措置で何とか命を繋いでいる彼女の元へ。

延命措置は、きっと本人のためじやない。

ただ、死別となる人達に一刻の猶予を、別れをするための猶予を与えているだけに過ぎないんじやないのだろうか。

それが、本当に真実なのかどうかは、人によつて違うだらうが、ルリにとつては、きっとそうだつたんじやないかと思う。

もし、僕が延命措置を止めていなければ、ルリは奏穂と最後の別れが出来た。

生きているとは言えないが、まだ死んでもいない奏穂と別れが出来ていた。

けれど、ついたときには、既に彼女はもうこの世にいなかつた。延命措置をされていいるはずの彼女は、もう死んでいた。まだ、もう少し猶予があつたはずなのに、間に合わなかつた。本来あるはずだった時間が奪われた。殺されたのだ。

彼女はそう思ったのだろう。

僕が、彼女を殺したと思ったのと同様に。

彼女が尊厳死を望んでいた事を知らないルリは。

「教えなさい、なんで、あの子を殺したの? どうして、延命措置を止めたのよ」

きっと誰かから聞いたのだろう。

必死になつて聞き込みをしたのだろう。

もう少しで手にする事の出来たはずだったのに、最後の最後で奪われた時間のために。

「彼女が、それを望んだんだ」

答えるべきか、答えぬべきか、迷いはした。

奏穂は、ルリには言わなかつた。

何故、言わなかつたのかは、知らない。

どうして、相談しなかつたのかは知らない。

だけど、言わなかつたのは事実だ。

なのに、僕が言つていいのかどうか、分からなかつた。

けれど、これ以上何も言わなければ、それはそれで彼女を苦しめる事になると思う。

行き先のない、行き場のない感情をいつまでも持つていると、その感情に溺れて、前も後ろも見えなくなつてしまつ。

そんなことを奏穂が望んでいるとは思えなかつた。

「奏穂は、尊厳死を望んだ。延命措置をされたくない。ただ生かされているだけ、機械に生かされているのが嫌だと言つていた。だか

ら、それを叶えてやつたんだ。医療器具のスイッチを止めて、彼女を殺した

だから、言おうと決めた。

真実を。

「だから、君がそれを恨むなら、好きなだけ恨んでもらって構わない。どんな罰も受ける。それは僕が背負うべき罪だ。僕が人殺しだと言つ事実にはなんら変わりないんだ。書類上でどんな事が書かれていようとも」

そして、それが今出来る僕の罪滅ぼし。

誰も裁いてくれなかつた。

彼女を殺した僕を誰も攻めず、裁かなかつた。

むしろ、心配してくれた。

鈴穂さんも、奏穂の事があるから、僕の事を見てくれている。

無料での診断。

いくら、カウンセリングだけとはい、それでも、結構な額になる。それが、毎月となると家計に多少響くことになる。

それに、僕自身、親に、自分の病気のことは言つていない。元々、僕が病院に行つていたのも、原因不明の体調不良だったわけで、それも、当時診察した医者は单なる気のせいですませて、親もそうだと思い込んでいた。

だけど、その当時、ただの研修医だった鈴穂さんは違つた。

医者としては珍しく熱意を持つて診察してくれたおかげで、僕はその当時の体調不良の原因がストレスから来るものだと分かった。人間が怖い庵原夕貴。

理由は分からない。

ただ、人の傍にいると恐ろしく緊張する。

そして、恐怖する。

不安になる。

自分の居場所が分からなくなつて、自分自身が分からなくなつて、混乱してしまう。

そんな僕に気が付いてくれたのが鈴穂さんだった。

鈴穂さんだけだった。

そして、そんな鈴穂さんが引き合わせてくれたのが、奏穂。ルリと言う少女しか友達のいない妹のために、そして、対人恐怖症の僕のために引き合わせた。

何かを変えるために。

色を失いつつある、生きる気力を失いつつある妹のために。一人でいる事を当たり前と考える、一人でいる事こそに安心感を求める僕のために。

だけど、その結果は片方には希望を、片方には絶望を与える事にしかならなかつた。

奏穂は希望を手にした。

悲しくて苦しくて怖くて暗い闇の中にいながらも、それでも希望を手にした。

ほんの一瞬の安らぎを手にして、闇の終わりを手に入れて、安らかに眠つた。

そして、逆に僕は、更にひどい対人恐怖症を手にした。

失われていく体温。

奪つてしまつた命の炎。

目の前で死んでいく最愛の人。

自分が殺してしまつた最愛の人。

つかの間の幸福のために手にして閉まつた暗い闇。

だから、鈴穂さんは、僕に手を差し伸べる。

自分が犯した罪に対する贖罪のために。

後ろめたさから。

「お断りよ。確かに憎いわよ。殺してやりたいぐらいだわ。だけど、だから、罰なんて与えてあげない。一生苦しみないさ。一生そうやつて悔いて、苦しんで、絶望してなさい。私は絶対に許さない。何があつても許さない。だから、絶対に罰なんて与えてあげない」

「そう」

そして、僕もまた、その後ろめたさから、過去の苦しみから逃げ出したかつた。

そのために、彼女に縋つたが、それも無駄だった。

深い深い憎しみを背負つた彼女は、贖罪をすることすら許さない。

それほどまで、大事だつたんだろう、奏穂の事が。

若くして死んでしまつた彼女は確かに不幸。

絶対に幸せだつたなんて言えやしない。

だけど、それでも、家族に愛され、友人に愛されていた彼女は、全くの不幸だつたわけじゃない。

ほんの少し、人が見たらホントにちっぽけに見えるぐらいだけど、それでも確かに幸せも手にしていたんだろう。

心の底から愛される幸せを手にしていたんだろう。

「じゃあ、僕は帰るよ。君も奏穂に会いにきたんだろう? ゆっくりと話していけばいいよ」

僕はそう言つて、ルリの前を、奏穂の前から去る。

「あ、ついでに一つお願い。学校にいるときだけでいいから、変わらず扱つてくれない? 保健室とあそこ、そこしか、僕の居場所はなーいから」

最後にその言葉だけを投げかけて。

第十一話 女神様の悪戯な手

「あら、ばれちゃったのね？全く、変なところで抜けてるんだから、昼休み、一応名田上は相変わらず恋人になつてている彼女のところに来ていた。

まあ、要するに保健室なわけだけど。

「否定はしませんけど、まさか来るとは思つてませんでしたからね。あそこに行くところは誰にも見られたくないんで、わざわざ時間をずらしてましたし」

誰にも見られたくない。

そして、それと同時に、会いたくない。

特に彼女の両親とは。

だから、時間をずらしていったのに、まさかずらした分だけど、損をするとは思わなかつた。

こうなるなら、もう少し早くか、遅くに来れば良かつた。
そうすれば、かち合わせ、なんて事もなかつたし。

「でも、まあ、ちょうどいいんじゃない？いつまでも隠し通せる事じゃないもの。下手にこじれる前に、まあ、あるかどうかは分かんないけど、親しくなる前にばれといたほうが、あとくされは無いしまあ、確かに彼女の言うことには一理ある。

下手に複雑な状況になるよりも、ただ、距離を取られるべつの方
がちょうどいいだろ？

「そうですね。で、この手は何？」

とりあえず、そのことはもう氣にする必要はないだろ。
と言つた、正直どうでもいいと言えばどうでもいい。

あくまでも、奏穂かなほの友人だった、というだけで、今までだつて大してそんなに親しいわけでもない。
長年来の親友ならまだしも、その程度だつたら、わざわざ心を痛める必要はないだろ？

それに、それよりも、もつと氣になる事もあるし。

「随分悪戯好きな手ですね？」

僕の服を脱がそうとしている本当に悪戯大好きな手。

「あー、えつと、何て言つたか、その、戴きます？」

「食うな！！」

その手を思いつきり叩き落とす。

全く、彼女と言つたら、本当に油断も隙もない。

まあ、そんな事を言つたら言つたで

『油断したり、隙を見せるほうが悪い』

なんていわれそなうだが。

本当に、女人の人つて得だ。

男がやつたら、それも完全に犯罪だと言つのに。

「いいじやない、恋人同士なわけだし。プラトニックな愛情だけじ

やなくて、ちゃんと身体のお付き合いもしないとダメなのよ？」

「まだ一ヶ月も経つてないのに、そういうのは早いと思つんですが

？」

「あら、堅いわねえ。いいじやない、愛がそこにちゃんとあれば、慈しみの心があれば、期間なんて関係ないのよ？」

「それでも、慎み深さも忘れちゃダメだと思いますけど？」

まあ、言つだけ無駄だらうが、とりあえず、言わないわけにもいかないだろ？

どちらにしろ、拒否する気は満々なわけだし。

「分かつてないわね。慎み深さ、それも大事だけど、それ以上にもつと深いところでつながつていてるつていう安心感とか絆の方が大事なのよ？お互い、誰にも見せない秘密を見せ合つ。やつて言つのつて結構大事なんだから

まあ、その気持ちは分からぬいでもない。

分からぬいでもないが、なんともおかしな感じだ。

やつぱり、どうしても本来あるはずの男と女のやりとりがあべこべになつてゐる感が否めない。

最近は、男と女の立場が逆転しつつあるとは言つたゞ、今までも真逆なのは珍しい方じやないだらうか？

「とにかくねがで、戴きます」

そして、手際良く彼女は僕の制服を脱がして行く。

馬鹿の馬鹿 話が来たらどうするよ。

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

そーじらくんの対応はばっちりだ。

抜かりはない。

量力れ

あきれたような目で僕を見るが、
事実は事実。

最初のキスだって無理矢理だし、今、こうして押し倒されたのも無

支那の歴史

僕の意図は全くない

「そつか。その手があつたか。未成年に對して成人が何らかの性的行為をした場合は、罰せられるんだつけ。それが少年相手に女性だ

「もととしてつたとしても

モニタ

ずっと、自分が野だからやられる感じなー」と懸念したけど、その

前に僕は未成年者。

守られるべき存在

ね
?
」

「えー、どうしようかなあ？」

初めての立場逆転

この二つもない高揚感と解放感は。

自由って言つのは、こんなに素晴らしいものだつたのだろうか。

長らく不自由しか知らなかつた僕には、分からぬ。

いつたい、自由がどんなものだつたのかさえ覚えていない。

だけど、今、僕は自由だ。

何にも縛られることない。

ああ、なんて素敵な事なんだろう。

「そう、そうね。もう、止まつてゐる暇なんてないのよね。という
わけで、さつさと既成事実を」

「つて、どうしてそうなる！？」

そんな安穏もつかの間、さつそく飛びついてくる。

「いいの、訴えてもいいの！？」

「訴えられるのは困る。そう確かに困る。だけど、ねちねちと言葉

責めされるのは、趣味じやない。というわけで、食べられる内に食べ
ておこうかと」

「逆効果！？」

どうやら、逆に火をつけてしまつたようだ。

「ちょ、ま、待つて。訴えないから、訴えないからちょっと脱がす
の待つて！！」

「ふふふ、もう遅いわ。やると決めたら、止まらない。それが私の
信条だもの」

「何、その暴走列車みたいな信条！？」

「おいしく戴かれなさい」

「いやああああああああああ

「二人して何やつてるんですか？」

不意の侵入。

そして、静かなツツ「//」。

『……』

そして、固まる一人。

もちろん、僕と瑞穂さん。

「て、なんだルリか

それと同時に氷解。
いきなりの侵入者。

それは、ルリだった。

「いや、いきなり呼び捨てにしないでくれる?」

「うん? ああ、ごめん。どうも奏穂が言つてたのがついついやつて、
つい。苗字で呼んだほうがいいかな?」

いつもいつも、奏穂は彼女の事をルリと呼んでいた。
それがどうしてもうつてしまつたのだ。

とはいえ、確かに失礼と言えば失礼。

「いや、別に名前でもいいけど、呼び捨てだけはやめてもらえるか
しら?」

だから、苗字で呼ぼうと思つたが、そこまではいかないらしい。

「うーん、じゃあ、ルリっちでも、いいかな?」

「……何、そのセンスもひねりもないあだ名は
どうやら、それはそれで気に入らないらしい。

まあ、確かにセンスがないのは認めるが。

だが、言わせてもらえば、あだ名なんてものをついたこと
自体一度もないのだ。

経験もないのに、いきなりひねつたものを出せと囁つのが、無茶と
言うもの。

初体験なんだから、多少は多めにみてもらいたい。

なんだつてそうだ、初体験と言つ物は緊張するものなんだ。
成功するとは限らない、というか失敗する可能性が大きい。
だから、広い心で見てもらわないと。

「にしても、ホント、性格変わったわよね? この前とは大違い。お
どおどびぐびく、何この団体のでかくてきしょい小動物は、つて思
つたけど、こっちが地でしょ?」

なかなか言いえて妙だ。

確かに、彼女の前での僕はそういう感じだっただろ?。

怯えていた。

彼女と言つ少女、というか恐怖の対象でしかない人間と言つ物が身近にいると言う事に。

「うーん、どうだらう？・どっちも地じやないかな？怖い物を前にすると怯える。でも、どっちでもないものの前だつたら、さほど気にしない。そういう感じじやないかな？」

でも、今は違う。

彼女は恐れる必要はない。

奏穂の友人だつた。

それだけで、全く別の物になりかわる。
だからといって、友人になるわけでもないけれど。
そこはまた別の話し。

「ああ、確かにそんな感じよね、夕貴は。怖い物に対しては敏感だけど、それ以外の事には無頓着と言うか、開き直ると、投げっぱなしジャーマン……。ポテトだつけ？ そんな感じの事をするわね」

「いや、違いますよ。てか、なんで、そんな誰も分からないうなプロレスネタなんか使うんですか。そもそも、ちゃんと分からんなどつたら最初から言わないでください」

「うーん、とりあえず、ここはボケておくべきかな、つて女の直感が。いやはや、ごめんねえ」

「役に立たない直感ですね」

「あら、女の直感を舐めてると怖いわよ？」

「そんなのは重々承知ですよ」

女の勘が怖いのは、もう経験済みだ。

鈴穂さんしかり、目の前の瑞穂さんしかり、奏穂しかり、かなりの恐ろしい経験がある。

思い出すだけでも、震え上がってしまうような事だつてあった。

なので、舐めて掛かるようなことはしないが、それでも今回は役に立つてないには違いない。

「ホント全然違うわね。全く、今のあんた見てたら、すぐに分かっ

たわよ。あの子が言つてたユウキにそつくり

「あ、呼び捨てやめてくださいね？名前で呼ぶのはいいんですけど、呼び捨ては、瑞穂さん限定ですか？」

一応、名前を呼び捨てにしていいのは、なんだかんだで恋人の瑞穂さん限定。

特別、と言つことだ。

まあ、そんなことを彼女が気にするかどうかは分からぬけど、僕なりのけじめだ。

「はいはい、悪かったわよ。たく、その飄々ぶりったら、なんと言ふか、まあ、一筋縄では全くいかなさそうね」

「そうですか？ てか、奏穂は、僕の事どうこう風に言つてたの？」

飄々としている。

それは、いい意味なのか悪い意味なのか、どっちなのだろう。

一応、恋人なんだから、嫌つていでくれるとは思つんだけど。

「そうね、優しくて、おもしろくて、なよなよつとして弱そうだけど、意外と頼りになるんだけど、いつも何を考えているのか分かんない人だつて言つてたわよ？」

うーん、なんと言つか

「微妙ね」

瑞穂さんがそういった。

だけど、その通り。

確かに、微妙。

といふが、最後の奴は余計だ。

「でも、確かにその通りね。優しいし、おもしろいし、なよなよつとしてなんだか頼りなさうだけど、意外となんだかんだで頼りになるし」

「で、考へていることは分かりそうで分からぬ」

だから、最後のは余計だつて。

わざわざ瑞穂さんが言つた事に付け加えなくともいいだろ？ 「てか、そんなことよりも、どうして、ルリつちがこんなところに

いるわけ？」

もう一度センスのかけらもないあだ名で呼ぶと、彼女は眉をひそめたが

「まあ、あんたがあそこに来ないから、いつに来てみただけよ。てか、あんな事言つといて、ショッパなから来ないつてどいつにとかしら？」

あきれたように返す。

いや、確かに、どうこうことだらう。

あんなお願ひしとてショッパなから来ないつていつのも、なんか変な話だ。

「いや、先に瑞穂さんに状況説明をしておいつかと。いつ、また迷惑をかけるか分からぬからね。鈴穂さんともども」

ただ、どうしても、先にこっちのほうをかたしておきたかった。

これから先は何がどうなるかは分らない。

だから、不安な材料は出来るだけ片付けておきたかった。

「迷惑？意味がわかんないんだけど？」

けれど、それは彼女にとつては分けのわからないことだらう。何も言つてないんだから当然だ。

僕の病気のことも、そして、彼女を殺してしまった後のことも。そう、自分の恋人を、最愛の人を殺して、平気で生きていけるほど最低な奴になつた覚えもなければ、割り切れるほど大人でもない。苦しまないはずがない。

「いや、君にばれただろう？一応、もみ消してしまつた事だから、表に出たら困ることなわけだし、その関係者でもあるからね。一応報告義務はあるの」

でも、それは彼女に話す必要のない事。

関係のない事。

だから、嘘をつく。

瑞穂さんが何か言つた氣な表情をするけど、それは無視。

「だから、昨日お願ひしとてなんだけど、昨日言つた事は黙つて

欲しいんだ。君が僕の事を恨んだり、憎んだりするのは構わない。だけど、それを言いふらすようなことはして欲しくないんだ。そんな事をすると病院と彼女の家にも迷惑がかかる。奏穂のためにも、黙つていってくれないかな？」

「随分卑怯な言い回しね？」

そんなことは重々承知だ。

厚顔無恥だと言われても否定できない。

だけど、僕たつて自分が犯した罪で、誰かに迷惑をかけたくない。自分のせいだ、誰かが傷ついていく姿を見たくない。

「だけど、まあ、黙つといてあげるわよ。奏穂も望んじゃいないだろうし、先生や鈴穂さん今まで迷惑がかかるつもりはないし、つか、それぐらい私たつて分かつてるから、言つつもりなんて最初からないわよ」

「そつが、そうだよね、うん、『ごめん』

まあ、そりやそりやう。

自分の大事な親友とその家族。

その人達に迷惑をかけるようなことはしないだろう。

どんなに、僕の事が憎かろうとも。

それぐらいの常識はあるだろう。

少々ビショではなく、かなり彼女を低く見てしまった。

これは、反省点。

「で、話し合いは終わつたかしら？」

「はい？まあ、別に聞きたいことは聞きましたけど？」

不意に瑞穂さんが話しに入つてくる。

さつきまで、黙つていたのに、いつたいどうしたのだろうか。

「それは、良かつた。じゃあ、これからは、恋人同士の甘い時間になるから、邪魔物は、はい、退散ね？」

そう言つたルリをぽんとドアの方へと押し出す。

「というわけで、戴きます、つて、あれ？」

「残念ですけど、もうそろそろ授業が始まるんで、僕も戻ります」

それについて行くよに僕も、ドアの方へと既に退避済み。

先生との付き合いも多少長くなつた、とか濃くなつてきたせいで、だいたいの行動が読めるよになつてきている。

「それじゃ、また、今度」

だから、こうして、逃げる事も出来る。

「うへ、今度こそ、今度こそ、戴くからね……」

とはいへ、いつまでもは、逃げられないだらうけれど。

第十一話 救われない人達

退屈な時間こそ、僕にとつて救いの時間。

一刻の猶予。

あまりにも日々に悲しみと絶望が馴染み過ぎて、安穏な生活なんて送れなかつた。

だから、退屈な時間こそ僕にとつては平和で救い。

求めてやまない時間。

「うん、随分良くなつたんじゃないかしら?」

そう言つて、鈴穂さんは、聴診器を耳から離す。

聴診器と言つても使い方はいろいろあつて、僕の場合は心音の安定度を図るために使つていて。

女性恐怖症の持つ僕が、女性である彼女に振られても心音が乱れたりしないか、そういうことだ。

「それでも、やっぱり、顔色はあんまり良くないわね。ホント長い間一緒にいるけど、全く慣れてはくれないのね?」

「綺麗な女性はそれだけで、意識してしまいますからね。特に鈴穂さんのように目の醒めるような美人さんだと、それに合わせて、影響が大きくなるんですよ」

女性だと意識されしなければ、そんなに影響は出ない。

元々ある対人恐怖症が多少顔を出す程度で、それだけしつかりと対処すれば、表立つて症状として出るようなことはない。

だから、女性として意識させられるような人以外であれば、いくらでも対処は出来るんだけど、女性として意識させられるような、それこそ鈴穂さんのような美人さんが相手だと、どうしても意識してしまつ。

そして、そのまま悪化、と言つ感じだ。

それに、やっぱり奏穂の姉妹だと言う事が大きい。

どうしても、彼女と似ているところがちらほらと見えてくる。

そうすると、どうしても、身体は反応する。

拒否する。

思い出してしまつ。

暗い暗い闇の中での生活を。

「やつぱり、あの子の姉、だからいけないんでしきうね」

そんな事ぐらい彼女も百の承知だ。

「本当は、私じゃなくて他の人頼めればいいんだけど、任せられる人がいなものね」

それでも、それが出来ないのは、他の誰にも頼めないから。あまりにも事情が複雑になり過ぎて誰にも頼めない。

ただの精神病ならいくらでも頼めるけれど、原因がはつきりしてい、その原因自体が表に出せないのだ、八方塞もいいところ。

だから、こうして、無意味と思われてもしかたのない事をしている。「大丈夫ですよ、僕は一人じゃないですから。瑞穂さんがいますし。あの人気がいる限り、僕は崩れませんから。今日はありがとうございました、これで失礼させてもらいますね?」

それでも、僕は崩れない。

瑞穂さんがいてくれるから。

彼女がいてくれるから。

だから、大丈夫。

「待ちなさい」

だけど、彼女はそれを制する。

瞳には悲しい色。

何故、そんな瞳を、悲しそうにするのか分からぬ。

「覚えておきなさい。確かに、瑞穂がいれば、君は一人じゃない。けれど、その代わり救われもしないのよ、絶対に。あの子じゃ、無理なんだから」

そして、何故そんな事を言うのかも分からぬ。

今の僕は幸せなんだ。

確かに、未だに僕は彼女との距離を縮められていない。

それでも、悲しみに押しつぶされることはない。
彼女を殺してしまったときのよつた絶望はない。
だから、僕は大丈夫。

彼女と居れば、幸せなんだ。

幸せになれるはずなんだ。

「ありがとうございます」

だけど、そうして心配してくれる気持ちがとても嬉しい。
本当に素直に嬉しいと思う。

その気持ちだけでも受け取っておきたい。

「それじゃあ、また来月」

そして、僕は、そう言って、部屋を後にした。

そのまま、家から出ると、視界一杯に広がる中庭を眺める。
既に患者ではない僕は、もう病院にはいけない。

だから、今、僕が居る場所は彼女の家。
実家。

出来れば、行きたくないけれど、実家暮らしの彼女との往診はここ
でしかできない。

それに、田の前に広がる中庭は恐ろしく広く、敷地にある本邸もか
なりでかい。

これだけの大きさを誇る家なら、そこまで心配しなくてもいい。
彼女の両親に会うかもしれない可能性を考えなくて済む。

それに、基本的にその二人は多忙。

家に居ることはずまずない。

それを考へると、会うわけがない。

「お久しぶりですね、夕貴君」

「っ！」

思わず膠着する。

不意の出来事。

ありえるはずのない出来事。

望まぬ出来事。

絶対に起きてはいけないこと。

そう思っていたのに、不意の邂逅。

恐る恐る振り返ると、田の前にいるのは、彼女の両親。居るはずのない一人。

多忙を極めるはずの一人。

「少しお話がしたいんですけど、構いませんか？」

たおやかな笑みを浮かべてそういう彼女の母親の姿は、住む世界の違いを見せ付けられる。

金持ちと一般人。

嫌でも気づかされてしまつ。

「はい、大丈夫です」

出来ることなら逃げ出したい。

だけど、逃げ出せない。

もしかしたら、これは、何かが用意したものなのかもしれない。

僕が前へと進むための布石。

瑞穂さんとの未来を進むための閨門なのかも知れない。

なら、僕は、逃げ出すわけにはいかない。

それに、多忙なはずの二人がこうして揃つて僕の前に居る。わざわざ時間を作つたのだろう。

それを無碍にするのは、はばかれる。

奏穂を殺した罪人としても、瑞穂さんの恋人としても。

「ありがとうございます。なら、こちらへどうぞ。せつかくお天気もいい事ですから、テラスでお茶をしながらお話しましょう」二人に従うように、僕は案内されるままに歩き出す。

見上げた秋空は高く、青く澄んでいた。

「まずは、自己紹介からでよろしいですか？奏穂の葬式以来会つていませんし、お互い、知らないことが多すぎますから。私は、夕貴君の知つてゐる通り、奏穂の母の果穂と言います」

「私は、父親の譲だ」

一人は、そう言つてそれぞれ柔らかい笑みを浮かべる。

嫌味も何もない、穏やかな笑み。

僕が、思い描いていたお金持ちの印象とは全く違う。

「僕は、庵原夕貴です。以前は奏穂さんとお付き合いでさせてもらつっていました。今は、瑞穂さんとお付き合いでさせていただいております」

それに習つよつて、僕も続ける。

なんだか、変な感じだ。

確かに、彼女の、果穂さんの言つ通り、僕は彼女達のことは知らない。

だけど、きっと、彼女達は僕の事を良く知つていてる。

鈴穂さんや瑞穂さんに聞けば分かることだし。

それでも、あえてそういうと言つことは、僕に気を使つてくれて、なのだろうか。

僕は、彼女達が奏穂の両親だと言つ事しか知らないわけだし。名前なんでもちろん知らなかつた。

そして、それ以上にその瑞穂さんとの事。

そのことを言つうかどうか迷つた。

迷つたけれど、言わないわけにはいかない。

言つのには、そうとうな決心が必要だつたけれど、言つた後は、すつきりとしている。

独りで抱えるだけの余力がもつないのである。

いや、ないから、今でも僕は、ずっと女性恐怖症なのだろう。余力も余裕もない。

だから、いつまでも、前へと進まない。

「そのことは、鈴穂と瑞穂から聞いております。特に瑞穂の事、迷惑を掛けてしまつて申し訳ありません」

「あ、いえ、むしろ、救わてるぐらいですから、気にしないでください」

「そうですか。それなら瑞穂の事は構わないんですが。やっぱり、

奏穂の事、重荷になってしまっていたみたいですね

「……」

思わず言葉に詰まる。

明らかに失言だった。

「ずっと気にしてました。奏穂の事で負担をかけてしまっていたことは、重々承知していましたから。ですが、私達は、貴方に心苦しい事を押し付けてしまった人間ですし、鈴穂から貴方の病気の事を聞いてしまったら、更に何もできませんでした。申し訳ありませんでした」

場の雰囲気が暗くなる。

分かつっていた。

余計な事を言えば、こうなる事ぐらい予想していた。
だから、今まで逃げてきたんじゃないか。

「いえ、気にしないでください。ただ、僕はあれ以上、あんな姿の奏穂を見ていたくなかっただけなんですから。それに、結局僕のやつたことは、褒められるようなことじやないですかね」
自分自身の罪と一緒に。

「確かに、君の言つとおりだらう。決して、世間的に觀れば、君のやつたことは褒められることではない」

不意に、初めて、会話に譲さんが入つて來た。

「人一人の命を奪つたんだ、それは責められるべきものであらう」
そう、それは罪。

裁かれるべき大罪。

愛する恋人を殺した罪人。

だからこそ、僕は責められるべき存在。
許されざる存在。

「けれど、それは、私達も同じなんだ。自分の娘の願いを叶える事が出来ず、保身を考え、拳銃に、若くまだまだ未来のある君に全てを押し付けた。大人のやるべきこととは言えない。君に全てを押し付け、見えない振りをした。君の未来を潰したんだ。それこそが、

私達の罪」

けれど、そんな僕を見る目はとても優しい。

泣きたくなつた。

だけど、それは、喜びじゃない。

優しい目で見られる、心配してくれる。

その気持ち嬉しい。

だけど、それと同時に、もう、この世界にはどうにも自分を裁いてくれる物が居ないことの証明。

永遠に、僕はこの罪を背負わなくてはいけない。

どんなに苦しくても、悲しくても、辛くても、誰にも許されることはなく、背負わなくてはいけない。

助けて欲しいのに、何も言えない。

彼らもまた苦しんでいるのだから。

許される事のない罪を背負い続けるといけないのだから。

僕が何かを言つた所で、彼らを救える事なんてないだろう。むしろ、傷つけ、更に苦しめるだけだろう。

だから、何も言えない。

お互に救われることはない。

皮肉なのだ。

彼らの罪を知るのが、彼らからしてみれば被害者で、本来許しを請うべき相手なのに、絶対に裁いてもらえない相手である僕で、そして、僕の罪を知つて、救い方を知つてするのが、僕を憎んでやまず、救う事を拒否したルリだけ。

僕が救われないと彼らは救われない。

だけど、僕は永遠に救われない。

だから、彼らも永遠に救われない。

悲しい結末。

たつた一人の女の子の死が、それ以上の人の心を縛り付ける。

彼女の願つた願いはそんなに罪深い事なのだろうか。

そんなに愚かな事なのだろうか。

僕には、その答えを知る術は一つとしてない。

「そうですわ。せっかく、こうして、屋敷に来て頂いているわけですから、お夕食、『ご一緒にませんか？』

静まりかえる場の空気。

それを払拭するかのように、彼女はその言葉を紡いだ。

「そうだな、君がよければだけど、どうだい？」

それに彼も乗る。

ただの社交辞令。

その可能性はある。

と言つうか、普通はそう考へるべきである。

まだ、数度しか会つていらない人に自宅に夕食を招くことはまずない。

ただ、この場の雰囲気を変えるために、言つただけだと考へるのが常識だ。

「ありがとうござります。」迷惑にならなければ、お世話になります

悲しそうに揺れる一人の瞳。

一生懸命に何かをなそと揺れる瞳。

それは、一般常識とはかけ離れたもの考へるべき状況。

常識の範疇外で考へないといけない状況。

僕には決して彼らを救えない。

それでも、せめてもの慰めとして、刹那のまやかしだらうと、それを見せてあげたかった。

ただ、次女の恋人として、彼女の家に招かれた男として、会つてあげたかった。

ただそれだけのこと。

第十二話 猶那の温もり（前書き）

あつあつセーフ……

だと思いたい。

うーん、直接的な描寫ははないし。

招かれた夕食は、生まれて初めて見るものばかりの豪華な物だった。質や量からして、おそらく、最初から誘つつもりだったことが分かった。

あの時、迷わず頷けた事をよかつたと思つ。

まあ、よくよく考えてみれば、あの場で、断るのは多少失礼に当たるような気もした。

せっかくの誘いだし、何より、たいした用事もないのに、せっかくの申し出を断ると、角が立つ、と言つよりも、関係性を悪化させかねなかつたかもしれない。

もちろん、実際やらなかつたことだから、どうなつていたかは、分からなかつたが、あまり良い予感はしない。

「父と母が、ホント喜んでたわ、ありがとね？」

「そう言いつつ、僕の服を脱がそうとしているその手は何なんだろうね？」

にゅつと出てきた彼女、瑞穂さんの腕を掴み、解く。

今は、瑞穂さんの部屋で、小休憩となつていて。

しつかりと、かなり高級マンションの一室を借りてるくせに、実家にもちゃんと部屋が残つてゐるなんて、羨ましいものだ。しかも、その部屋は、僕の部屋のゆうに一倍以上はある。特別貧しい家じゃないとは思つてゐるが、それでも、貧富の差をこうちも感じる羽目になるとは思わなかつた。

自分の家庭が、貧しいんじゃないかと、錯覚させられるほど、この家は豪華。

豪華すぎる。

気が滅入る、気が休まる暇も感じられないほど。

「まあ、いいじゃない。食事後の恋人の部屋。窓の外は暗く、周りには邪魔する者はどこにもいない。しかも、防音設備はばつちり。

恋人同士の語らいにはぴったりじゃないか？」

「つまり、どんなに泣いて叫んでも助けは来ないから、慰み物になる覚悟をしろ、と？」

拳句に、この状況。

もう何度目になるのか分からぬ程の貞操の危機。
そういうことなんだろう。

「ちゅ～」

わざとらしく音をたててのキス。

ただ唇を重ねるだけの行為なんだから、音がするわけはない。
何故、彼女がそうするのかは、分からぬ。
僕は、それを拒否しない。

ただ、身体を寄せてくる彼女を抱き締める。
豊かな一つの膨らみを持っているくせに、折れそうなほど華奢な
身体を抱き締める。

「今日は逃げないんだ？」

「逃げても無駄でしょう？ どうせ、鍵も掛かってることだろうし、
逃げられないんなら、逃げませんよ」

二人は恋人。

それを、彼女の両親にも言つている。
だから、もういいだろう、と思つた。

まるで、何も知らない無垢な少女のように、相変わらず心は、今から行う行為に怯えている。

だけど、それも、数をこなす内に気にならなくなるだらう。
人はそうやって慣れていく。

傷や痛みを乗り越えて前へと進んでいく。

「てやつ！ ！」

僕も、そうして進んでいく。

彼女と共に。

だから、彼女をベッドに押し倒す。

彼女と一緒に。

僕が初めて起こした受身じゃない、僕自身の能動的な行動。そして、そつと彼女の唇にキスをする。

唇の次は、頬、そして、瞼、髪とキスの雨を降らせる。

「随分手馴れてるのね？」

そんな僕を見て、彼女は苦笑混じりにそういう。

「恋人を前にして言うことじゃないだろうけど、こいつことじがらいは、奏穂と、経験済みですから

彼女と身体の繋がりは全くない。

彼女には、そんな体力なんてないし、僕自身も恐れていた。

人アレルギーにも近い症状があつた僕だけど、彼女は大丈夫だった。いや、心を許している彼女だから大丈夫だった。

だけど、いざ、更に一步進んだ時、もつと深い繋がりをもつとしたとき、その時の自分がどうなるのか分からなくて怖かった。大丈夫なはずの彼女ですら、拒否反応とも取れる症状が出たらと思うと、踏み出せなかつた。

彼女を傷つける事、そして、自分自身に降りかかるだらう虚しさを思うと、怖かつた。

心を許しているはずの彼女ですら、深い繋がりを持てないという現実を見たくなかった。

観る勇気がなかつた。

だから、深い繋がりは、望めなかつた。

そして、その代わり、出来る限りのスキンシップは取つた。それだけの事。

「ホント、その通りね。てか、姉としても、ちょっと嫌だわ
深い深いキス。
ただ唇を合わせるだけの物とは違ひ、もつとお互いを絡ませ合つようなキス。

それは、嫉妬から来たものなのだろうか。
自分の妹に嫉妬してしまつたのだろうか。
そんなことは、分からぬ。

だけど、彼女のそれは、もっともっと深い繋がりを欲しているように思えた。

深い深いキスのただ中、彼女の頬を、髪を右手で撫でながら、あいだにいる左手で、彼女のブラウスのボタンを外しにかかる。

自分でも驚くほどの器用振り。

ずっとずっと、こんな事には不慣れで、一生不慣れなものだと想っていた。

だけど、そんな予想とは裏腹に、事は淀みなく流れていく。彼女が拒絶しないのもあるだろう、だけど、僕自身もその手は、緊張で震えることも、何もなく、ただするりするりと解いていく。やつぱり、僕も庵原夕貴という一個の人間であると同時に、ただの男と言いつこと。

無意識のうちに、自然とそう出来るようになっていたんだろう。

「なんだか、改めて、こうすると恥ずかしいわね？」

一度唇を離すと、彼女はそういうと、苦笑する。

けれど、そういうながらも、彼女は既に、僕のシャツのボタンを外し終わっている。

「そうですね。うん、ホント恥ずかしい。穴があつたら入りたいぐらいですよ」

「あら、下ネタかしら？」

「ぶつ」

思わず吹いた。

いや、確かに、彼女の言つ通り、聞き方によれば、下ネタと取れな事はない。

けれど、さすがに、こんなときこそ、そんな事を言わないで欲しい。

「ホント、意地悪ですね」

「それが、私だもの」

彼女はそう言って笑う。

まあ、確かにそういうわれればそつなんだけども。

そして、そんな彼女を僕は素敵だと思っているわけだし。

最後のブラウスのボタンを外すと、淡いピンクのブラと白く滑らかな肌が顔を出す。

こぼれんばかりの豊かな二つの膨らみは、それだけで生睡物だろ。僕自身、今にも口から飛び出しそうなほど、心臓が脈打っている。初めて彼女のマンションに誘われて、押し倒されたとき。

あの時は、何も感じなかつた。

だけど、今は違う。

今、僕の中にある牡としての本能には、しつかりと火が灯っている。ミニのタイトスカートをするすると脱がせる。

僕も既に、ボクサーパンツのみ。

彼女を脱がしながら、僕も少しづつ脱いでいた。

ベッドにいる彼女は、上下薄いピンクの下着を纏うだけの姿。

秋になり、もう肌寒いはずの季節。

なのに、それでも、パンストを履いていなかつたのは、彼女なりの配慮だらう。

もしかすると、彼女自身も、こうなる事を期待していたし、予測していたのかもしれない。

そして、履いていると手間取る事を予想して、脱いだのだろう。

その心遣いに感謝したい。

ここまで、せつかくすんなりと着ていたのだ。

それを、ここで止めてしまうのは、もつたいないし、興ざめにもなりかねない。

だから、未然に防いでくれた彼女のその気持ちに感謝したい。

「ありがとう」

その気持ちを載せて深い深いキス。

キスの合間に残りを脱がして、僕自身も全てを取り払つて、素肌同士で感じる温もりを絡ませながら深い深いキス。

僕達は深い深いキスをした。

割と深夜に近い時間。

ようやく、僕は、目覚めた。

「おはよー」

それに合わせて、くすりと笑いながら、彼女はそういう。
初めての行為後、僕はあっさりと眠りに落ちた。

とはいって、それは、初めての行為のための疲れだったのか、それとも、単なる女性恐怖症から来るものだったのか、僕には分からない。
そう、僕には、分からない。

けれど、直接ずっと僕を見てきた彼女なら分かるだろう。

「うーん、やっぱり、あれね。未だに異物感が残るわ。これが、初体験の痛みって奴？」

「そんな事聞かれて、僕には分かりませんよ

本日初体験な僕に、そんな事を聞かれて、分かるわけがない。
「でも、まあ、良かったわ。初体験が夕貴で。他の奴だったらと考
えたら、もう、ぞつとしないわ。それこそ、姉さんが付き合ってき
たようなゴミみたいな奴だったら、あれね、自殺物よ」

「いや、そこまで言わなくとも」

確かに、彼女の気持ちも分からぬでもないが、それはちょっと言
いすぎなんじやないだろうか。

こうして、僕を持ち上げてくれるのは、本当に嬉しいが、僕自身、
そんなに偉い人ってわけでもない。

分不相応な持ち上げられ方をすると、やっぱり居心地が悪い。

まあ、それでも、確かに、鈴穂さんの周りをうろちょろしている男
達は、ゴミみたいなもんだけど。

まあ、彼らにしてみれば、ひどく心外だろうが、それでも、やっぱ
り、評価はそれに落ち着く。

「だから、私は幸せ。いい想い出が出来たわ」

彼女はそう言って笑う。

だけど、その笑顔はどこか寂しげ。

何かを覚悟したような、何かを終わらせようとしているような笑顔。
そう、まるで、それは、僕が……

「だから、夕貴もいい想い出を作りなさい？」
僕が、奏穂を殺した時の物と同じ。

絶望を心に宿した瞳。

「今の私には、夕貴を救えない。奏穂に縛られている夕貴は救えない。だから、今日は私と夕貴の、最後の思い出のために仕組んだの。父と母と姉に協力してもらつたの」

そう言って、彼女は悲しそうに辛そうに笑う。
本当は泣きたいくせに。
泣いて縋りたいくせに。

それを良しとせず、気丈に振舞う。

その姿は、あのときの、殺してしまつた後の僕の姿と、だぶる。
辛くて悲しくて泣きたくて、泣いて縋りたくて、だけど、それをしなかつた。

出来なかつた。

ただただ、誰が見ても分かる作り笑いをしていた。
作り笑いをして謝つた。

謝つて、死んでしまつた彼女のもう一度だけ見て、そして、病室を出た。

あのときの自分を見ているかのようだ。

「父と母は二つ返事だつたわ。元々、夕貴に会いたがつてたし、謝りたがつてた。姉さんも同じ。私じゃどうしようもないことなんて分かつっていた。だから、手伝つてくれたの。このたつた一時のためには」

周到に用意した罠。

そういうわけではない。

いくらでも、退路はあつた。

けれど、彼女にとつては、今の彼女に出来る最大の博打。

大勝負。

「もし、僕が受けなかつたら、拒否したら、どうするつもりだつたの？」

それは、決して起こりはしなかったイフ。
だけど、どうしても気になる。

彼女にとつての大勝負。

たつた一時の、一瞬のまやかとして、それでも、その幸せがあるからこそ、彼女は捨てた。

僕のために、僕を救うために、彼女はそれを選んだ。
だけど、もし、僕が彼女を受け入れなかつた。

逃げ出したら、どうしたのだろうか。

「無理矢理押し倒してやろうかとも思つてたけど、たぶん、出来なかつたでしょうね。出来ずに、お別れを言つてたと思うわ。さつき言つた事と全く同じ事をね」

だけど、それは悲しすぎる答え。

たつた一時のまやかしですら手にする事の出来なかつた悲しい道。

それならば、僕は安心できる。

自分が取つた選択肢を。

だけど、それと同時に不安。

これから先が、彼女のこれから未来が、不安でたまらない。

ほんの一瞬でも手に入れてしまつた温もり。

それをむざむざと手放す。

手にしなければ、分からずにするんだはずの温もり、知らずにすんだ喪失感、絶望感。

それを感じさせてしまつのではないか。

更に辛くさせてしまつのではないのだろうか。

「ふふ、暖かいね」

彼女がぎゅっと抱き締めてきた。

秋は深まり、夜、特に深夜となれば、一気に冷え込む。

だから、じつして、素肌で感じる温もりは、心も身体も温めてくれる。

芯から暖めてくれる。

「私の心配してくれていいんでしょうか？大丈夫よ。私は負けない。

大切な夕貴を幸せにしてみせるから

僕はぎゅっと彼女を抱き締め返す。

「夜があけるまでは、僕達は、まだ恋人だよね？」

そして、そういうと、キスをする。

夜が明ければ、もう僕達は恋人ではいられない。

ただの、校医と生徒に戻る。

もちろん、親しさは変わらないだろう。

だけど、もうこんな深い繋がり合い方はしないだろう。

だから、せめて……

奏穂が死んで初めて、この腕で抱きしめた、キスをした彼女を、深

く深く愛したい。

繋がついていた。

まだ、もう少し、夜明けまでには時間があるのでから。

第十四話 もう一人の女神様

「起きるーー。」

その声と同時に、打撃音が部屋中に広がった。いや、誰が何をしたのか分かっているけど。

「「めん、昨日励みすぎて、無理」

だけど、とりあえず、無視。

眠い。

恐ろしく眠い。

まあ、第三ラウンドまで突入してしまった辺り、若さなんだらけ。つか、頑張りすぎ。

だから、その反動で、今はものすりぐく眠い。

「起きんかいーー！」

再度、声と同時の打撃音。

小気味いい、『パシーン』と言つ音。

もしかして、ハリセンなのだろうかとも思つけど、そんなものは、この部屋にはないから、除外。

「てか、励み過ぎつて、もう少しデリカシーツて物を考えなさい」更にもう一発。

確かに、年頃の女性に對して言つていい言葉ではないだろう。デリカシーがないと言われたら、それは仕方のない事だろう。でも、だからと/orして、そんなに叩きまくらなくともいいと思つ。これ以上、アホになつたら、残念な子になつたら、どうしてくれるんだ。

責任を取つてくれるとでも言つのだろつか。

「でも、眠いから無理」

なんて事も考えたけど、結局撃沈。

だって、眠いんだもの。

眠すぎる。

結局、第二ラウンドが終了した後も、なんだかんだと一人いちゃついてたし。

やっぱり、タイムリミットが近づけば近づくほど寂しい物なんだ。例え、拒否反応が起きても、それでも、その温もりを否定は出来なかつたわけだし。

あの夜の出来事中、ずっとと拒否反応は出てた。

苦しかつたし、辛かつたし、気持ち悪かつた。

確かに、彼女の言う通り、彼女ではダメだった。

どうしても、奏穂の面影を追つてしまつ。

だけど、それでも、やっぱり、幸せなのには違ひなかつた。

失いたくはない時間だつた。

だから、その時間が残り少なくなるたびに、胸が締め付けられるよう寂しかつた。

僕も気づかぬうちに、彼女に惹かれていた。
そういうことなんだろう。

「だから、寝るなつづくにーーー！」

更なる追い討ち。

この人は何がしたいんだろう。

さつきから人の頭をポンポン叩いて……

簡易裁判所に訴えてやろうか。

「こつちは、聞きたい事があるのよーーー！」

更に、追撃の一撃。

どうやら、無言のまま眠りにつこうとしてたのを察知したらしく。
なんとも、敏感な人だ。

「良し、分かつた。この庵原夕貴。何でも答えてやろう。好きな食べ物から、好みのタイプ、フェティシズム、なんならスリーサイบつーーー！」

なら、さつと答えて眠りにつこうと思つたら、思いつきり叩かれた。

獲物は、教科書だった。

まあ、妥当だわつ。

すつじく痛かつたけど。

というか、思いつきり、横つ面をなぐるとは、どうかと思う。

「今からするのは大事な話し、奏穂の……て、なんだ、そんな顔も出来るんじやない」

彼女の顔が不意に緩む。

とりあえず、自分の顔をいじってみるが、分からぬ。

分からぬけど、なんとなく予想が付く。

さつきまでの、ぼけつとした、というか、瑞穂さんの言葉からでは、飄々としている、目の前にいる彼女にしてみれば、何考えてこるのか分からぬ表情から、多少真面目になつた、ということだわつ。

「で、奏穂がどうしたのかな？」

だけど、そんなことはどうでもいい。

それよりも、奏穂の事、というよりも、いじつして、ルリとの話しで、彼女の事が出てきた事の方が気になる。

「全く、ホント、いい性格してるわ。まあ、そんなんだから、奏穂も、好きになつたんだろうけど」

そんな僕とは裏腹に、彼女はため息。

褒めているのか貶してるとか、微妙だ。

ただ、なんとなく、僕には褒められていくような気持ちにはなれない。

というのは、もしかすると、自分自身でも、意外と認識しているのかもしねえ。

人から見ると、自分が、飄々としていて、何を考えているのか分からぬと言つ事を。

「まあ、いいわ。奏穂の事、というよりも、それが原因で貴方の身上に起こつた事について聞きたかったのよ。貴方、女性恐怖症らしいわね？しかも、重度で、拒否反応が起きるぐらいひどいらしいわね？」

思わず、自分でも表情が強張つたのが分かつた。

？」

このタイミングで。

そう、このタイミングで、こんな事を聞かれるとは思わなかつた。

それは、まるで、誰かに仕組まれていたかのようだ。

そう、初めて、瑞穂さんの家に招かれたときのようだ。

「言つたのは、鈴穂さんと瑞穂さん、どうせ？」

それ以外のところから漏れるとは思わない。

そもそも、僕のそれを知つている人間はかなり限られている。むしろ、その一人だと考えるのが妥当だ。

そして、一番可能性が高いのが……

鈴穂さん。

「鈴穂さんから聞いたわ。と言つよりも、お願ひされた、と言つのが正しいんでしうね」

内心で、やはり、そう思いながら、彼女の表情を見ると、そういうた彼女は苦笑している。

まあ、憎んでいる人間にすることではないだろ。

「初めは、ふざけんな、って思つたけど、そうね、確かに彼女の言う通り、よくよく考えてみたら、苦しんでいるのは、別に私だけじゃない。貴方だってそうよね」

だけど、その目は優しい。

瑞穂さんや鈴穂さん達がするよつた優しいまなざし。

「大切な、初めて触れ合えることのできた、心の奥底から愛してゐつて言える人を殺したんだもの、辛くないはずがないわけじゃないし、トラウマにならないほうがおかしい」

それは、同情なのだろうか。

可哀想な人。

大好きな恋人を殺さなくちゃいけなかつた人。

殺したが故に、余計に拒否反応がひどくなつた人。

誰にも触れられなくなつてしまつた人。

そう思つてゐるのだろうか。

「それに、あの子が選んだ男だもの、程度の低い男のはずがないわ。

いつもいつも、耳にたこが出来そうなほど聞かされてたわけだしさ、のろけ話をさ

一瞬、浮かんだ思いは、あっさりと霧散して行く。

違う。

彼女がしているのは、同情ではない。

いや、多少なりは同情はしているだろう。

けれど、だからと言って、それ一色ではない。

それ以外の何か。

それ以上の何かを、見せようとしてくれている。

「ホント、でも、もしかしたら、それが原因だったのかもしないわね」

続けた彼女は、その言葉と同時にため息。

僕にはその意味が分からない。

というよりも、今の彼女がしようとしている話自体が分からない。

何を思つて、何をしようとして、こんな話をしているのかが、皆目検討もつかない。

「奏穂には内緒よ？私は、彼女が延々と自慢そつに言つユーキつて人に憧れてた。ううん、憧れ以上に、好きになつてた。だからこそ、信じられなかつた、許せなかつた。憧れていた、大好きだつたあのユーキが、そんな事を、奏穂を殺しただなんてことを。そして、彼女を殺しておいて、のうのうと生きていることが」

裏切られたと感じたのだろうか。

自分が憧れていた、大好きだつたあのユーキが、恋人である奏穂を殺した。

だけど、私の知つているユーキはそんな事はしない。

私の中にいるユーキは絶対にそんな事はしない。

なのに、現実のユーキがしたのは、神をも恐れぬ行為。

自分の気持ちを踏みにじつた最低の行為。

最初の羨望の気持ちが高かつた分、失望の度合いもひどかった。

愛しかつたからこそ、余計に憎く思える。

そういうことなんだろう。

「鈴穂さんは言つたわ。『私でも、瑞穂でもダメ。私達はあまりにあの子に似すぎていて、近すぎる。絶対に、甘えられない。私達の妹を殺してしまった事の罪をずっと感じさせてしまつ』って。まあ、そうよね。確かに、あの二人は、本当にそつくりだし。ただの知人である前に、どうしても、奏穂の姉、という見方をしてしまうわ」

それは、避けられること。

だけど、それでも、それを覚悟した上で、僕は彼女と付き合つた。どんなに悲しくても、苦しくても、辛くとも、それでも、自分が向き合つて、乗り越えていかないといけない問題だから、誰かに手伝つてもらつていいものではないから。

そうじやないと、彼女を殺した罪を償えない。
僕自身が本当に楽になれない。

例え、彼女が望んだことだつたとしても、それでも、自分が殺めたという事実は変わりないわけだし、自分自身が、それを罪だと思っている以上、それを乗り越えないといけない。

そう思つていた。

だけど、彼女は、僕のために、僕の幸せのために、手を離した。
ただの友人として、自分の気持ちを押し殺してまで、僕を支えると
いう決断をした。

「だけど、私は違う。確かに、あの子の親友。でも、それだけ。特に、私があの子の親友だつて知つたのは、つい最近で、その意識だつて、そんなに強くない。私を見て、あの子の面影を見ることがない。だからこそ救える。貴方の傷と痛みと過去を知りながら、あの子との関係を意識しないですむから」
そういつた彼女は、本当に綺麗だつた。
彼女の容姿が素晴らしいのもある。

だけど、それ以上に、内側からにじみ出る美しさ。

奏穂や瑞穂さん、そして鈴穂さん達のよう、心の強さ、気高さ、

美しさからである、本当の美。

それを、初めて彼女から観たような気がする。

「で、質問。貴方は、私にどうして欲しい？何を望むのかしら？」

普通に聞けば、おかしな質問。

尊大で傲慢な態度の質問。

だけど、実際は違う。

ただの純粋な質問。

何故、そうしようと思つたのか。

それは、分からぬ。

事実を知つたから。

鈴穂さんから、お願いされたから。

そんな事だけで、彼女が納得し、拳句に僕の手助けをしようだなん

て考えるとは到底思えない。

きっと、もつと複雑な事があつたのだろう。

それは、きっと僕がどんなに考えても分からぬことだらうし、も

しかしたら、一生知らずに終わる事なのかもしない。

けれど、それでも、彼女が僕を助けようとしてくれてゐる意思はあると思ひ。

そして、だからこそ、この質問。

純粋にどうすれば助けられるのか、それが分からぬから、だから、尋ねる。

『貴方は何を望んでいるのか？』

そう聞くのだ。

けれど、分からぬ。

僕自身が何を望んでいるのか。

何があれば、救われるのか。

そして、どういう結果なら、彼女が死んだ事で生まれた悲しみの螺旋は終わりにを迎えるのか。

それが、分からぬ。

だから、考える。

考えるが、やはり答えは出ない。
出ないから、堂々巡り。

同じ問い合わせが頭の中を駆け巡り、浮かんでは消えて行く。
「「」めん、少し、時間をくれないか？」

だから、その言葉が出たのは、何十回も考えた数分後の事だった。

第十四話 もう一人の女神様（後書き）

これにて、第一章終わりです。
三章で終わりです。

第十五話 始まりの日記（前書き）

第三章開始です。

第十五話 始まりの田記

シンと冷えた空氣のせいいか、相変わらず思考はクリアなまま。考え事をするにはちょうどいいのかもしない。

家に帰ると同時に、といつよりも、帰宅途中も延々と考えていた。

『貴方は何を望んでいるのか』

その答えを。

けれど、その答えは、どれだけ考へても出て来ない。欲しい者はいくらでもある。

人並みの欲求ぐらいはある。

いくら、変わつてゐと言われよつとも、仙人や僧侶でもないんだから、欲求ぐらいはある。

けれど、その中で何を一番求めてゐるのか、僕が救われるために、彼女に何を望むのか、それを考へようとするが、どうしても、浮かんで来ない。

だから、考へを切り替えた。

一つ一つ、想い出を振り返つて見る事にした。

そもそも、今の僕には、今の自分がどんな状況にいるのかさえ、分かつて居ないと思つ。

自分の事は自分が一番分かつてゐるのは確かだらう。

だけど、だからと云つて、何もかも分かつてゐるわけでもない。気づいていない、気づこうとしていない部分も、かならずどこかにある。

もしかすると、そこに目を向ければ、思いつくかもしない。

思いつかなかつたとしても、何かのヒントになるかもしない。そう思つての事だつた。

とはいへ、思い返すとは言つても、田記なんでものはない。ものぐさで面倒くさがり、三日坊主の僕だ、そんなものが続くわけがない。

けれど、その代わりに、別の物がある。

残すべきか、捨てるべきか、散々迷つた挙句、結局捨てられなかつたもの。

鈴穂さんから、葬式の日にもられた。
かなほ

だけど、もらつたはいいけれど、一度も見ることなく、押入れの中に押し込んでいた。

それを開封する。

何が書いてあるのか、何を思つていたのか。

それを知りたい。

そして、あのときの僕は何を願つて、何を望んでいたのか、どんな未来を描いていたのか。

それを知りたい。

6月28日

姉さんが、いきなり男の人を連れてきた。

見た感じはどこにでもいるような、平凡な男で、同じ年。まあ、この前、自分の知り合いのイケメンを連れてきて、思いつくり罵倒しまくつたせいだろう。

悪いとは思つけど、きしょかつたので、仕方がない。
なんて言つか、情弱。

世の中舐めきつてます、つていう態度が気に食わなかつた。だから、散々D'S発言しまくつたら、泣いて帰つていつた。まあ、その後、姉さんにしこたま怒られたけど、姉さん達と違つて、私は美形が嫌いなんだから仕方がない。
もう、視界に入られるだけで、嫌悪感を抱く。
だから、平々凡々な彼は、まあ、いい線だろう。
ただ、なんだか、思いつきり不服そうな顔をしている辺りがおしいけれど。

まあ、いきなり、

『さあ、この子とお友達になりなさい！』

なんていわれたら、そうなつても仕方ないだろ？

私もそだつたし。

でも、それでも、なんだかんだで、ちゃんと仲良くしようと努力している辺りは、なかなか高得点。

この前のイケメンよりかは、ましだろう。

うん、友達か……

これから彼の頑張り次第だね。

6月29日

彼がまた来た。

診察ついでに来たらしい。

病名は聞いてないけど、割としんどいらしく、姉さんも心配してた。

毎日通院するように言ってたぐらいだし。

もしかして、私のためだらうかとも思ったけど、否定されたし、實際の姉さんの彼を見る時は、本当に心配しているような顔だったから、おそらく間違いない。

にしても、どんな病気なんだろうか。

やっぱり、私と同じで、そうとう重たい病気なんだろうか。
ちょっと、気になる。

7月4日。

毎日来るようにと行っていたのに、あつれりそれを破つて今日で五
田田。

で、五田田にして、ようやく来た。

理由を問い合わせようとしたけど、頑として答えてくれなかつた。
仕方ないから、姉さんに問い合わせて見たけど、笑つて誤魔化すばっ
かり。

どうやら、かなり複雑な事情があつたんだろうけど、それでも、教
えてくれてもいいじゃないかと思う。

これで、口は固いほうだし、と、いうか、友達は、ルリだけだし、ルリと彼とは面識がないんだから、別に、関係ないはずだし。だから、教えてくれてもいいじゃん。友達にならうとしてるんでしょ？

だったら、秘密は厳禁。

とりあえず、油断してるときに、聞き出してみよ。

7月8日

ユーキに、私の名前を呼ばせるよつこした。
なんか、姉さんは名前で呼んでるくせに、私には、敬語で曲がりを付けて、距離感を感じるからだ。
で、それと同時に、今日からユーキと呼び捨てにしてもらおうとした。
にした。

これで、前まで感じた距離感はない。

というか、前よりずっとずっと近くなつたよつに感じる。
ユーキ。

うん、なんだか、これでやつと友達らしくなつたよつな気がする。

7月9日

ユーキが来ない。

なんていうか、つまらない。

せっかく、距離が縮まつたといつのに。

といつか、毎日来いと言われてるんだから、毎日来をなつて言つのよ。

にしても、つまんない。

日記のネタもたいしてないし、つーん、じつしたものか。

7月10日

今日も来なかつた。

なんていうか、どうしてくれよ。

明日、もし来たら、罰を『『えてやれ』』。

どんなんがいいだろ？

うーん、全裸で中庭一周？

いや、さすがに、それは可哀想すぎるか。

そもそも、見たくもないし。

ユーキの裸。

いや、うん、興味ない。

男の裸なんかに、て言うか、ユーキの裸になんか、興味なんてない。

明日来たら、絶対しばいてやる。

7月11日。

ユーキが来なかつた。

どうしたんだろ？

姉さんに聞いても、笑つてはぐらかすだけ。
もしかして、病気が悪くなつたんだろうか？
ちょっと心配。

7月12日。

ユーキが來た。

しかも、へらへらと笑つて。

むかついたから、無視してやつた。

すると、姉さんに怒られた。

怒られて、いじられた。

たく、わけが分からない。

むかついて、無視したからつて、なんで、いきなり

『あらあら、大好きな夕貴君に会えなくて、寂しかったのかな？それで、むくれて、すねてるんだ？』

とか言い出した。

いや、意味わかんないから。

とりあえず、ヨーキは私の好みじゃない。

全然違う。

かすつてもない。

ただの友達。

7月15日

最近、姉さんに言われて気づいたんだけど、どうも、私とヨーキの距離感が近い。

最初の頃はそれこそ、机一つ半分ぐらい距離があつたのに、今では机半分ぐらい。

普通に手も握つたりする、

なんて言つか、近いと言つか、近すぎ。

もう少し気を付けた方がいいんだろうか?

変に、ヨーキを勘違いさせるのもなんだし。

確かに、ヨーキの事は、好きだけど、それは、単に友達として。恋人云々なんて気は全くない。

だから、変に勘違いさせて、せつかくの友達を、失うのは嫌だ。良し、明日からは、気を付けよう。

7月16日。

昨日は、あんなに気を付けよう。

そう言つたのに、またやつちやつた。

最初は気を付けた。

うん、いすの位置が近いのは仕方ないとしても、ボディタッチは厳禁。

そう決めてたんだけど、なんだか、それを気にしてると、妙にむずむずというか、むかむかというか、すっごくストレスがたまつてく

る。

しかも、私が、ヨーキに触れず、すっごくイライラしての分かつているくせに、わざと私の前で、姉さんがヨーキとイチャついてみ

せる。

めちゃくちゃ腹立つたから

『セクハラ女医』

つて言つてやつたんだけど

『あら、サービスつて言つたのよ、いつこいつのは? いつもいつも貧相な身体の妹の相手ばかりで、大変だと思つて、目の保養をつてね?』

なんて言い返された。

ものすつじく腹立つたけど、事実なだけに言い返せない。

こつちは、病気と運動不足と引きこもりのせいで、まつしろでちちゅくてガリガリ。

華奢と言えば聞こえは良いけど、実際は、単に胸も何もなくて、ペつたんこの洗濯板。

もう、とりあえず、何そのメロン、つて言いたくなるような胸をしてる姉さんには、手も足もでないぐらいだ。

ヨーキも、満更でもないような顔をしてたし、やつぱり、ああいうのが良いんだろうか?

なんか、むかつく。

まあ、いいや、とりあえず、どうせ、姉さんも普通にくつついているし、私がくつついても、構わないだろう。

そんな事じや、勘違いなんてされないと分かつて、姉さんもやつてるんだろうし、私も大丈夫だろう。

7月20日

今日、ようやく、ヨーキの病名を知つた。

いや、病名らしい病名はない。

ただ、確かに病気であることには間違いない。

『人アレルギー』

人に触れる、または、近づくだけでストレスがたまつて、頭痛、吐き気などを起こして、発熱するときもある。

病院に来たときには、それが一番ひどくて、ストレス性の胃炎を起こしたそうだ。

『人アレルギー』

それは、いつたいどんな世界なんだろう。
入院生活の長い、というか、ほとんど入院ばかりをしているから、
私だって、かなり制限された生活をしている。
だけど、だからと言って、人に触れない、近づけないなんて事はな
かつた。

なのに、ユーキは違う。

触ると、近づかれるだけで、すっごく苦しくなる。
それって、どんな世界なんだろうか。
私が、触れても、やっぱり苦しいんだろうか？
辛いんだろうか？
だったら、近づかないほうがいいんだろうか？

7月21日

とりあえず、いきなり距離を取るのは変だから、距離はいつも通りで、触れる事を自粛した。

ユーキは大事な友達。

だから、辛い思いをして欲しくない。
だけど、なんだろう。

そうやって、距離を取らうとすればするほど、なんだか、近づきたくなる。

触れたいし、触れて欲しい。
もっと近くにいたいと思つ。
なんだろう、これは。

7月23日

姉さんに怒られた。

初めて見るぐらい、すつじく怒つた。

理由は、私が距離を取つた事。

散々怒られて、その後、頭を撫でられた。

もう、わけがわかんない。

怒られる理由は分かる。

『奏穂がしてる事は、病人は可哀想だから、優しくしてあげないと
いけない、見守つてあげないといけない、そう言って、哀れむよう
な目で見ているような人間と同じ事をしてるのよ?』

姉さんはそう言った。

私が分かりやすく言つてくれたんだろう。

すぐに分かつた。

確かに、私は、普通に見たら、不幸だろう。
ずっと入院してばかりで、学校になんていけてないし、友達もユ
ーキとルリの一人だけ。

それは、傍から見ると、不憫な物に見える。

でも、私はそう思つてないし、そう思われると、すっごくむかつく。
私の何も知らないくせに、知つたふうな口を聞くなつて言つ感じ。
そして、それと同じ事が言えるんだろう、ユーキの事も。

ユーキは、今、自分と向き合つて、アレルギーを治そうとしている。
人とのふれあいを大事にしようとしている。

姉さんはそう言つていた。

それは、すごいことだと思う。

どんなふうに辛いのかなんて、私は知らないけど、病気克服のため
にやる事は、並大抵の気力で出来るものじゃない。
すつごい根気がいる。

それなのに、それに対して弱音を言わず、一生懸命努力している。
それを、すごいと思わないわけがない。

それと同時に、姉さんが、心配した理由が良く分かった。
これだけ頑張つているんだ、心配しないわけがない。
手を差し伸べたくないわけがない。
だから、姉さんは、面倒を見ているんだろう。

なら、私も、それを手伝いたい。

といふのは、建前で、やっぱり、今までどうりでいたい、と並の
が、本音。

やっぱり、いつもひひひでストレス溜まるし。
ヨーキにとつては、治療?になるし、私はストレスが溜まらなくて
澄む。

一石二鳥じゃない。

良し、明日から、べつたり行くぞ。

7月26日

今日は、ヨーキは来なかつた。

なんか、用事があるらしく、来れなかつたらしい。

その代わり、今日は、ルリとずっと一緒にいた。

いろいろと忙しいから、滅多に長居はしてくれないんだけど、今日は
はぎりはぎりまで居てくれた。

それが、私には、すつじぐ嬉しかつたんだけど、ルリは、どうやら
違つたみたい。

といふか、彼女から見た私が思つてゐるほど、私は嬉しそうに見えな
かつたみたい。

なんて言うか、心こころあらはつて言つたが、話していくも、ヨーキ
の事ばかり。

それが、ちょっと氣に食わなかつたみたい。

私自身は氣づかなかつたんだけど、思い返してみると、確かに、ヨ
ーキの事ばかりを話してたような気がする。

でも、どうしてだらう。

『ヨーキの事好きなんじゃない?』

ルリにそういうわれたけど、そなだらうか?

いや、確かに、好きなのは好きなんだけど、ルリの言つてゐる「ヨーキ
ンス」とは違つ。

ルリの言つてゐる「ヨーキンスは、恋愛感情の好き。

親愛の好きじやないって事。

でも、そつ言われても、私にはびんとは来ない。

そりや、確かにヨーキと一緒にいると楽しいし、落ち着くし、いないと寂しい。

だけど、それは、ルリも同じ。

ルリと一緒に居ると楽しいし、落ち着くし、いないと寂しい。

だから、私の中では変わらない。

変わらないはずなんだけど、なあ……

7月27日

ヨーキが今日も来なかつた。

今日は用事があるとは言つてなかつた。

だから、来ないはずがないんだけど……

どうしたんだる?!

ちょっと、心配。

それと、寂しい。

そこで、思つのは、やつぱり好きだからなのだる? と聞ひ入る。

でも、やつぱり、しつくりと来ない。

うーん、私は、ヨーキの事が好き?

それとも違う?

どっちなんだろ?!

7月28日

今日も、ヨーキは来なかつた。

だけど、その代わりに、ルリが來た。

その代わり。

よくよく考えて見たら、随分ひどい言い方だ。

だけど、ルリが言つてた事が良く分かる。

今日、ルリに相談したら、あつさりと言われた。

『んじや、奏穂がヨーキにしてること、されてることを、他の女の

子とやつてたら、どう思つ?』

そう聞かれた瞬間にいらっしゃった。

もちろん、想像したからだ。

ユーキが他の誰かも分からぬ女子と、仲よさそうにしている。それが、そのどこからどう見ても恋人にしか見えぬ姿が、羨ましくて、腹立たしくて、そんな事を私以外にして欲しくない、というか、したら許さない。

しばらく、口なんか聞いてやんない。

まあ、結局のところ、単なる嫉妬。

てか、既に、自分で出来上がってる。

恋人にしか見えぬ姿が、なんて言つてゐる時点で。

『まあ、答えは言わなくても出でるみたいね』

そう言つて、ルリは笑つてたけど、逆に私は心臓バクバク。恥ずかしいつたりやありやしない。

でも、まあ、それでも、良かつたとは思つ。

自分の気持ちも分かつたし、明日、とりあえず、ユーキが来たら、頃合を計らつて、それとなく聞きだしてみよつ。

で、あわよくば……

なんちやつて。

第十六話 恋の日記

一日、日記を閉じて、息を吐く。

とりあえず、彼女が、自分の心に気が付いた日までの日記を読んだ。それから、しばらくして、彼女は、僕に告白をした。

緊張で顔を真っ赤にして、いろんなところは、ふるふると振るえていた。

まあ、そこらへんが、すっごく可愛かったし、触れても、違和感もなければ、ストレスも感じなかつたし、彼女が僕に對して思つてくれていたように、彼女といた空間はとっても楽しくておもしろくて、暖かかつた。

だから、当然、答えはイエスだつた。

むしろ、僕自身が、いつまでようか迷つてたぐらいだし。

ただ、相手が相手。

すっごい美少女で、今までたくさんのイケメン達を振つてきた彼女だ、オーケーしてくれるとは思えない。

どうしても、尻込みをしてしまつた。

なんて言つても、単に、僕がやつぱりチキンなだけだつたんだけど。いつもいつも受身だつた。

自分の病気を理由にして。

触れられないから。

だから、進んで、触れ合おうとはしなかつた。

奏穂ともそう。

鈴穂さんに頼まれたから、だから、僕は一緒にいた。

彼女からのお願いがなければ、僕はきっと、彼女と付き合つこと、出会う事もなかつた。

だからこそ、彼女は深く傷ついているんだ。

自分が引き起こしてしまつたと、後悔しているんだ。

軽く伸びをして、部屋を出る。

身体がちょっと冷えてきた。

適当に暖かいコーヒーでも飲もう。

どうせ、田記は今日の内に読んでしまつもつなんだから、長丁場になるだろ。

それなら、コーヒーでも飲んで、頭をすつきつをせて置いたほうがいい。

キッキンに入ると、うんと濃いめのホットを淹れる。

「ふうふう」

淹れると、部屋に戻りつつ、それを冷ます。

それほど、猫舌つてわけでもないけど、さすがに淹れたては熱い。熱いのを飲んだほうが、一気に田は醒めるだろうが、さすがに火傷はしたくない。

次の日のご飯が大変だし。

「あつっ」

部屋に戻り、もつもつもつ大丈夫かと思つて一口含んでみたが、どうやら、まだらしい。

仕方ない。

田記を読みつつ、冷めるのを待つしかないだろ。

8月3日

今日、ユーキに告白した。

自分でも、びっくりするぐらい、じきじきして、緊張して、じもつたし、途中で何を言つてるのかわからなくなつたし、最終的には、ほとんど逆切れに近いよつない方をしてしまつた。

過去の自分に会えるなら、今すぐにでも絞め殺してやりたいぐらい。でも、まあ、私としては、あまりにも情けない失態だけど、それでも、まあ、結果はオッケーだつたんだから、良しとしないといけないんだうつけど。

うん、ユーキと付き合つ。

私が、ユーキの彼女で、ユーキが、私の彼氏。

……いやああああああああ……

なんか、恥ずかしい。

そんな事を書いてる自分が恥ずかしい。
かなり赤面物。

というか、意外と私も女の子してるんだと、思う。
枯れてる気なんて、たらたらないけど、こんな事で、いちいち赤面
するとは思つてなかつた。

うーん、意外と恋つて言うものは奥深い物なのかもしれない。
なんて、何語つてるんだろう、わたし。

まあ、今日は早く寝よう。

とりあえず、明日も、ユーキは会いに来る。
なのに、寝不足でぼろぼろの顔を見せられない。

百年の恋も冷めるつてもんだ。

とこつわけで、寝よう、おやすみ。

8月4日

……来なかつた。

来るといつたのに、来なかつた。

こつちは、結局、興奮と緊張で眠れず、すつじぐどきどきしたとい
うのに、来なかつた。

とりあえず、姉さんに聞いてみたけど、また、適当にはぐらかされ
た。

たぶん、姉さんは理由を知つてる。

だけど、教えてくれない。

なんか、それがすつじぐくむかついた。

恋人は私なのに。

なのに、恋人のはずの私よりも姉さんの方が、ユーキの事を知つて
る。

それが、すつじぐくむかつく。

やっぱり、ユーキの事は何でも知つておきたい。

で、ヨーキーの事を一番に分かつてゐるのは、私でいたい。
とりあえず、明日、来たら、盛大に文句言つてやるつ。

8月5日

ヨーキーが来た。

来るまでは、延々と文句を言つてやるつと思つたけど、ヨーキーの顔を見た瞬間、それが吹つ飛んだ。

それに、しつかりと謝つてくれたし、だから、許してあげた。

とりあえず、それが女の度量つてもの。

私は器が大きいからね。

でも、器の大きい私でも、ちょっと腹立つことがあった。
姉さんだ。

恋人である私を目の前にして、何をとち狂つたのか、ヨーキーのほっぺにチューをしたのだ。

まだ、私もしたことないといつのに、だ。
今思い出しても、むかつく。

とりあえず、それは、私の特権だ。

だから、注意と言つたが、攻撃しまくつたんだけど、効果はなし。
散々からかわれて、やりたい放題した後、姉さんは帰つていつた。
だけど、私にしてみたら、そら、すつごくむかついた。

むかついたから、無視。

無視したけど、うん、やつぱり、無理。
いや、だつて、やつぱり好きだし。

うん、せつかく一緒にいるんだから、楽しく過ごしたい。
結局、数分と持つ事なく、イチャつき始めた。

うわ、なんか、自分で書いてて、すつごい恥ずかしい。
でも、まあ、それ以上に恥ずかしい事があつたけど。

うん、すつごく恥ずかしかつた。

まあ、ヨーキーもめっちゃ恥ずかしそうにしてたけど。

お互に初めてだから、仕方ないけど、それでも、ありえないぐらい

の緊張振りだつた。

うん、付き合つて二日目。

ていうか、実質一日目なんだけど、キスしちゃつた。
うわああああ、なんか、更に照れるんだけど。

なに、この恥ずかしさは。

自分でも気持ち悪いぐらいなんだけど。
でも、すつじく幸せ。

これが、恋。

うーん、すごいな。

8月12日

いきなり、退院許可がおりた。

正直、わけがわからんない。

体調は、確かに悪くはない。

だけど、逆に言えば、いつも通りと言えばいつも通りで、良くなつているとは思えない。

とはいえ、退院。

いつたい、どれぐらいぶりだらうか。

正直覚えてない。

でも、ちょっと嬉しい。

今まで、ずっと病院の中だけだった。

そこだけでしか、会えなかつた。

だから、せつからく退院したわけだし、ヨーキとデータしてみよつ。

時期的には夏休みだし、いろいろと遊びまわれるはず。

明日にでも会いに行つて、予定でも立てよつと。

8月13日

とりあえず、予定が決まつた。

王道どころは、海と遊園地。

後は、適当にぶらぶらしてみたり、お祭りがしぶらへしたらあるみ

たいだから、それも観に行く。

なんだか、すつごく楽しみ。

最高の夏になりそう。

ホント、ヨーキに会えて良かつた。

姉さんに感謝感謝。

ヨーキのいない生活つてもう考えられないし。

ホント、日に日にヨーキの存在がどんどん大きくなつていいく。

いつかは、ヨーキが全てになつてしまふのだろうか。

なんか良さそつぽいけど、それはそれで、なんかダメそつ。

うん、他も大事にしないといけないよね。

そこらへんは、ちょっと氣を付けておこう。

8月17日。

海に行つた。

行つたけど、ちょっと凹んだ。

良く良く考えてみたら、今の私の身体は海に行けたもんじゃない。胸ないし、がりがりで細いし、病室から出る事なんてほとんどなかつたから、肌は病的な白さだし、とりあえず、すつじに劣等感を感じた。

だから、選んだ水着もワンピース型の露出の少ない奴にした。

姉さんだつたら、きっとバインバインのすつじい露出度の高いビキニを着るんだろうな。

女の色気全くなしの私の水着姿を見て、ヨーキは褒めてくれたけど、やつぱり姉さんみたいなのが良かつたんじゃないのだろうか？

そう思うとげんなり。

海行つてる間は楽しかつたけど、思い返して見ると、ビクしてもそんなふうに思えてしまう。

とはいって、太るとしても、太れないのが現実。

そんなに食べれないし、自分なりに頑張つても、肉がつかない。

ダイエットを頑張つてる人達にしてみたら、羨ましいだろうけど、

「つちはこつちで、胸がなくて、すつじく悩んでるんだ。
きっと、胸がある人には分からないんだ、この気持ちは。
特に、姉さんなんか。

腰とか腕とかは、めっちゃ細いへせに、胸はでかい。
メロンだし。

あまりにも、恵まれすぎだ。

とこつか、羨ましき。

私にも、あれぐらいあつたら、せつときわどいジキーリ着て、ユーキ
を悩殺できたんだろうけどな。

まあ、仕方ない。

とつあえず、別の方法で、悩殺してやる。

8月19日

今日は映画を行つた。

とつあえず、カップルらしく恋愛映画を見たけど、正直つまらない。
なんていうか、あれ。

リアリティがなさ過ぎて、感情移入が出来ない。

そもそも、演技も下手すぎ。

とつあえず、配役は顔で選んだとしか思えないぐらい、美形ばかり
がずらつと並んでる。

正直、金返せつて感じ。

ユーキも同じらしく、しきりにダメだしばっかりしてた。

それが、逐一私と同じだから、ちょっと嬉しかった。

そういう意味では、この映画『テート』はありだったのかもしれない。

8月23日

祭りに行つた。

昔、ちつちやい頃に行つた事はあるけど、正直覚えてない。
だから、初体験と同じ。

で、いろいろと見回つたけど、正直な感想、すつじくおもしろかっ

た。

別に、何かしたわけじゃないし、露天の食べ物だって、そんなにおいしいわけでもない。

でも、すっごく楽しかった。

そして、最後の花火も良かつた。

二人並んで座つて見てたんだけど、すっごく感動。病室に居たときも、たまに見てたけど、全然違う。迫力とかもそうだし、肌に感じる空気も違う。

それに、隣にはユーキもいる。

すっごく楽しかった。

まあ、帰り際に、キスしてくれたのも、もちろん、それに入ってるけど。

ユーキとのキスは、まあ、何度かした。したけど、あれ。

いつまで経つても、慣れない。

てか、すっごい恥ずかしい。

ありえないぐらい恥ずかしい。

でも、それは、きっとそれぐらい好きって事なんだと思つ。いつでも、私にとって、ユーキとのキスは新鮮で、幸せで、いつもどきどきしつぱなし。

それが溢れ出てきちゃうほど、好きつてこと。

うん、私は、ユーキの事が好き。

大好き。

8月31日

とりあえず、夏休み最終日。

というわけで、朝から晩まで遊びまわつた。

行き先は遊園地。

とりあえず、絶叫系は一回までと決められ、後、お化け屋敷も禁止された。

正直、ちょっと痛い。

絶叫系が一回だけなんて、つまんないし、何より、お化け屋敷がダメとか、ありえない。

せっかく、びっくりしたふりして、それこそ、半泣きの演技でもして、しがみつこうと思つてたのに。

やっぱり、こいつの場所でのそういうのは、大事だと思つ。それに、うん、やっぱり、ヨーキも喜んでくれるだろ。そりや、肉付き悪いし、胸もないけど、それでも、自分の彼女が抱き付いてくれるんだ、喜ばないわけがない。

もしかしたら、それで意識して、そのまま、とかだつて十分ありますし？

いや、さすがに、遊園地で、つてのは、なしだけど、ヨーキの家なら、オッケだし……

て、何考えてるんだろう。もしかして、欲求不満？

てか、付きあつて一ヶ月で、エッチつてやっぱり早いんだろうか？ そういう経験もないし、話もしたことないから、わかんないけど。てか、女の子だったら、普通は考えないのかな？

どうなんだろう。

まあ、でも、恥ずかしい事ではあるんだりうけど。うん、まあ、超恥ずかしいよね。

……うわ、やばい、すつごい恥ずかしい。

ちょっと、想像しただけで、もうダメだ、失神しそう。それぐらい、恥ずかしい。

ま、まあ、まだ、付き合つて一ヶ月も経つてないし、早いよね。

うんうん、考えないでおこつ。

それに、今は遊園地の話。

一回だけだけど、絶叫乗つた。

まあ、ヨーキは、しんどそうだったけど。すつごい楽しかった。

まあ、ヨーキは、しんどそうだったけど。

うーん、やっぱり、男子は絶叫系苦手だつて聞いたけど、ホントだつたんだ。

まあ、その後は、定番のコーヒーカップとかメリーゴーランドとかのときは、恥ずかしそうだつたけど、割かしはしゃいでた。

うん、きっとコーヒーも楽しんでくれてたはず。

最後に、観覧車に乗つた時は、すつごく満ち足りた顔してたし。

観覧車……

うわ、恥ずかしい事思い出したし。

うん、恥ずかしいよねえ。

まさか、自分も同じ事するとは思わなかつたわ。

いや、まあ、でも、恋人だしね？

いいじゃないかと、思うのよ、私は。

うん、昔の私だったら、もう大爆笑だつたろ？けど、今の私的にはありね。

ちょうど頂上に来た時に、キスつていつのは。
バカみたいだけど、すつごくどきどきしたし。

頂上だから、他には何も見えないし、見える景色は、全部独り占め。なんだか、幸せ過ぎて、舞い上がつちゃうつていう感じなんだろう。普通なら、恥ずかしいと思つてしまつ事を、あつさりとやつちやつたし。

でも、うん、恥ずかしいけど、後悔はしてない。

いい思い出。

すつごく楽しかつた。

また、行きたいな。

てか、今年の夏休みはホント楽しかつた、海や祭り、遊園地。
すつごく楽しかつた。

また、行きたい。

また、来年の夏も、今年の夏みたいであつて欲しいな。

「つづ」

思わず、僕は、日記を閉じた。
決して、叶わなかつた願い。

それがそこになつた。

彼女に次はなかつた。
次の夏はなかつた。

もう一度海やお祭りや、遊園地に行く事は出来なかつた。
最初から、それは決まつていた。
決まつていたから、僕は、出来るだけ、たくさん予定を詰め込んだ。

残された時間が、あまりにも少なかつたから。
彼女が退院する前に、僕は聞かされた。
でも、不思議と、それを聞いても、驚かなかつた。
分かつていていた事だつた。

奇跡はない。

あまりにも長すぎる闘病。
心のどこかで、思つていた。

彼女は不治の病で、長くはないのかもしないんじやないのか。
だから、鈴穂さん達は、一生懸命に奏穂と向き合つてるんじやないのか。

そう考えていたから、だから、彼女が長くはないと言つ事を聞いても、ショックであったのは、ショックだつたけど、それほど、大きいものではなかつた。

「まずつ」

とりあえず、気を紛らわせようと、コーヒーを飲んだけど、すっかり冷えてしまつたそれは、とても飲めたものじやない。

「新しく淹れるか」

休憩にもちょいうどいいだろ？。

多少、根づめ過ぎてるような気がしないでもない。

付き合い始めてから夏休み終了まで。

一ヶ月間の日記を全部読んだんだ、多少目も疲れちゃう。

キッチンでコーヒーを淹れなおす、ついでに田薬をさす。

途端に、目にじわりじわりとしみこんでくる。

なんていうか、傷口に消毒液をたらしたときと同じような痛み。

どうやら、そういう負担をかけてたみたいだ。

とはいって、ここから、一番重要なところ。

夏休み明け。

そこから、僕達の環境はがらりと変わったんだ。

ただのバカみたいな恋愛から、ひどくありふれた恋恋物のラブロマンスのような恋愛に。

9月6日

予感はあつた。

多くなつた投薬。

逆に少なくなつた診察。

そして、いきなりの退院。

覚悟はしていた。

日記には書かなかつたけど、不安はあつた。

もう、私が長くないんじゃないのか、と。

だから、聞いても、言われても、すんなり理解できた。

一月足らずで、私は死ぬと言つ事を。

9月7日

ユーキは私の命が短い事を知つていた。

知つていて私と一緒に居てくれた。

一緒に海に行つて、お祭りに行つて、遊園地に行つた。

辛いはずだ。

絶対に辛いはず。

自分の恋人が、一ヶ月も持たずに死んでしまつ。

それを受け止めて、今まで通りに振舞う。

普通に笑つて、傍に居る。

それが、辛くないはずがない。

なのに、それをしてみせる。

不安だつた。

もしかすると、そんなに私の事を好きじゃないんじゃないのか。
どうでもいいんじゃないのか。

だから、そんなふつに、普通に振舞えるんじゃないのか、と。
でも、彼の手が私に触れるたび、彼が抱きしめてくれるたびに、そ
んな疑惑は薄れしていく。

彼は、『人アレルギー』。

誰にも触れられない。

触れる事がストレスで、苦痛。

そんな苦痛を我慢してまで一緒に居るだらうか。

どうでもいい相手にたいしてまで、そこまで頑張るだらうか。
そう思つたら、彼を信じてしまつ。

信じられる。

だからこそ、別れを切り出すべきなんじゃないだらうか。
彼を傷つけないためにも。

彼にこれ以上辛い思いをさせないためにも。

9月16日

散々迷つた挙句、今日別れを切り出した。
切り出そうとすればするほど、どんどん苦しくなる。

自分の思いに潰されそうだつた。

彼と触れ合つたびに、このままでいたいと願いたくなる。
自分が長生きできない事は分かつていて。

だから、諦めていた。

幸せになんてなれない、そんな月並みの事を考えてた。
奇跡はない。

どんなに願つても、私の病気が治る事はない。

だから、いつか来る死の時。

そのときを迎えて、私はきっと大丈夫だろつと思つてた。

だけど、今は違う。

今は、怖い。

死ぬのが怖い。

そして、何よりいや。

彼ともつと一緒にいたい。

ユーキともつといろんな事がしたい。

また、海に行つたり、遊園地に行つたり、花火を見たり、クリスマスのイルミネーションやお正月に振袖とか来て、一緒に初詣とか、バレンタインに渡すときには、ちょっとときどきしたりとか、そんな事がしたい。

そんな当たり前の事がしたい。

だけど、もう、私にはそんな時間はない。

そんな猶予は残されてない。

私に残されたのは、一月にも満たないという短い時間。
あまりにも短すぎる時間。

なんで、私なんだろう。

どうして、私なんだろう。

私が何をしたつて言つんだろう。

私は、何も悪い事なんてしていないのに。

ただ、普通に生きてただけなのに。

それなのに、どうして私が死ないといけない。

どうして、私とユーキが引き離されないといけない。

どうしてなの?

死にたくない。

もつと生きたい。

もつともつと、ユーキと一緒にいたい。
いたいのに。

ユーキは私からの別れ話を拒絶した。

どんなに辛くても、悲しくても一緒にいたいって言つてくれた。
未来が暗くても、今を大切に生きたいと、私を大切にしたい、他の
誰よりも、私の事が好きだから、そう言つてくれた。

嬉しかつた。

このままじゃいけないことがぐらい分かつてゐる。

絶対に、ユーキを傷つける。

だけど、もう、私には出来ない。

ユーキが好きだから。

ユーキと一緒にいたいから。

だから、もう言えない。

私は、彼と、一緒に居る。

死ぬまで、絶対に。

9月20日

身体がだるい。

思つたように動かない。

夏休み明けから、確かに辛かつたけど、今はそれ以上。

他人の身体のように思えてくる。

だから、病院に戻つた。

戻つた、つていういい方も変。

そのついで、というか、家族の目を盗んで、弁護士に会つた。
会つて、尊厳死の書類を作つてもらつた。

もう長くない。

ここまで来ると、自分でも良く分かる。

私は死ぬ。

どんなに祈つても、願つても、それは変わらない。

そして、ユーキともお別れ。

辛い。

すつじく辛い。

大好きだもん、辛くないはずがない。

今だつて、泣いてる。

9月のページはほとんど涙で濡れてる。

書くたびに泣いてた。

悲しくて、辛くて、寂しくて、ずっと泣いてた。

今日、ユーキが言つてた。

『前、奏穂が残されるほうが絶対に辛いって言つてたけど、それは、違うと思うんだ。僕は、どっちも辛いと思つ。残すほうも、残されるほうも』

私は、幾度となく謝つた。

辛い思いをさせて、悪いと思つた。

だけど、彼は、それを優しく包み込んでくれた。

私を抱き締めて、そう言つてくれた。

救われた気持ちだった。

辛かつた、苦しかつた。

彼を残して死んでしまうことが、彼を傷つけてしまうことが。

だから、そう言つてくれた事が嬉しかつた。

私を慰めてくれたことも、そして、私の気持ちを分かつてくれたことも、全部が嬉しかつた。

本当に、良かつた。

ユーキに会えて、本当に良かつた。

姉さんに、本当に感謝しないといけない。

こんなに素敵な人に会わせててくれて、一緒にいさせてくれて、感謝しないといけない。

だから、私は綺麗に死にたい。

するすると生き残つて、皆を苦しめたくない。

死ぬときはあつさりと死んで、後に引くことなく逝きたい。

だから、お願いした。

尊厳死を。

延命措置をされることなく、あっさりと死なせて欲しいこと。

皆を早く解放させて、あげたいと。

9月28日

日記を書くのが、今日で最後かもしない。

そう思いつつ、最近は書いてる。

握力がどんどん弱くなつて、ペンが持てなくなつてきてる。

いつだらうか。

最近は、そんな事を考える。

皆には、悪い気がするけど、そつ思つてしまひ。

辛い。

もう、注射を、点滴をどれだけ差しても、痛みは引かない。まるで、なぶり殺しにされてるかのような辛さ。

早く死にたい。

そう思つてしまひ。

だけど、そう思つても、ゴーキが触れるたびに、消えていく。ゴーキと一緒にいたい。

ゴーキにもつと触れていたい。

そう思えて、もつと頑張りたいと思う。

なんだか、前と言つてる事が違うような気がする。

早く死んで、皆を解放させたいと言つたのに、なのに、今の私は、まだ生きたいと思つてる。

嫌な女だと思う。

本当に、しつこい女だと思う。

だけど、そう思つたびに、それに気が付いたかのように、ゴーキがぎゅっと私を抱き締める。

抱きしめて

『大好きだよ』

そう言つてくれる。

それだけ、私は救われる。

私は、樂になる。

ユーキ、ありがとう。

私を好きになつてくれて、ありがとう。

私を大切してくれて、ありがとう。

私は、幸せだった。

私は、本当に幸せだった。

他の人に比べたら、きっと短いけれど、本当に私は幸せだった。

とっても優しい温もりを感じられた。

それは全部ユーキのおかげ。

ユーキが居たから、いてくれたから、私はそう思えた。

こうして、幸せな気持ちでいられる。

ありがとう。

本当にありがとうございます。

だから、もし、私が死んだら、私がいなくなつたら、他の誰かと幸せになつて欲しいと思う。

そりや、他の女にユーキが取られると思つて、すつじくいや。

すつじくむかつくし、許せない。

だけど、でも、それは、きっと私の我慢。

ユーキにだつて、幸せになる権利はある。

ううん、幸せにならないといけない。

こんなに、私を幸せにしてくれたんだから、幸せになつてもらわないと困る。

だから、もし、私が死んだら、やつぱりすつじく嫌だけど、それで、ユーキの幸せを願うから、他の誰かと幸せになつて欲しい。

なんなら、ルリでもいいかも。

美人だし、私と違つて、スタイルもいいし、性格はちょっときつめ

だけど、心根はすつじく優しいし、頭の回転もいい。

それに何より、ユーキの事、好きみたいだし。

必死になつて隠してゐるけど、ばればれ。

普通、人ののろけ話なんて、好き好んで聞ひとしない。

なのに、ルリは、それを嬉々として聞いてるし、ヨーキの名前が出る度に、過剰に反応してる。

それで、気づかないほうがおかしい。

まあ、でも、仕方ない。

私が言うのもなんだけど、ヨーキはホントにすうじく素敵な彼氏だし。

ルリが好きになるのも仕方がない。

それに、きっと、傷ついたヨーキを癒してくれるだろ？、ルリなら。うん、今度、お願ひしちゃおうかな？

なんちやつて。

て、これじゃ、なんだか、遺書みたいだな。

まだまだ、死ぬ気はないんだけどな。

とりあえず、明日も、日記が書けるといいな。
一杯一杯、ヨーキへの愛情を書けたらいいな。
なんちやつて。

やつぱり、それは、恥ずかしいな。

私のキャラじゃないし。

でも、うん、ヨーキへの感謝の思い、もっとたくさん書きたいよ。

第十七話 愛の日記（後書き）

恋から愛へ。

慈しみのある思いだからこそ愛の日記。
て、臭いか？（あ

第十八話　辿り着いた答え

それが、最後の日記。

それ以降、書かれていない。

違う、書けなかつたんだ、奏穂は。

次の日は、ペンが握れても、まともに字が書けなかつた。

一生懸命に字を書こうとしても、字にならなかつた。

最後の日記の筆跡だつて、ぐにゃぐにゃ。

一生懸命なんとか字にしているのが分かつた。

だからこそ、あんな事を、あそこまでたくさん書いたんだろう。

自分の思いを書き残したんだろう。

そして、その次の日、字にすらならなかつたから、どんなに一生懸命に書いても、字にならなかつたから。消して、書くのを止めたんだろう。

思いを全て、心の中に閉じ込めたんだろう。

そして、それから数日後、確かに日にちは、覚えてないけれど、確かに、彼女は、ペンも握れないほど、衰弱していた。

ペンも握れない、動けない、そんな生活は、いつたいどんな物なんだろう。

こうして、今、僕が当然のようにやつてている動作、それが出来ない世界なんてどんなものなんだろう。

全く、予想が出来ない。

分からぬ。

でも、奏穂の世界はそうだつた。

ただ、話すことしか出来なかつた。

身体を動かすことなんて、ほとんどできなかつた。

だけど、それでも、彼女は笑顔だつた。

触れ合う度に、幸せそつた。

だから、僕も笑えたんだ。

だから、僕も幸せだった。

どんなに別れが辛くとも、悲しくても、それでも、僕は、彼女と一緒に居られた。

彼女が、いよいよ危険になつたとき。

そんなときに、彼女は言った。

『ねえ、ヨーキ、お願ひ。延命措置はしないで』

作られた笑顔の中には、罪悪感が、ありありと浮かんでいた。

当然だ、彼女だつて、自分が言つている事が、どれだけひどいことなのか、良く分かつている。

分かつていて、それを言つているんだ、辛くないわけがない。

『死ぬときは、綺麗でいたい。無様な姿をさらしたくない』

それは、彼女の誇り。

最後まで彼女らしくあるためのプライド。

『それに、もう、これ以上、皆を苦しめたくないの、だからお願ひをして、それ以上の優しさ。』

だから、僕は頷いた。

ちゃんと書類もある。

だから、僕がそれを認めようと思つた。

それを認めてやらぬといけないと思つた。

最後まで彼女らしくあるために、彼女の誇りを傷つけないために。

そして、最後まで、彼女は彼女らしく誇りに満ちた姿で逝つた。

その後、どんなに、苦しかつたとしても、僕はそれを後悔していい。

絶対に、間違つていたなんて思わない。

例え、犯罪だらうと、人殺しだらうと、僕はそれを否定しない。裁かれるべきだと思つても、犯してはならない罪だと思つても、それでも、その選択肢を選んだ事を間違つたとは思わない。

彼女のためにも。

日記を閉じて、布団の中にもぐりこむ。

答えは、見つけた。

僕は、奏穂の願いを叶えたい。

そして、僕自身も、救われたい。

だから、答えは出た。

ひどくありふれて、情けない答えだけど、それでも、間違つていな
いような気がする。

僕がたどり着いた答えは。

第十九話 一人の未来

天高く馬肥ゆる秋。

すがすがしい風と、暖かい日の光が降り注ぐ。

素直に気持ちいいと言える天気。

「好きです、付き合って下さい」

こんな田こそ、告白田和。

答えが出てから、数日後。

とりあえず、告白田和な日を待った。

待ち続けた。

けど、そんな、小説のように都合のいい展開なんてなくて、伸び伸びになつて、本日金曜日。

ちなみに、明日、明後日と、文化祭。

おかげで、学校中でんてこ舞いになつてるんだけど、そんなの僕には関係ない。

とりあえず、クラスはかなり大忙しだけど、今日まで頑張つたから、

今日ぐらい許してもらおう。

「こんな忙しい時に呼び出したと思つたら、何よ、それ」

半眼で睨まれた。

どうやら、僕は自由だけど、彼女はそうじやなかつたらしい。

モテモテな彼女は大変だ。

「奏穂の日記を読んだ。それで、答えが出たんだ。君に甘えさせて

もらおうって」

でも、今の僕は無敵だった。

不敵だった。

神だった。

「さつきは、ああいつたけど、正直、たぶん、今はルリッちよりも、瑞穂さんの方が好きなんだ。瑞穂さんと触れ合つて、暖かさを感じられた。でも、ルリッちだったら、そうはならない

言いたい放題。

何、この人、何様のつもり？

つか、死ねばいいのに。

そんな事言われても仕方ないだろう。

告白の時に言つような言葉ではない。

だけど、偽らざる気持ち。

これは、別にイエスをもううための告白ではない。

踏み出すための告白なんだ。

「触れ合えない。触れ合った瞬間に拒否反応が出ると思う。瑞穂さんよりもひどく。でも、未来は分からない。瑞穂さんには負けるけど、これでも、僕は君の事を気に入ってるし、好きなんだよ？」
綺麗な人は基本的に好きだし、それに、奏穂が認めた子だ、性格はいい。

妄信なんてするつもりはないけれど、それでも、奏穂の見る眼を信じている。

僕を選んでくれた眼を。

だからこそ、彼女が認めたルリを認めたい。

もちろん、僕自身の眼だつてある。

僕が奏穂を殺したとき、彼女は本当に怒っていた。

心の底から怒っていた。

だからこそ、信じられる。

彼女が良い人だと。

素敵な人なんだと。

見た目だけじゃない、心の中まで素敵な人だと言つ事が分かった。

だから、彼女に賭けたい。

彼女と傍にいたい。

そう思つたんだ。

「だから、付き合つて欲しい」

そして、だからこそ、出た答え。
悩みぬいて出した答え。

迷いはない。

これが正しいと信じている。

そして、信じている。

彼女の答えが、僕が思っているものだと、望んでいるものだと。心の底から信じているんだ。

空を見上げる。

青く澄んだ空。

綺麗な空。

何にも縛られてない自由の証。

奏穂、ようやく僕も解放されそうだよ？

幸せを求められそうだよ？

今までありがとうございました。

僕も君と一緒に居られて良かつたと思っている。

幸せだったと思っている。

例え、儚い幻のような時間だったとしても、僕はそれを幸せだと思っている。

だから、ありがとうございます。

そして、さよなら。

もう僕の思いが君に向かう事はない。

君を忘れない。

絶対に何があつても、忘れやしない。

深く深く愛した君の事を忘れる事なんて出来ない。

だけど、さよなら。

君が願つたように、僕は自分の幸せを探すから。

自分の幸せを手にするから。

だから、さよなら。

たまにだけ、君に会いに行くよ。

さよなら。

「ヨーキの気持ちは嬉しいわ

彼女が口を開く。

名前は、もう呼び捨て。

もつ瑞穂さんへの配慮がいらないから。

「昔は、憧れてたし、好きだった」

知ってる。

奏穂の日記には、そう書いてあつたんだから。

僕の事を好きだと。

「今も、嫌いじゃないし、全てを知つた今、憎しみも何もない。だから、救いたいと思った」

僕に手を差し伸べてくれた。

全てを知つたからこそ。

全て。

「でも……」

不意に入る逆接の接続詞。

それまでの言葉を否定する言葉。

「それは無理よ。私は、ヨーキと付き合えない。そんな言い方されたんじゃ、オーケーなんて出せるわけがない」

振られた。

そう、僕は振られた。

「だいたい、貴方だつてそんな気はないんでしょう、私と付き合つ

気なんかは」

だけど、それは予想の範疇。

僕は、幸せを求める。

だからこそ、この行動が必要だつた。

彼女に振られることが必要だつたんだ。

「まあ、今はね。ルリつちも知つてるんだろ?、奏穂の気持ちを?」

「普通に呼び捨てでいいわよ、もう。その質問なら、イエスよ。鈴穂さんに遺書を渡されたわ、私宛の」

中々、僕の勘も鋭いようだ。

用意周到な奏穂の事だ、きっと何かを残していると思った。

今、僕が持つている日記も、彼女が僕に残したものだし。

苦しむだろう、僕のために残した日記。

僕を救うために、僕を引っ張りあげるための日記。

だからこそ、鈴穂さんは僕にくれたわけだし。

そうでなければ、一緒に燃やしたはずだ。

だから、ルリにもそういうものがあるとthoughtていた。

ルリは、全てを許してくれた、受け入れてくれた。

だけど、全てを許せるのは、全てを受け入れられるのは、他の誰でもない、奏穂の言葉がなければ、きっと無理だったと思う。

奏穂の言葉が、思いじゃなければ、きっとルリの心には届かないから。

他の誰かでは、ダメなんだ。

僕が、幸せを求められたように、答えが見つかったのが、奏穂のお

かげのように、ルリにとつても、そうなんだと思う。

だから、たぶん、ルリも全てを知っていたからこそ許せたんだと思う。

救おうとしてくれたんだと思う。

「だから、告白しようと思つたんだ。今は、好きじゃない。だけど、

未来は分からない。その未来にかけるために」

これだけの女っぷりを發揮した彼女だ、きっと僕は好きになると思う。

さつき言つたように、彼女は素敵な人なんだ、未来はきっと好きになるだろう。

だからこそ、ここで告白しておかないといけない。

奏穂の事をおざなりにしたままなんて言つのは許されない。

きっと、一人とも永遠に苦しみ続ける。

今は、もう僕に対する恋愛感情が薄くなっているルリ。

だけど、奏穂との約束もある。

その一つに揺れ動く。

そして、僕もまた、奏穂の願いと自分の思いに揺れる。

そのせいで、一人して、永遠に奏穂から解放されずに、もがき苦し

み続ける事になる。

そんな事を願つていはないはずの奏穂の願いが、僕達を苦しめる。だからこそ、ここで告白する。

しかも、絶対に振られるよつこ。

それは、ここで全てを終わらせるための物。

本当のところ、奏穂が何を願つているのかは、分からない。だけど、僕は、彼女の日記の中で、日記を読んでる内に、浮かんだ。彼女は、もしかすると、僕が一緒になるのは、僕が恋人として選んでいいと思っているのは、ルリだけなんじゃないのだろうか、と。自分が認める、許せるルリだけなんじゃないのだろうか、と。

近くて遠い、親友ルリ。

鈴穂さんや瑞穂さんではなく、ルリ。

でも、それは、奏穂の選んだ道。

彼女が残した道。

僕達が選んだ物ではなくて、選ばれる道。

そんなんじゃ、きっと僕達は、いつでもどこでも、ずっとずっと奏穂の事を考えてしまう。

ルリがどうなのかは知らない。

だけど、僕が望むのは普通の幸せ。

バカみたいな幸せ。

だからこそ、奏穂に縛られているような、彼女が残した道を選べない。

例え、ルリの事を好きになつたとしても、それは、自分の気持ちじやないと意味がない。

時間をかけて、ゆっくりと好きになつていかないといけない。

そうして、初めて、僕達は奏穂を関係なしに、奏穂を殺した事、失つた事から解放されて、向き合えると思つ。

「全く、考える事は同じね？」

彼女は笑う。

彼女もきっと、そんな答えが出ていたんだろう。

大切だからこそ、大好きだからこそ、もう奏穂の事に縛られないようだ。

大好きな人の事を、大切な思い出として、胸のアルバムにしまう。それは、冷たいとか、そういうんじゃない。

大切だからこそ、これ以上彼女を繋ぎ止めない、彼女のために、自分も幸せになる。

あまりにも早く死んでしまった事を、悔いにさせないために。自分の中にいる奏穂に。

「私も、答えは同じ。ユーキとの未来に賭けてみたいと思つてるわ。だから……」

彼女は、笑う。

笑つて、続ける。

「明日、明後日の文化祭、一緒に回らない？」

第十九話 二人の未来（後書き）

これにて第三章終わりです。

次回エピローグ。

ただ、かなり焦つてやつたので、誤字があるかも……
つて、結局間に合わなかつたかww

ヘルローゲ（前書き）

最終話です。

文化祭当日は、穏やかに、そして、綺麗に晴れた。

僕達は、そんな麗らかな天氣の中、いろんなところを見て周った。一緒に買い物したり、展示物を眺めたり、ゲームをしたり。それは、どこにでもいるような男女の当たり前の行動だった。どこにも、特別なものはない。

ただ、流れる時間は自然で、穏やか。

どこにも、刺激的でスリリングな物はない。

僕達は、奏穂が死んでから、初めて普通になれた。

「で、その手は何ですか？」

そう思つてた。

けれど、やっぱり、現実は優しくない。

やっぱり、ルリと一緒にいると、男子からの嫉妬の眼や、やっかみをうけるし、実力行使に打つて出ようとする輩までいる。だから、当然、あちこちに逃げる事になるわけ。

そして、逃げた先が、ここ。

保健室。

「いや、まあ、どうも、ここ最近無沙汰で、身体が疼くのよね。一回、どう？」

まあ、どうなるかなんて予想できただけど、仕方ない。逃げ場所はここしかないわけだし。

「いやです」

それに、ちゃんと拒否すればいいだけのこと。

今までのことを考えると、心苦しいけれど、それは彼女も同じ。お互い、傷つき、そして、答えを出した。

僕が救われたように、彼女も救われたんだ。

だから、変に気を使う必要はないし、むしろ余計な事。

彼女を侮辱することだ。

「まあ、いいじゃない」

「良くない！！てか、脱がすな」
するすると脱がしにかかる彼女。

何度も何度もしてきたことだ、手馴れた様子で、脱がされていく。
「いいじゃない。今フリーなんでしょう？」だつたら、問題ナッシング
でしょ？」

しかも、彼女ももう僕も奏穂の事からは解放されてる事を知ってる。
相変わらず、『女性恐怖症』も『人アレルギー』は残つて。
だけど、それもいつか消えるだろう。

『女性恐怖症』は元々奏穂が原因で出来た物。

失う事の恐怖から生めたもの。

『人アレルギー』だつて、奏穂と付き合つて、奏穂を好きになつて
からは、関係なかつた。

どんなに触れ合つても、僕は、彼女にアレルギーはでなかつた。
穏やかな気持ちでいられた。

だから、もう僕は、それに恐れる必要はない。

だけど、それは、相手にも同じ事が言えるわけで、今まで、奏穂の
事があつて、及び腰だった彼女も、堂々と参戦できると言つ事にな
る。

「だから、いただきまぶつ……」

むちゅっとキスをしようとしたところ、救いの手。

誰かなんていわなくとも分かる。

ルリだ。

「先生？」ううとこひで、こんな事しちゃいけないって常識です
よね？ユーキも、むざむざと食われそうにならないの」

瑞穂さんを引き剥がすと、そう説教すると、ついでに僕も嗜める。
ぐうの音も出ません。

まあ、自業自得だもの、言えませんとも。

「あ、外もそろそろ落ち着いてきたから、出ましょっ！」のまま、
ここに居たら、欲求不満の校医に食われちやうわよ？」

「オケ。食われるのは勘弁だから、さつと行こうか
でも、やっぱり助けてくれた事、それから、ちゃんと様子を探つてくれていた事を感謝。

僕は、彼女の手を取つて、立ち上がる。
横には恨めしそうな眼をした瑞穂さん。
でも、その瞳につつる感情は別。

それは、安堵。

心の底からの安堵。

「まあ、頑張りなさい」

苦笑気味に彼女はそういう。

何を頑張るのか。

今、目の前にある男子からの総攻撃だろうか。
それとも、これから僕達の未来だろうか。

「はい。ありがとうございます」

そんなのは分からぬ。

だけど、どちらだろうと、それとも、それ以外の事だろうと、何だ
ろうと僕は、僕達は頑張らないといけない。
生きている限り、それは絶対に必要なことだから。

「そう思つなら、今度、私の部屋に遊びにぶつ

「そういうお誘いはお断りです」

彼女に対する感謝はある。

答えが出るまでの間、僕が僕でいられたのは、僕が崩れずにいられたのは、彼女がいたおかげ。

彼女と一緒にいたから。

だから、ものすごく感謝してる。

けれど、それとこれとは、やっぱり別問題。

「さ、行こっか？」

僕は、取つた彼女の手を握り、歩みだす。

これから、始まる、また、今までとは違つた新しい生活へと。

「ああ、そんなんD5な夕貴もすてぶつ！！」

まあ、その道のつは前途多難そつだけど。

小さな部屋に少年と少女が居た。
これは、僅かな時間しか与えられなかつた少女のお話から始まつたお話。

始まりの少女のお話は、少女には救いを、少年には絶望を与えた。

少年は、絶望し、深い深い闇の中に墮ちていつた。

そして、始まりの少女のお話から始まつた次のお話。

そこでは、女性と少年と少女が複雑に絡み合つた。

絡み合ひ、女性は新たな道を、少年と少女は救いを手に入れた。
女性は、嘆きながらも、悲しみながらも、それでも前へと進む。
少年と少女は、初めて出会つた小さな部屋で、かくれんぼ。

始まりの少女と少年と少女。

彼らの願いは、確かに叶つた。

例え、最初の願いの形から変質していいたとしても、叶つたことは変わりはない。

「やれやれ、ルリの鬼さ加減を見たら、絶対ファンはドン引きだよ
なあ」

「うつさい！！」

「いつたいなあ。全く、喜ぶのはドンぐりこじやないのか？」

「なら、あんたもドンの仲間入りね」

小さな願い。

それは、決して特別な物ではなく、ひどくありふれた当たり前の物。
何にも縛られることなく、ただ、純粹に呑気にバカみたいに生きた
い。

そんな願い。

「まあ、でも、いい女だよ、ルリは」

少年は笑う。

バカみたいに、呑気に笑う。

「まあ、あんたも、割といい男よ、ユーキ」

少女も笑う。

穏やかだけど、平和ボケしたように笑う。

それが、合図。

終わりの合図。

ひどくありふれたお話の終わりの合図。

そして、新たに始まるお話しの合図。

誰もが歩む普通の生活のお話しへの始まりの合図。

だから、静かに幕を。

二人のこれからを見守るために。

ヘルローゲ（後書き）

とつあえず、あとがきはまた後で書きます。

あとがき

幾分、遅くなりましたが、はじめまして、作者の霧野ミコトです。
まあ、はじめまして、じゃない方もいらっしゃるかも知れませんが。
さて、今回の作品。

どんと恋ですが、とりあえず、偶然、とこうよりも、想定外の事が
重なつて、出来上がった作品です。

本来は、短編で済ませるつもりだったものです。

ただ、追加設定を入れて行く内に、ストーリーがどんどん膨らみ、
こうして、割かし長くなつたわけなんですが。
おかげで、ところどころで、言い訳染みたよつたモノローグがあつ
たりしたわけなんですがね。

まあ、本当に帳尻合わせに奔走してましたからね。

鈴穂のことしかり、瑞穂のことしかり、奏穂のことしかり、瑠璃のこと
しかり、と。

でも、その分、楽しかつたですが。

思い通りに行かないほうが、僕個人としては書き甲斐がありますし
ね。

ちなみに、続編は、書く気は、今のところございません。

せいぜい、短編をちらほら書くかも、とこう程度でしそうね。

ここから先は、自分の中では出来上がつて届ますが、正直、小説に
するほどのエピソードはありません。

ドラマティックなことはないですし、したくありませんから。

それに、私自身としては珍しいですが、この完成の形で納得してま
すし。

もちろん、技術的に見たら、まだまだなんでしょうが、それでも、
今の僕に出来る最高のエンディングだと思っていますので、続きを
期待しての方がいたら申し訳ありませんが、諦めてください。

今回は、今作品を読んで戴いてありがとうございました。

作家の霧野リコトでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9976c/>

どんと恋

2010年10月8日14時28分発行